東京月例研究会200回達成記念特大号

UFO contactee

GAP-JAPAN NEWSLETTER
UFOと宇宙哲学の専門誌
コンタクティー

私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性
春川正一

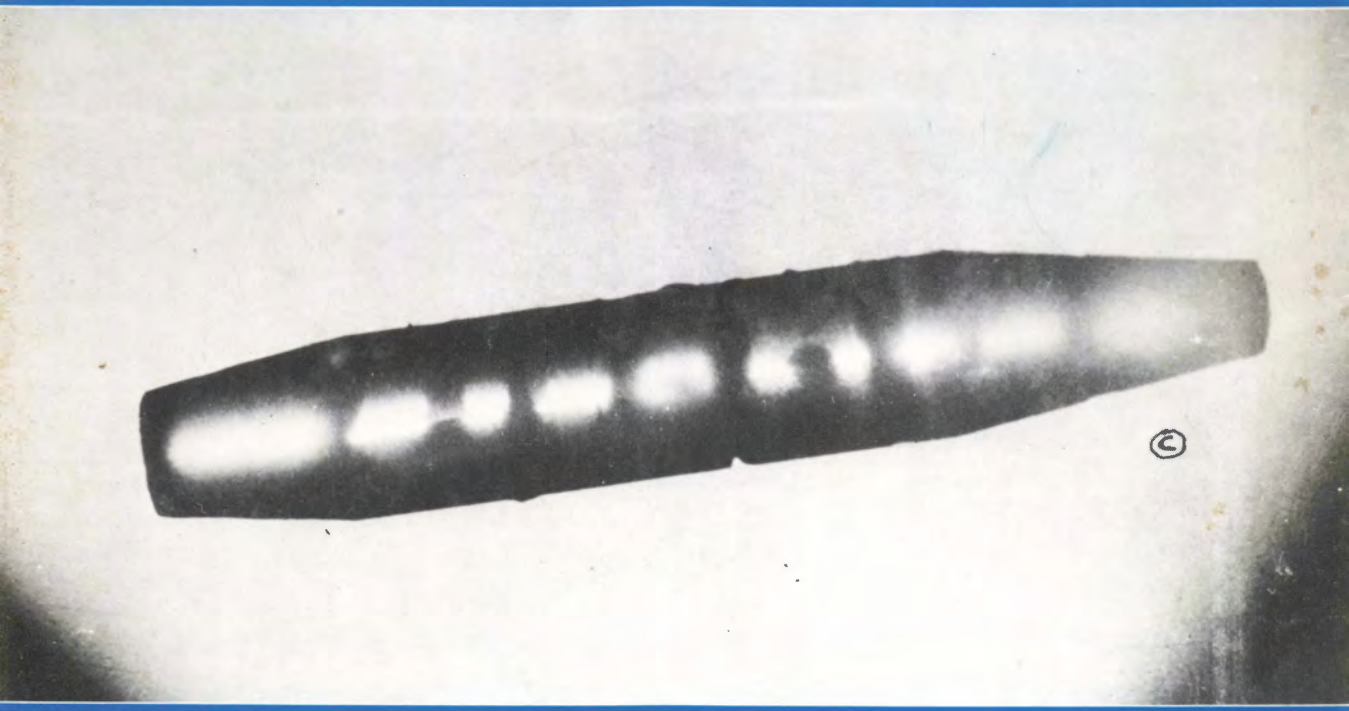
WINTER
1986
95

茨城県千代田村のUFO

アダムスキー問題に対する考察

私のUFO目撃と不思議な体験

ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤



UFO contactee　95号目次

〈巻頭言〉テレパシー——1
茨城県千代田村のUFO——日本GAP茨城支部　2
アダムスキー問題に対する考察——内田格男　6
私のUFO目撃と不思議な体験——中嶋順子　10
ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤——久保田八郎　16
「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」に参加して——26
GAP短信——29
空前の大盛況!「61年度日本GAP総会」——30
私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性——春川正一　32
〈投稿欄〉ユーコン広場——43
〈予告〉61年度地方支部大会〈その4〉——45
〈広告〉アダムスキー全集／英文版ユーコン——46
〈広告〉62年度「アメリカ西部・メキシコの旅」——47
全国月例研究会案内——48

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1．この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2．他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3．ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

■表紙写真は1952年5月1日、ジョージ・アダムスキーが6インチ反射望遠鏡で撮影した金星の大母船。

〈巻頭言〉

Telepathy
テレパシー

「もはや何者をも信じられなくなった。皇帝陛下でさえも信じられない。信用できるのは妻だけだ」

鉄血宰相ビスマルクは新帝ヴィルヘルム二世と事毎に対立し、ついに悲愴な人間不信論者におちいった。十九世紀ドイツ第二帝国建設の偉大な功労者も、澎湃たる人間平等思想の勃興に伴う新時代の趨勢が読み取れず、対社会主義勢力政策に失敗、封建の旗印を降ろして敗退した。これによりドイツの外交はヨーロッパの現状維持政策から世界政策へ移行したのである。

時代を読み取るとは人間の想念内容を読み取ることにほかならない。これが不可能であれば不信感が起こり、劣敗の結果を招きかねない。自由経済圏の事業は何にせよ一種のギャンブルだが、管理能力や専門知識だけで経営に成功するとは限らない。大衆のニーズ（求めている物）を的確に見抜く必要がある。つまり大衆の想念をキャッチするわけだが、これには万物から発する波動を感知する能力を要するのである。

世の中にはときたま勘の鋭さ抜群の経営者がいて、市場の動きに敏速に対応しながら新製品を提供して大儲けするが、これは実務能力や技術の次元を超えたテレパシックな感覚が最有力な武器であることを実証するものだろう。ある大手家電メーカーの「ポケットに入れて歩きながら音楽が聴ける機械」を出して大当たりをとった例では、再生専用で録音不可能な機械など売れるはずはないという社内の猛反対を押し切った一幹部の「必ず売れる」という強力な直感が功を奏して大成功をもたらしたという。

「歌手のレコードを出す企画は社内の多数決に頼ったらだめで、勘の鋭い一人の専任者にやらせるに限る」と、一レコード会社の経営者が語ってくれたことがある。十人の鈍感な社員の〝休むに似た〟考えよりも一人の敏感な人間の脳裏の閃きがものをいうという意味だ。

以上の実例を考えるとテレパシー能力ほど重要なものはない。しかも人間は大なり小なりこの力を無意識に応用しているという。この能力は万人に潜在するので、トレーニング次第で強力に発現するとアダムスキーは説いている。オーラ透視もテレパシックな感知力の一種である。万物から発する波動をキャッチしているからだ。

本誌に連載中の「私は別な惑星へ行ってきた！」（本号では休載）を偽作だという人がある。あれほどの記事内容が読み取れぬということは、記事から発する波動が感知できないということなのだろう。この程度なら人命にかかわることではないが、墜落する運命にある飛行機に引っ張り寄せられずに難を避けるのは本人のマインド（心）が行うのではなく、事前から予知している内奥の実体である。テレパシック感覚を持つ実体だ。これをアダムスキーは〝万物に宿る宇宙の意識〟と呼んでいる（『生命の科学』より）。

テレパシー。万物の波動をキャッチして正確な指針を与える実体！　この発見こそは二十一世紀の最重要な課題となるだろう。すでにニューサイエンスなどにその曙光が見えているし、米ソの科学機関では相当な研究が行われていると聞く。

この能力開発は容易ではないが、まるきり不可能でもない。否、練習次第ではだれでも開発可能であり、GAP会員中で実績を上げている人もある。たとえば九月上旬に届いた清水南氏（山梨県）の報告によると、今年五月四日の静岡支部大会で伝えられたオーラ透視練習法を毎日続けた結果、七月頃から突然他人のオーラが見え始め、八月には森や山のオーラがカラーで見えたという。そしてテレパシー能力も少し出てきた。こうして宇宙的能力の世界に足を踏み入れた氏は「練習することによって確実に能力が出てくる」と述べている。

最大の秘訣は、いかに多忙であろうと毎日十五分間、絶対に休みなしに開発練習を続けることにある。中断したらだめなのだ。しかも「必ず開発できる！」と信じ込み、開発できたイメージを描きながら練習を続行する。

この毎日練習は外国語の習得にもあてはまる。時折の練習ではだめで、毎日一定量の時間を作って絶対的に続けるのが英会話上達の最後のカギである。しかも一つの英短文を確実に暗記したことを確認するまでは他の短文に目を移さないようにする。一見牛歩に似ているが暗記文の量がふえるにつれて加速度がつき、ついには急上昇が可能になる。超能力開発も一歩一歩マスターしながら次のステップに移るのがよい。性急にやると挫折するだろう。

美しい人生。天国のごとき平和な社会。それは愛と調和に満ちた社会の実現を意味するが、その根底には万物に対する理解力が要素をなしている。その理解力とはマインド（心）だけに頼るのではなく、自己の内部の〝宇宙の意識〟から来る印象の感知が主体となる。こうして他人の想念内容ばかりでなく、動植物の意志を知り、無機物にこめられた人間の残留想念波動の感知が可能になれば人間の迷いは消滅するだろう。迷いとは外界が読み取れぬ状態である。偉大な進化をとげた別な惑星群の人々はこれを達成しているという。地球人にもやれるはずだ。（久）

茨城県千代田村のUFO

目撃者の切望にこたえて出現した？

●調査＝日本GAP茨城支部（石井晴美、伊藤睦史、清水勝一）

昭和五十九年六月六日、水曜日、茨城県の筑波研究学園都市での仕事を終えて石岡市府中の自宅に向かっていたギターリストの北村友昭さん(39歳)は、夜九時すぎ頃、国道九号線上で車のハンドルを握っていた。上り線側ではかなり頻繁に車とすれちがったけれども、下り線は道路がすいていた。

午後九時三十分少し前頃、新治郡千代田村の下稲吉の付近に来た頃、得体の知れぬ胸騒ぎを感じた本人は、気になりながらもそのまま車を走らせた。

空は晴れていたが、大きな星は見えない。その土地の上空には航空路があるのだが、当夜飛行機は飛んでいなかった。

少しばかり走って、ゆるやかなカーブを曲がった所で、車の前方正面の上空に浮かんでいる一個の光体に気づいた。黄色っぽいオレンジ色に輝く、木星ほどの明るさの物体だ。

最初は星かと思ったが、星とは違うような物らしいと気づいて、気にしながらも運転を続けていた。スピードは四十ないし五十キロ程度である。

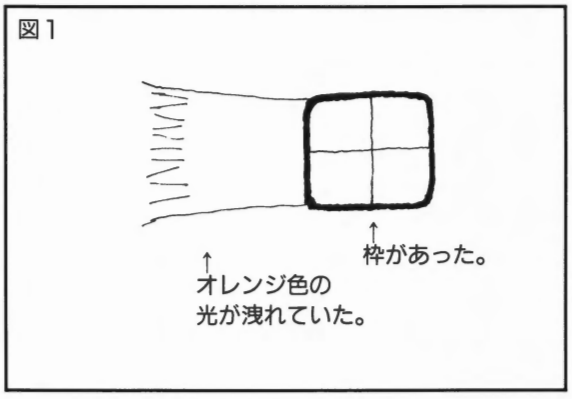
カーブを通過して光体を見ると、前と同じ前方正面の上空に見えている。さらに前進を続けて上土田の部落が左に位置するあたりのゆるやかなカーブにさしかかったが、光体はやはり前方に見えていた。注意深く観察すると、光体は進行方向にゆっくりと移動しているのがわかった。

さらに前進を続けて下土田付近を通過したとき、その光体が急速に頭上に接近してきた。このとき北村さんは初めて気づいたのである。

「あっ、これはUFOだ！」

光球ネックレスの出現と消滅

その光体は四角な形をしており、その中に窓枠のような区切りがあるように見えた。物体全体は明るく輝いて、左側は光がにじんでいるような感じだ。まるで真っ暗な野原の中の一軒屋の窓から黄色っぽいオレンジ色の光が洩れているように見える。



光体は音もなくスーッと接近して、頭上へ来たので、フロントガラス越しに見えなくなった。

北村さんは急いで車をすぐそばの千代田食堂というレストランの前の広場に乗り入れて停め、カメラを持って車外に出た。九時三十分頃である。

カメラを構えて頭上を見上げた北村さんは一瞬首をかしげた。光体が消えてしまったのだ。

「おや、どこへ行ったんだろう？」

約五～六秒間、光体のいた空中を見ていたが、ふと左方を見てアッと驚いた。自分の視角いっぱいに入るほどの巨大な物体が空中に浮かんでいるではないか！　隣のゲームセンターの上空に停止しているらしい。

呆然として見つめる北村さんの目に映ったものは、沢山の光の球が円形に並んだ光景である。ただ光の列が見えるだけで、物体全体の輪郭は暗くて判然としない。

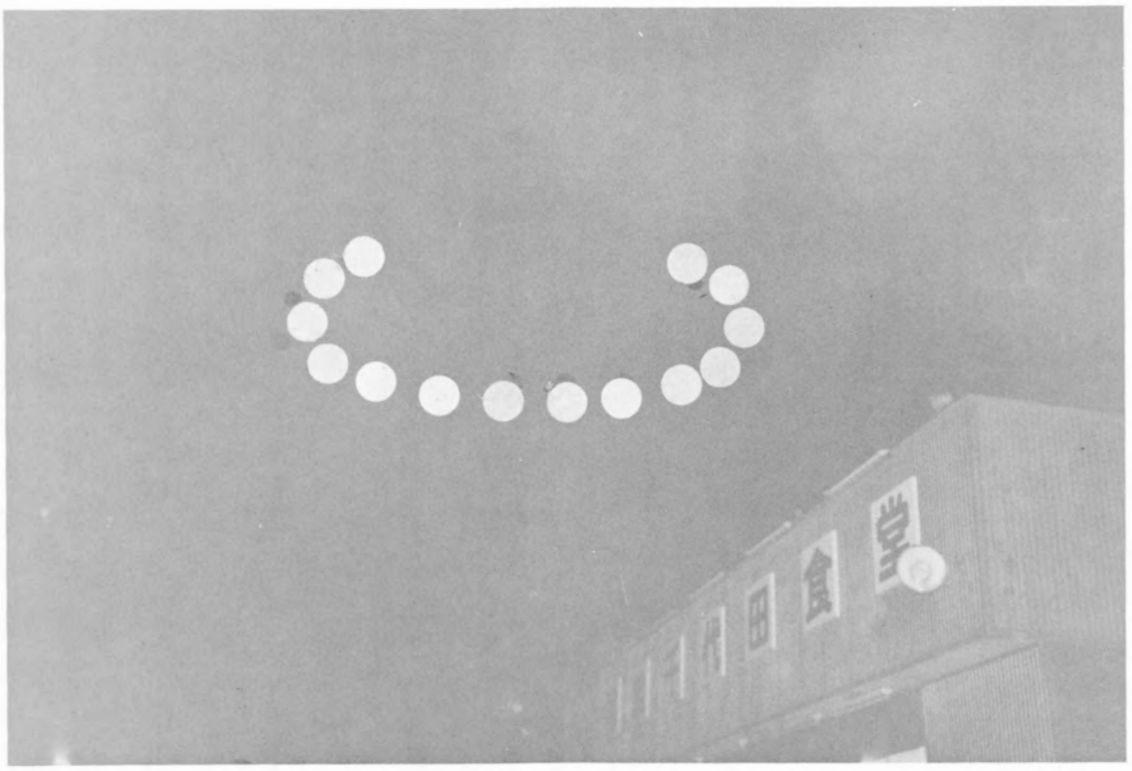
各光球は青からダイダイ、赤っぽい色へと色光を変化させる。電圧不定時の白熱灯の光量変化みたいにゆっくりと光量も変化している。目に突き刺さるような強烈な光ではなく、淡い柔らかな光だ。しかもこの光球ネックレスは左回りに回転している。

しばらくして我に返った本人は夢中でカメラのシャッターを切った。ストロボも発光した。

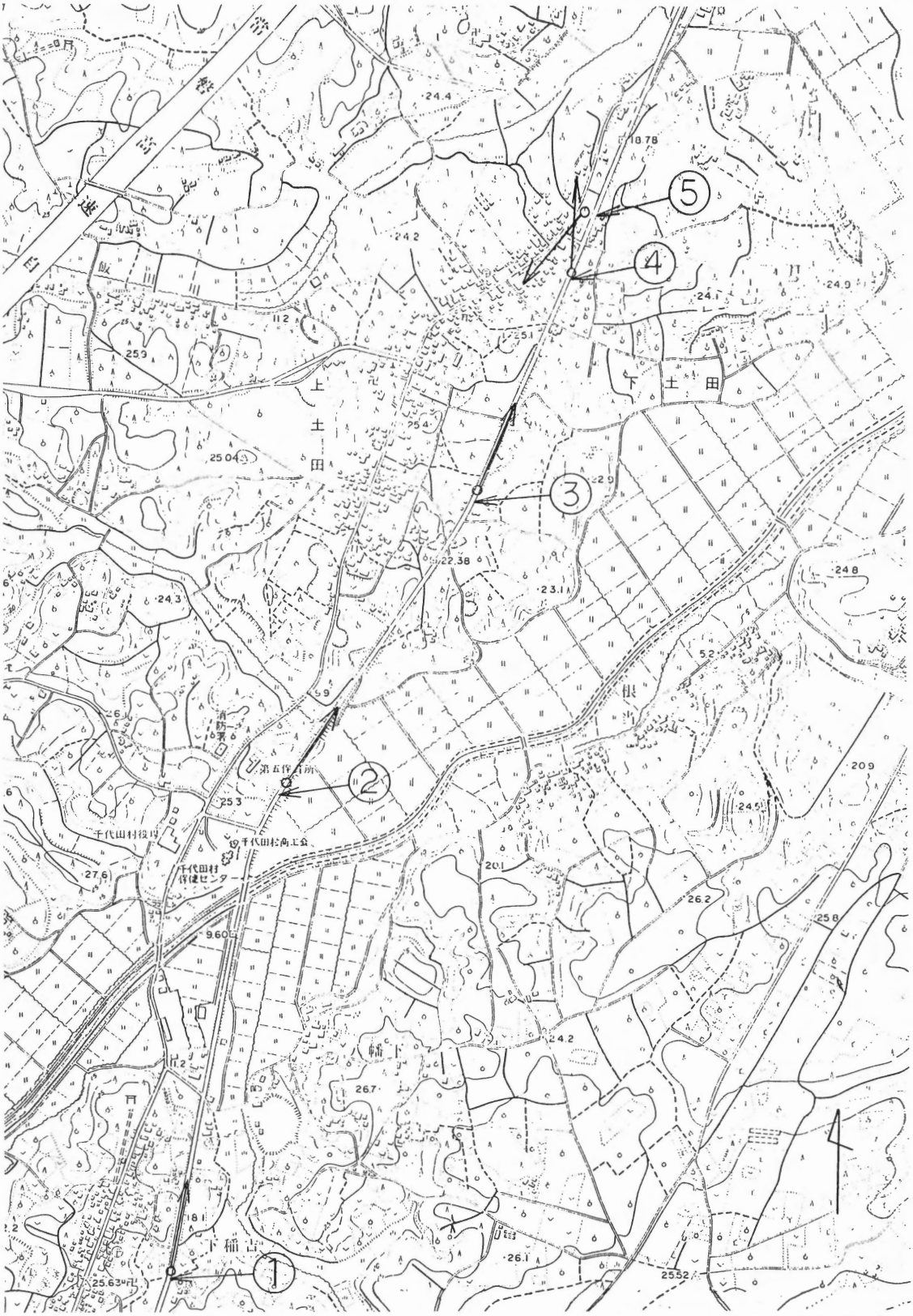
カメラを目からはずして、確認のために肉眼で空中を見た北村さんは、またも驚いた。光球ネックレスがいないのだ。ストロボの発光とともに一瞬で消滅してしまった！　発見してから約三分が経過していた。

"何か"を待っていた目撃者

目撃者はUFO（未確認飛行物体）について全く無知だったわけではない。二年前まではUFOにたいして格別の興味はなく、聖書などに出てくる未知の物に興味があった程度だが、五十九年以後はなんとなくUFOを見たいと思うようになった。気分のよいときや



▲上の写真は食堂の隣家上空に停止した光球ネックレス（写真に描き込んだもの）。
下は白昼現場に立って上空を指す目撃者・北村友昭さん。



▲目撃場所付近の地図〈1万分の1〉　図中各矢印は光体の見えた方向を示している。①～③までは第1光体は道路の正面に見えていた。④でその光体は北村さんの方に接近し、⑤で見失うが、次に背後に第2光体を発見。

想像力が豊かにわいてくるときなどは、UFOを目撃するイメージを描いていた。寝る前は特にそうしたが、いつもやっていたわけではなく、しかもUFOの具体的な形は想像できなかった。

UFO（空飛ぶ円盤）の存在は書物やテレビによる外部情報で確信していた。

大体に二十歳の頃から〝何か〟を待っているような感じがあった。何を待っているのか、自分にもわからなかったが、UFO目撃後にその期待感は薄れてしまった。そして精神的に大幅に変化したのである。

まず心境の変化が相当にあった。物事の考え方や習慣による見方が変わってきた。習慣にとらわれないで、いろいろな角度から考えるようになったのだ。包容力が増大し、一般には認められていないような物事を認めたり理解したりするようになった。そして自分の目撃事件が記事になることで肩の荷が降りたような気がしてホッとしている。

UFOは目撃者の希望に応じた？

北村さんが目撃したUFOは運転中の第一のUFOと、停車後の第二のUFOの二種類に分かれるが、本人の証言にもとづいて計算したところ次のような結果が出た。

まず北村さんが下稲吉で車の正面に光体を発見する。その光体はその位置に約六十九秒停止して、次の十一秒以内に右へ二十四度移動する。そしてその位置に五十四秒停止した後、今度は六秒以内に左へ十一度移動し、そこに五十五秒停止し、その後の約十四秒で自動車に接近して姿を消した。

第二のUFOについては、北村さんの撮影した写真（ただし光球ネックレスは写っていない）と証言から、光球ネックレスの長径を計算すると、キャビネ判の写真内で約八センチと出た。しかしこれは写真上の長さであって、実際の長さは目撃地点から光球ネックレスまでの距離が不明のために決定できないが、ゲームセンターの上空に停止していたという説明から計算してみると、長径は約十三メートルとなる。したがって目撃者から物体までの距離は約三十メートルという至近距離となる。

第一と第二の光体を目撃したときには対向車がかなりいたけれども、だれも車を停めなかった。ただ北村さんだけがかねてからUFOに関心があり、目撃したいという強烈な想念を放っていたために、スペース・ピープルが本人の要望に応えたのではないか。

この第一と第二の光体の輪郭が特定できず、正体はまさにUFO（未確認飛行物体）で終わったが、北村さんと数度会見して話を聞いた限りでは、その説明に一貫したものがあり、造言ではないとの印象を得た。

しかも多くの車が通過したにもかかわらず、彼一人だけが見たというのは、何者かの特殊な操作によって彼だけに目撃させた意図がうかがわれ、そのようにみると、光体はまぎれもなく空飛ぶ円盤だといえよう。

円盤出現の目的としては北村さんを新しい発達段階に入れるために過去から計画されていたと思われるのである。

胸騒ぎとUFO出現の関連性

UFO出現直前に目撃者が胸騒ぎを感じたり何らかの気分の変化を起こす例は多い。有名な例としては一九五四年二月十五日、イギリス・ランカシャーのコニストンで撮影されたコニストン円盤がある。

この日、医師の息子のスティーブン・ダービシャー（十三歳）は従弟のエイドリアン・マイアーとつれだって家を出てから裏山へ登ったが、家を出る前から胸騒ぎを感じていたという。そして小高い丘の上から、雲間より突然降下した円盤を撮影したのである。これはアダムスキー型円盤であり、アダムスキー撮影の金星の円盤の傍証として一躍世界のUFO研究界の脚光を浴びるに至った**（コニストン円盤の写真は本号7頁に掲載）**。

国内の例としては、昭和四十九年十月に広島県尾道市で発生した円盤撮影事件がある。同月十一日の朝、六時二十五分頃に目を覚ました市内栗原町に住む、当時県立尾道工業高校化学工学科一年の藤松和彦君は、目をあけて横になっていた。

そのとき急に胸騒ぎが起こってきた。一種の不安な気持にかられてイライラしてくる。体調はよいのに頭が普通でない。いぶかりながら起きて南側の窓をあけた。

そして南東の千光寺山の上空に浮かんでいる細長い黒い物体を発見したのである。最初静止しているように見えたが少しずつ動きだした。UFOだ！と俄然元気づいた同君は机上にあったコダックインスタマチック20というカメラをつかんで二枚撮影した。

この物体が北西の久山田上空に消えてからまもなくその方向から逆にアダムスキー型円盤が出現したのでこれも続けて三枚撮影した。これが尾道円盤として名高い写真である（写真と詳細な記事は本誌90号に掲載）。

胸騒ぎと円盤の出現。この間には何らかの関係があると思われる。地上で強力な証拠を残すために、UFO乗員が地球人の特殊な人を選んで、事前に何かの特殊なビームを放射するのだろうか。

ひとつ確実な事がある。この〝選ばれた人たち〟は誠実で正直な人であるという事実だ。これも目撃者になるための条件なのだろうか。

Adamski Tells the Truth

アダムスキー問題に対する考察

冷静に考えてみればわかる

■内田格男

H様　お手紙と資料を大変有難うございました。宇宙開発における面白いエピソードを興味深く読ませて頂きました。本を作り、発行することのご苦労をお察しします。これからも頑張ってお励み下さい。

さてお手紙を拝見しまして、私はあなたの心の変換に興味を持ちました。最初、円盤に興味を持ち、アダムスキーを支持し、そしてアダムスキーから離れ、反アダムスキーとなり、それから今はUFOを内的空間の超意識の産物だと確信しておられます。

UFOは心理的現象ではない

私はカール・ユングの『空飛ぶ円盤』を読みましたが、カール・ユングは円盤の全てが心理的現象だとは言っていません。『心理学以外の観点から見たUFO』というページを読みますと、UFO現象は二面あると指摘しています。大部分の心理的現象と、どうしてもそれだけでは納得がいかない、全世界で撮影された写真類や、レーダーに映るUFO、それから着陸時に残された物理的な痕跡等々による実在物としてのUFOです。

ジョン・A・キールの書は読んだような気がしますが、UFO現象が全て心理的現象だとすれば、UFO現象が数式で解明されるとは、とても信じられません。人間の心は宇宙と同じくらい気宇広大な広がりと深さを持つ可能性を有しており、人間の心はそれほど単純ではないからです。これはあなた自身の心を数式であらわせるかというのと同じで、私なら「ノー」と答える以外ありません。

またUFOを物理的現象として投影出来るほどに地球人が超能力者であり、魔法使いであるとも思えません。世界中には何千回という円盤目撃がありましたが、それがかりに心の深い超意識世界から来たものとすれば、UFO目撃があったのと同じほどに魔法が行われたということになります。つまり、この地球には何千人という魔法使いがいることになるのです。そしてこの魔法のほとんどがUFO現象に限るということ自体、おかしなことではありませんか。

強烈に輝く円盤を目撃

私が円盤を実在のものと確信するのは、私自身、円盤を三回目撃したからです。最初は母と、二回目は友人たちと見て、三回目は自分一人で見ました。母と目撃したときが最も強烈でした。学生時代の円盤を知らないときでした。

午後三時頃、私と母は座敷で片肘をついて寝ころび、外を見ながら世間話をしていました。すると突然、強烈なコバルト色を発光した丸い円形の金属的な物体が、見ている空間に現れました。ほんの一～二秒静止した物体を凝視したと思ったら、アッという間に天空へ飛び去って行ったのです。

私と母は「わーっ」と声を発しながらガバッと同時に起きて顔を見合わせ、「今のは何だろう?」と、しばし呆然となったのを今でも覚えています。

その円盤は丸い外形と、その中にもう一つの丸い輪があったように見えました。見かけの大きさは五円玉ぐらいで、それが強烈に輝いたのです。目撃したのは数秒間でしたが、それは物理的、金属的な物体としか考えられませんでした。

私は自分が見たもの、信じるものに対しては忠実でありたいと思っています。人があのように言ったからとか、世間がどうだからというので自分の考えを曲げるわけにはゆきません。また自分自身を裏切るような卑怯者にはなりたくないのです。彼らが訪問する意味を考えて、それに答えなければなりません。

アダムスキーは真実の人

私はアダムスキー氏の体験は本物だと思っています。例えば最初のモハービ砂漠におけるコンタクトのとき、同行した六名の目撃者がいます。彼らは事の仔細を双眼鏡で見ており、証人として宣誓書にサインしております。

アダムスキーは、人間の心というものはうつろいやすく信頼できないものだということを知っていました。だから宣誓書にサインさせたのです。宣誓書というものは簡単にサインできるものではありません。しかも彼らは現在も、あるいは死ぬまでアダムスキーの

▲コニストン円盤

■上左は1954年2月15日、イギリス・ランカシャー・コニストンで当時13歳のスティーブン・ダービシャーによって撮影されたアダムスキー型円盤。コニストン円盤と呼ばれて名高い。この写真はむかしイギリスのUFO専門誌「フライイング・ソーサー・レヴュー」誌編集長から編者(久保田)に贈られたもの。
■上右は目撃現場に立つスティーブン・ダービシャー(左)と従弟のエイドリアン・マイヤーの雄姿。

体験は事実だと言明しているのです。

次にアダムスキーが円盤から受け取った奇妙な図形と、マルセル・オム教授が発見したペドラ・ピンターダの図形の一致があります。そしてスティーブン・ダービシャーのいわゆるコニストン円盤とアダムスキー円盤の動かしがたい一致もあります。それからベーカー軍曹の円盤撮影もあります。彼も宣誓書にサインしています。まだあります。英国の七名の科学者によるアダムスキー型円盤目撃証言もあります。

これら全ての人たちがアダムスキー氏とグルになって世界中をペテンにかけたというのでしょうか？　そうだとすれば全く馬鹿げていますし、ナンセンスです。権力を持った政府機関ならいざ知らず、アダムスキーという微力な一個人が、それほどまでに力を行使できるとは思われません。ある人はベーカー退役軍曹とアダムスキー氏との離反問題を引き合いに出すかもしれませんが、彼は元軍人で権力に弱く、脅迫に屈したのかもしれないと考えるならば、やはりその当時の宣誓書を信じるのが妥当というものです。

多くのバカげた発想と推理

英国のスティーブン・ダービシャーとエイドリアン・マイヤーの撮った写真もアダムスキーが小細工をしたという人がいますが、これほど馬鹿げた発

想はありません。これまでの研究の結果、十歳の少年が写真を捏造した事実がないことは明白です。また当時、彼らはアダムスキーを知らないと言っています。

アダムスキーが小細工をしたとすれば、まず十歳の少年たちから裏山の写真を送ってもらい、その写真に円盤写真を写し込んで合成し、それをフィルムに撮り、それを現像しないまま少年たちに送り返し、その少年たちが合うかどうかわからないフィルムを彼らの写真機に入れ、少年たちがそのことを親に話し、親がそのフィルムを現像所に持って行くということになります。あるいはアダムスキーが合成写真を少年たちに送り、少年たちがその写真を彼らの写真機で複写しなければなりません。私も複写をしたことがありますが、素人には非常に難しいものです。

私は何度も失敗しましたし、本あるいは写真という被写体を、フィルムからはみ出ることなく収めるなんて不可能でした。少年たちがこれを一度でなし得たとは思われません。しかもあの写真機で複写ができるかどうかは疑問です。

また専門家による鑑定の結果、二重焼付けや複写その他のトリックは認められていません。親もグルだったと言う人がいるかもしれませんが、ペテンが見破られて信用を失うかもしれないような小細工の手伝いを果たしてするでしょうか。また将来ある子供たちにそのような教育をするでしょうか。またアダムスキーが自分のペテンの片棒を、わずか十歳の少年たちにかつがせるほどに愚かであったとは思えませんし、彼は人の心をそれほど信用してはいませんでした。そのようなことをすれば、いつかバレることを知っていたからです。

アダムスキー氏が宇宙で目撃した宇宙花火や宇宙ホタル、そして彼が言及した放射線帯（バンアレン帯）の存在等、これらは後の宇宙飛行士たちの証言や宇宙科学によって証明されています。しかもアダムスキー氏はこれらを目撃したときに非常に驚いているのです。

コンピューター鑑定こそトリック？

アダムスキーの写真をコンピューターで鑑定したらトリックが証明されたと言われていますが、このコンピューターの鑑定ほど人々がひっかかりやすいものはないのです。アダムスキーの体験をなきものにしようとするならば、アダムスキーの円盤写真の上部にクモの糸を張り付けて、それを複写してコンピューターにかけます。コンピューターは吊された円盤として糸を検出する。人々は科学に弱いのでコンピューターを信奉する――。

コンピューター鑑定では、葉巻型母船を写した写真は豆電球を使ったトリックだったということですが、ではなぜ丸い電球が細長く、または円盤形にボワッと写っているのでしょうか。

電球を写真に撮った場合、電球そのものとしか写りませんし、絞りをしぼって写した場合は確かに円盤のように写りますが、クッキリした球体で、細長くボワッとは写りませんでした。

それからおかしいのは電球の配線です。コンピューター鑑定写真ではこれみよがしに電球の配線がクネクネと目につきますが、普通トリック写真を作ろうとするのならば、配線などは写らないように、死角になるように、電球の後ろに持って行くことでしょう。このようなことは小学生でも考えるでしょう。また、これほどの豆電球でこれほどの配線が写し出されなかったとは信じられないことです。私はコンピューター鑑定自体にトリックがあると確信しています。

アダムスキーはなぜ円盤物語をSF小説として発表しなかったのでしょう。その方が彼としても楽であり、今でも空想小説家としての名声を不動なものにしていたはずです。世界中で目撃されるアダムスキー型円盤や宇宙の状態、ペドラ・ピンターダの図形等々、これらの不思議な一致に、世間はH・G・ウェルズのごとく彼に脱帽し、称賛していることでしょう。脅迫されることもなく、ペテン師呼ばわりされることもなく、SF小説を沢山書いて金儲けもできたはずです。しかし彼はあまりにも正直であったために事実を曲げようとはしませんでした。

誠実さがものをいう

「アダムスキーは全世界から来る膨大な手紙類にたいして、来た順に一つ一つ返事を出していました。その費用だけでも相当なもので、彼が亡くなったときには二十万ドルもの借金があったそうです」（一九八二年度日本GAP総会における久保田会長の講演より）

世界GAPがいまだに貧乏していて富を得ることなしに活動していることを考えれば、一部の人が言うように、金儲けのための活動でなかったことは確かです。

宇宙からの訪問者たちは、地球人の精神状態をチェックする能力を持っており、本人以上に本人のことを知っているということです。アダムスキーの持つ誠実さと堅固な精神がコンタクトマンとしての資格を得たのではないでしょうか。あなたが自著類を他人にさしあげる場合に、文盲の人にはさしあげないはずです。

このことは宇宙人とて同じことです。宇宙の意識に関する知識を地球人に伝えようとする場合、激しくチェックするはずです。不誠実で貪欲な人を伝え手として選ぶでしょうか。また我々の

ように時とともに心変わりする薄弱な精神の持主に、高度に進化した人たちが接触してくるとは考えられません。円盤すら見せてはくれません。

アダムスキーほど自分自身を知っていた人はいなかったと思います。彼の体験が現実のものか空想か夢かは心得ていたはずです。

彼の著書類を読みますと、彼は近いうちに人類が宇宙へ飛び出すことを予感していましたし、何よりもそれを望んでいたことがうかがわれます。そのような彼が作り話を事実だと言うこと自体、納得のいかないことです。事実だから事実だと主張したまでのことではないでしょうか。

アダムスキー排除は人類の損失

宇宙人がアダムスキー氏にコンタクトしたもう一つの真意は、UFO推進原理の手がかりを地球人に与えることにありました。宇宙人が与えた奇妙な象形文字やアダムスキー型円盤、それからアダムスキーがあれほどまでに宇宙船の内部を記したことに宇宙人の真意がうかがわれます。

アダムスキー型円盤はUFO推進原理の基本形だと思います。現代の化学燃料では多人数の宇宙旅行は無理です。だから宇宙人は引力を克服しなければならないと言明しているのです。アダムスキーの著書類にUFO推進原理の秘密が隠されているとすれば、アダムスキーを誹謗し、捨て去るのは、人類にとって大きな損失だと思います。

これらの理由により、私は私の著書類からアダムスキーや宇宙人を消すつもりはありません。それは人類にとって夢であり、希望であり、そこに学ぶべき何かがあると思うからです。

世を救い人を救うのにUFOや宇宙人を持ち出すから、人々はまたまた迷うというご指摘ですが、人々が迷っているのは今に始まったことではありません。人々が迷っているのは、自分自身を知らず、人間や生命の何たるかを知らず、生きるべき理由を知らないからです。私はアダムスキー氏を知ったために人生の何たるかを認識し、正しく生きることに迷わなくなりました。

私の著書を受け取った政治家やマスコミ記者の中には、正しく生きることに迷わなくなった人がいます。その人たちは金権批判や政治倫理確立を叫び、正しき道を歩もうとしています。

私は教祖みたいに人の上に立って人々を指導しようとは思っていません。私の知識を人々に知らせて、人々に正しき道を指し示すだけです。それから先は人々の良心と行動に託されるべきだと考えています。現代常識という厚い本の中に新しい考えをはさみ込み、悪しき常識を排除して常識を正しきものとする。これは亀のようにのろいかもしれませんが、確実にゴールに着くものと思います。

世の中が私について来ようが来まいが、そのようなことは問題にしておりません。数名の人が私に援助を申し出たことがありますが、私は丁重にお断りしております。私について来たところで、その人の覚醒にはならないからです。その方の能力と分野で生かされた方法があると思うからです。その場合、私の著書の中で利用する箇所があればどんどん利用して下さいと申し上げております。

私の書物はUFO関係者には三十名ほどしか配布しておりません。ほとんどは政治家、マスコミ、学校関係といった人たちへ配布しております。だから、あなたの言う「UFO狂信者のバイブル」にもなり得ないでしょう。

狂信者とは充分に吟味もせずに信じ込む人のことを狂信者といいます。私のような〝アダムスキー狂信者〟から見れば、充分に吟味もせずにUFOを心理的現象の産物と確信されるあなたも狂信者といえるのではないでしょうか。

明るい希望が残されている

私たちアダムスキー支持者にとって喜ぶべき決め手が残されています。その日は明日になるか十年先になるか、百年先になるかはわかりませんが、アダムスキー型円盤と同型の円盤が政府かマスコミ等の公的機関によって映画か写真に撮られ、発表される可能性があるということです。

本年三月九日、北海道旭川市の津田頼明君がアダムスキー型円盤を撮影していますし（注＝本誌78号に詳細記事と写真を掲載）、今年のUFO関係の雑誌にもカナダにおいてアダムスキー型円型と同型の円盤が六月十八日に目撃され撮影されたことを記しています。

このように依然として世界中でアダムスキー型円盤は目撃され撮影され続けています。アダムスキー型円盤が世界中で認められる日は意外と近いかもしれません。

長い手紙になりましたが、簡単に私の考えを述べさせて頂きました。

あなたはとても善良な人だという印象を受けます。しかしお互いに気をつけなければならないことは、自己の主張を正当化するために相手を口汚くのしるべきではないということです。私はT氏の文章を読んだことがありますが、あまりの悪口雑言に大変不快になりました。それは文章というよりもペンの暴力以外の何物でもないと思いました。その人の人間性を疑われても仕方のないことです。お互いに注意しましょう。

それでは、より良き社会のためにペンを握って下さい。あなたがUFOを目撃されることを祈っています。

一九八二年十一月

My UFO Sightings and Mysterious Experiences

私のUFO目撃と不思議な体験

超能力とUFO出現に関連性？

■中嶋順子

小学生のときのことです。その日はとても大雨が降って風も強かったのですが、友達は傘をさして平気で歩いていました。私も家の近くまでは平気だったのですが、門の所まで来たとき、サッと風が吹いて傘ごと私を持ち上げたのです。

低学年でしたので身体は小さかったのですが、私はそばにあった低木の枝にとっさにつかまり、「助けて。飛んじゃうよ！」と叫んでいました（図1）。

ちょうど近所のデブの男の子が通りかかり、私に飛びつき、彼の全体重をかけて私を地上に引き戻してくれました。これは私が最初に経験した不思議な出来事です。

図1

小学校も高学年になりますとゲームなどをしますが、サイコロを使ったゲームをしていて、自分に有利な目を出そうと一心にやっているうち、手の中でころがしながら三回その目を唱えて握ったとき、タイミングがよいと必ず好きな目が出るようになってしまいました。今考えると、必ずしも三回ころがしながら唱えなくても「あっ、今だ」と思ったときでよいのです。ただし頭で思うのではなく〝手〟で思うのです。

夢で予知する

よく夢を見る子供でした。カラーのはっきりした夢でした。忘れていても日常生活で突然に見た夢を思い出すことがあり、思い出した夢はこれから起こる物事のすべてでした。

最も印象が強かったのは六年生のとき、林間学校でたしか秋葉山へ行ったときのことです。宿泊する寺の本堂の前に生徒を整列させたまま、先生がどこかへ行ってしまったのです。何かで集合したのでしょうが、子供たちは待つことができません。しだいにガヤガヤしてきたのです。

あまり騒々しいので私は「静かにして下さい」と言いました。すると一人の生徒が「学級委員なら知ってるだろう。早く部屋に連れて行けよ」と言います。私はなにげなく「うん、知ってるけど」と答えました。なんだか夢で見て知っているように感じたからです。「どこ？　どこ？」とみんなが聞きます。

私は「だから、そこを曲がると藤棚があって、その先が靴箱で、左に曲がって二つ目の部屋が浴室で」と自分でもびっくりするくらいスラスラ答えたのです。子供たちはてんでに走って行きますので私も行きますと、やはり藤棚があり靴箱があり、そこへ先生が戻ってきて騒ぎはおさまりましたが、浴室まで私の言ったとおりの所にあったので、なんだかゾッとしました。

一段落して外に出て遊ぶことになり、藤棚の前に来たとき、「わあ、どうしよう」と思いました。またも夢の中の続きの光景を思い出したからです。立ちすくむ私に友達は「どうしたの？」と口々に言いますが、私の頭の中は夢の光景しかありません。それは次のようなものです。

「もうすぐ洋介君が来る。そして中嶋さんと言って、ふざけて変な顔をする。両手の小指を鼻に突っ込んでブタみたいにして親指と人差指で口をギューッとあける。いやだよう、どうしよう。私は逃げ出したかったけど、体が動かない――」

本当に洋介君が靴箱の所から飛び出てきました。「中嶋さーん」と呼んでふざけた変な顔をするんです。夢のとおりブタみたいな――。私は泣き出しました。「あーっ、女を泣かせた。おまえ何をしたんだ」「知らないぞ」

洋介君は可哀そうにみんなにこづかれています。その頃は未来の事を人に話すと死んでしまうと思っていたので、だれにも話しませんでした。

中学生の頃は中国と金星が気に入っていました。夢予知は相変わらず続いていましたが、夢で変わった現象が起きました。どうしても解けなかった数学の問題が夢で解けたのです。

オーラが見え始める

中学生の頃までは感覚的に人や物に色または光みたいなものがあるということに気づいていましたが、いわゆるオーラの色がはっきり見えたのは高校一年のときでした。

朝、駅で友人を待ってぼんやり立っていたとき、バスから降りてきた高校生の男の子が水色のきれいな光に包まれているのが見えました。友人にそのことを話すと、とても不思議がって、人の体に色なんか見えないと言うのです。

私はだれも自分と同じように光や色を感じているものと思っていましたの

で、なんだか自分だけがポツリと取り残されたような気がして寂しくなりました。そしてその頃からいろいろな種類のUFOの夢を見るようになりました。土星の母船の夢も見ましたが、私はそれまでUFOの写真を一、二回しか見たことがないのに、どうしてはっきりしたUFOの夢を何度も見るのか不思議でした。

奇妙な現象が次々と発生

高校を卒業すると同時に変な事が連続的に起こり始めました。あるときテレビに映っていた景色に郷愁をおぼえて、画面に顔をつけるようにして泣いてしまいました。それはペルーの風景で、ナスカの地上絵などが写っていたと思います。なぜかペルーに帰りたいという気持が強くなってくるのです。

また毎日同じ時刻に下宿の押入れの中に子供の気配を感じたり、白い煙状の物がスーッと目の前を移動したりします。これは母も目撃しました。家の階段を降りているとき、何か後ろが異様な雰囲気だったので、振り返ると階段の上に黒マントの人が立っていたりするのです。

本物の巨大なUFOを目撃

十九歳のときまでには一応自分の考えがまとまっていたのですが、どうも周囲の人々の考えとは違っていて、孤立感を味わっていました。最も似かよっていたのがキリストの考えだったので、教会にかよって、より確立した考え方を持とうとしたのです（結局、私は教会の教えに納得できなかったのですが）。

当時私は大学薬学科の学生として名古屋の天白区白砂町におりましたので、八事の教会にかよいました。

昭和五十年一月十五日（日曜）、十二時三十分、教会からの帰り道でついに本物のUFOが私の前に姿を見せたのです。

ほとんど雲もないほどによく晴れた真昼、光体とか黒点などという半端なものではなくて、蛍光灯のような形の白い巨大なUFOなのです。目の高さから三十度ぐらいの空中に、両手を広げたほどの長さのUFOがゆっくりと大空を横切って行きました（図2）。

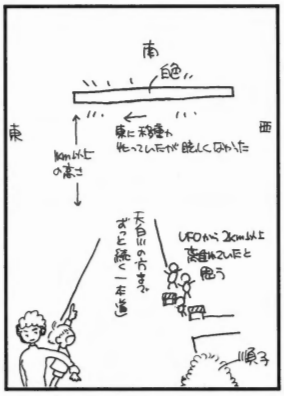


図2

前から歩いてきた幼稚園児の男の子はそのUFOに気づいていて、私と目でうなずきあい、お母さんに必死に教えていましたが、相手にしてもらえず、手を引っ張られて通り過ぎました。ほかに道路工事のおじさんたちがいましたが、皆下を向いていました。

UFOに腰を抜かす

それ以来無数のUFOを見ていますが、それで私の持病の喘息が治るわけでもなく、相変わらず苦しい毎日で、UFOを見るたびに不安になるばかりでした。特に夜間見るUFOは信頼性に欠けていました。

でもそのなかで印象に残っている夜のUFOが二つあります。一つは八事の下宿に移ってからのことですが、ある晩フッと外に出たくなったので、外に出てなにげなく空を見ると、星よりも大きく月よりも小さいオレンジ色の丸い光があるのです。

そこは目立った星のある場所ではないので、変だなと思っていると、突然その光は動き出しました。ゆっくり滑るようにしばらく動いて、ちょっと止まったように見えたとたん、全く違う二色の光に分かれてスーッと飛んで行ってしまいました。色は黄と青だったか黄緑と赤だったか忘れました。

同じ下宿の友人に教えようとして、光が動いているときにドアをドンドン叩いて名前を読んだのですが、出てきません。あとで聞くと、机に向かっていたのだけど、急に体がだるくなって、ドアを叩く音が聞こえたような音がしたけれど、体が動かなかったというのです。いつも私一人しか見られないのでとても残念でした。

もう一つはそれから二カ月ほどしてからだと思います。クラブか実習かで帰宅が遅くなってしまって洗濯物が取り込んでなかったので、急いで物干台に上がり、洗濯物を抱えて階段を降りようとして、ふと遠くの空を見たときです。赤っぽい光体が左から右に水平に飛んでいました。

「あ、UFOか。何か用ですかね」と思い、そのまま降りようとしましたが、毎度つれなくするのも芸がないと思って、手を上げて合図をしてみることにしました。

洗濯物を左手にまとめるように抱え、右手を斜め上に上げてみました。心の中では「バーカみたい」と自分に言っていました。するとスーッと水平移動していた光は、私の手の延長線上に止まり、止まったことに驚く暇もなく、パーッと燃えるように赤々と輝き出したのです。

私はというと抱えていた洗濯物は落とすし、腰が抜けて階段の手すりにつかまっているのがやっとで、そのUFOがどうなったかは、ついにわかりませんでした。這うようにして洗濯物を集め、這うようにして部屋に帰りました。

それ以来UFOがいやになりましたが、近頃は大好きになって、家にUFOの写真まで飾っている程の熱の入れ

ようです。

意識による旅?

私は喘息持ちですので、自分の好きなときに好きな所へ行ける状態ではありませんでした。ある夜、友人たちが今池という盛り場に行くと言っていた話を思い出し、ゼイゼイしながら下宿で「あーあ、今池かあ、行きたいな」と思っていました。でも十時をまわっていたので、わざわざ出かける気にもなりませんでした。

翌日学校へ行くと、友人がかけよってきて、「昨日十時すぎに今池にいたでしょ。必殺遊び人」と言うのです。

彼女の話では、彼と二人で今池をぶらぶらしていると、私が前方を歩いていたというのです。それで名前を呼んで追いかけようとしたそうですが、まるで宙に浮いているように私は足早に地下鉄の階段を降りて向こう側の道に出てしまったということです。

このように私自身は知らなくても、なにげなく心の中で思っていた場所で私がだれかに見られているということが、この他に二回ほどありました。

男の姿が部屋に出現

ある日、私はいつものように着替えをしていました。上着を脱いで肌着になったと同時に目の前に男の人が現れました。ポンとそこに出たという感じでした。身長は一メートル八十センチほどで、髪は黒っぽいこげ茶か金色。これはオーラが金色だったのかもしれません。服は低いタートルネックのつなぎのようなクリーム色のもので、ベルトは締めていましたが色は覚えていません。

肩からベルトにかけてマリンブルーの線が斜めにはいっていました。肌はあたたかい肌色で、白みがかっており、他人を安心させるような色でした。目は深みのある優しい目で、特別大きくもなく、鼻は普通で、唇は薄くはありません。

そのとき私も驚きましたが、彼も驚いたようで、ちょっと困ったような表情をして消えてしまいました。ほんの一瞬のことですが印象が深く、今でも忘れられません。しかしなんて失礼な男性なのでしょう。

路上で消えた婦人

消えてしまった人が他にもいます。バスに乗っていたときのことです。混んでいたので吊皮につかまって立っていました。バスが信号待ちで止まり、私は見るともなく横断歩道を渡る人々を見ていました。

すると男の人の斜め後ろを三十五歳から四十五歳ぐらいに見える女の人が歩いていました。ごく普通の奥さんみたいでしたが、彼女の顔の下と胸のあたりがスーッと消えたのです。まるで消しゴムで消すように徐々に他の部分も消えてゆき、最後は肩と背中の上あたりが残りましたが、やがて消えました。

私が「あ、あー」と言うくらいの間ですから、一〜二秒だと思います。バスの乗客は大声を出した私を見るだけで、消える女性の方は見ませんでした。

紛失したペンダントが出てくる

また名古屋での出来事です。クラスメートで親友ともいえる小川さんは、まるでラット(実験用のドブ白ネズミ)の腸管のようなペンダントをしていました。彼女はそれがとてもお気に入りでしたが、ある日ペンダントをなくしてしまったのです。自分の部屋以外ではずしたことはないので、どこかにしまい忘れたのだろうと言っていましたが残念そうでした。

それから三カ月ほどしたある日、私が下宿の自分の部屋を掃除して、「さあ終わった。やれやれ」と座ろうとした座布団のまん中に、あの腸管ペンダントがチョコンと乗っているではありませんか!

この三カ月間、毎日部屋を掃除していたんです。座布団を上げたり降ろしたりし、つい五分ぐらい前にもとのえたばかりでした。小川さんに電話したら「ああ、よかった。順ちゃんの所に出たの? アハハ」と大喜びでした。

私は彼女の家にはよく遊びに行って、いろいろと不思議な体験をしています。彼女には水色のオーラが見えました。でもあの腸管ペンダントは、三カ月間、いったいどこで遊んでいたのでしょうか。

反金属異常体質

私は金属にたいする異常体質です。指輪をはめてもポーンと飛んでしまいます。サイズを合わせて名前まで入れてもらって作ってもポーンです。正直いって危険です。ひどいときはお金まで飛びました。タクシーに乗って釣り銭をもらおうと手を出したら、釣り銭が手におさまらず、四方八方に飛び散り、タクシーの中は小銭だらけになりました。

運転手さんはまるで恐ろしいものでも見るように、お金を拾おうと愛想笑いをしている私の顔を見ると、ドアーもしめずに走り去ってしまいました。

反金属異常体質は静岡県磐田市の実家に戻ってからも衰えを知りません。自家用車を運転していて、ひどく怒っているとき、チェンジレバーがビリビリして車体もビンビンして走らなくなってしまうこともあります。

カセットデッキも使いものにならなくなって、壊れたままにしてあります。もっぱらカセットテープレコーダーを車内に持ち込んで音楽を流していますが、それも三台目です。ヘッドが曲がっているということですが、私はスプーン曲げなどできません。曲げようと

◀筆者(右)と、お母さん

すると眠くなってしまうのです。電気屋さんも「安いのにしといた方がいいよ。壊れちゃうんだから」と親切です。

CDプレイヤーが爆発

きわめつきは去年九月のCDプレイヤーぶっ壊し事件です。待望のCDプレイヤーを購入し、大好きなチェッカーズの曲を聴きながら書きものをしていたとき、お気に入りの曲がかかり、鼻歌ではすまされなくなって、思わずチェッカーズになってしまって、歌いながら立ち上がった瞬間、「ボム!」という音と白い煙が本体から上がり、いとしのフミヤ君の声はもはや聞こえなくなりました。

いそいでいつもの電気屋さんに来てもらったところ、修理しようのない所がだめになっているので、取り替えるしかないとのことで、幸いにも買ったばかりなので不良品ということになりました。お金を飛ばすくらいのパワーならCDプレイヤーも使いものにならなくすることはできるそうです。「あまり近寄らないほうがいいね」と言われました。

この頃はなるべく離れて操作しながら、まずテープに吹き込んで安いラジカセで聴いています。音を楽しく聴くのが音楽なのに、気を散らしながら聴くなんて情ない毎日です。

また従兄弟が私の喘息を心配してイオン発生器を作ってくれましたが、彼の目の前でそれが火花を散らして、ブブと壊れる寸前の音をたて始めたのです。彼は「お前は、何なんだ!?」と言って退散しましたが、後日、出力アップしてきたとか申しましてスイッチを入れたのです。

その日は気分的に落ち込んでいたのでイオン発生器に惨敗しました(喘息がひどくなったのです)。金属類にたいする反応は気分に関係があるようです。

体からも奇妙な物が出る

私は母と二人で薬店をやっているのですが、エレキバンを売るとき、お客様の目の前で手の上のエレキバンがピョンピョン跳ねてしまうので急いで抑えましたが、ビリビリして困ったことがありました。磁気にたいしても何かあるようです。

攻撃的になっているとき、ごきげんのとき、極度の緊張など気分が高揚したときなどは、金属や磁気のような外部にたいしてだけ反応するわけではありません。身体の内部にも何か起こっているのです。

ディスコで踊っているとき、友人から「あれ? キンラメつけてたっけ?」と言われるほど、キラキラした何かが出たことがあります。普段でも微量のキラキラは出ていますが、特に喘息発作のひどいとき、直径五ミリぐらいの青のキラキラが出たことがありました。母がお客さんに見せてあげると言ってチリ紙に乗せて行きましたが、途中で消えてしまいました。

母もキラキラが出ます。母方の祖母もキラキラ人間だったそうです。

私の目から七色の糸が出たこともあります。ゴロゴロする感じがするので、鏡で見ると、睫毛の所に糸みたいなものがあり、それを引っ張り出すと、短いのは二センチ、長いので十センチ。太さは髪の毛の五分の一ぐらいで、ふわふわしていますが毛糸ではありません。だって目から引っ張り出したんですから。

出るたびに違う色で、とてもきれいでしたが、捨ててしまったり風で飛ばしたりして現在はありません。

目といえば二~三年前、友人から目が青く光って恐いと言われたことがありますが、皮膚に出るキラキラと何か関係があるのでしょうか。

お母さんの不思議な体験

ここで異常体質の生みの親『お母ちゃま』のことを書きます。私と母は昔から同じときに同じ症状になります。母が下痢をすると私もするのです。私が子供の頃は八人家族だったのですが、同じ食事をしているのに私と母だけが同じ症状になりました。私が名古屋にいたときもやはり同じだったのです。

その母と孫の有美子が父の墓参の帰り道、踏み切りの所で列車が通るのを待っていたとき、後ろの方から皮靴の足音が大きく響いてきたそうです。

「だれか来たね」と二人で振り向いたら、十メートルぐらい後方を黒のスーツを着た男の人が歩いてきたそうで身長は百六十二~五センチぐらい。中肉で三十五歳ぐらい。髪は普通の長さで自然に左で七分に分けていたそうですが、不思議なことに顔だけはどうしても思い出せないそうです。

母は「男の人が来たな」と思い、前を向いて列車が通り過ぎるのを待っていたら、すぐ後ろでその男の人が止まった気配がしたので、反射的に顔をそちらに向けようとしたら、肩ごしにその男性が見えたそうです。

列車が通り過ぎたので「さあ行こう」と言いながら振り向くと、もう男の人はいません。この間二秒ぐらいだった

そうです。

「有美子、男の人がいない！」「あ、本当。おばあちゃん、あの人どこに行っただいねェ？」

二人はゾッとして逃げるように踏み切りを渡ったそうです。その場所は見通しがよくて、二秒間で隠れることはできません。母は「本当にあのときはびっくりした」と申しております。

このように『あなたの知らない世界』を体験した母は、甘い物が大好きで、夜寝るまでお菓子を食べています。ある夜、お客様から頂いたカステラを例のごとく「おいしいね」と二人で食べました。残りのカステラは菓子器に入れ、「明日の朝一つずつ食べよう」とチャブ台の上に置いて寝ました。

明朝、「さあ食べよう」と菓子器をあけてみると、カステラのカの字もなくなっていたのです。母はすぐ私のせいにして「順ちゃん、食べた？」と聞きましたが、私が食べるわけはありません。その菓子器はキチッと蓋がしまるようになっているもので、ネズミならスペースマウスでないとできない芸当です(図3)。

お母さんもUFOを見た

また母もUFOを目撃しています。六年ほど前の六月頃、朝六時に家の裏の道のゴミ置場にゴミを捨てに行って西の方を見たら、工場の屋根の所に茜色の丸い物体が浮かんでいたそうです。

母が立っていた場所から五十メートルほど離れた所で、大きさは母の位置から見て両手で丸を作ったぐらい。最初は朝日が西から出たと思って驚いたということです(図4)。

その物体は中は薄い茜色で、ボヤケていて輪郭が濃く、外側は自然に薄くなってゆくような感じで、後光がさしているようだったけど、全然まぶしくなかったと言っています。もっとよく見て私に知らせようと家の前まで小走りに来たときは、もう消えてしまったということです。

図3

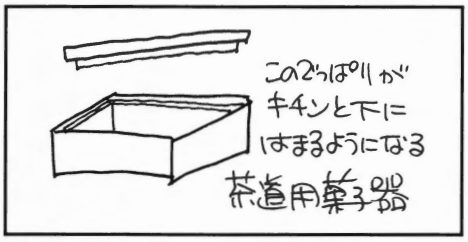
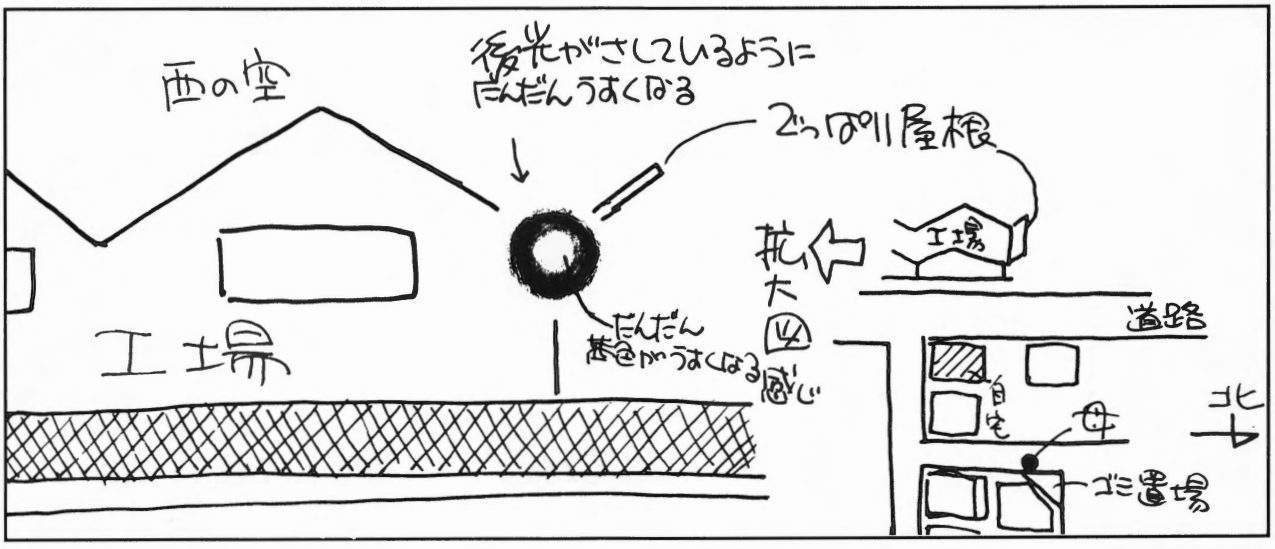


図4



黄金色の粒状のオーラ

私がGAPに入会したのは昭和六十年九月でした。十年ほど前から興味はあったのですが、なにぶん憶病な性質なので二の足を踏んでいましたし、六年ほど前頃に、県内のある超能力の方が、「あまり目立った活動は控えた方がよい。マスコミにつぶされてしまう」とおっしゃっていたこともあって、時期がくるまでと思っていました(実際にダメにされてしまった少年を知っていました)。

「そろそろかな」と感じていた八月、日本GAP名古屋支部の林さんがUコンを郵送して下さいまして、これぞ神のお導きとばかり早速入会しました。

そして十一月の名古屋支部大会のとき、初めて久保田先生にお目にかかりました。会場のいちばん前の野口さんの隣の席で先生を間近に拝見して、まずオーラの色に驚きました。あたたかい黄金色だったのです。

特にスペース・ピープル(友好的な異星人)のお話をされているとき、私は顔を上げることがほとんどできませんでした。オーラが粒状になって降り

そそいでくるのです。目を閉じても皮膚を突き抜けてオーラが入ってくるようで、まぶしいのです。といって目を開くと涙が出そうなので、ずっと下を向いていました（図5）。

私はそれまでオーラは平面的またはモヤ状のもので、ほとんど静止しているものと思っていましたので、まさか粒状で流れるようなのもあるとは知りませんでした。先生は「いやあ、私はごく普通の人間ですよ」とおっしゃいますが、あれは嘘ですね。

実は十年ぐらい前に同じような金粒の光に出会ったことがあります。夜、横になったとき、自分がすごく清浄になったような不思議な幸福感がわき起こりました。私はいつものように私の『神』に祈りました。

「宇宙の創造主よ。もし私が喘息で苦しんで、そのために地球のすべての人々の苦しみがなくなるのなら、私は喜んで苦しみます。でもそうでないのなら私がなすべき事をなすための力を与えてください」とかなんとか、格好のよいことを言っていますと、カーテンの影がふわっと揺れたように感じて、黄金の光がパーッと部屋に流れ込んできたのです。

図5

まぶしくて手で目を覆っても光の粒は私の細胞のすき間を縫うように、または満たすような感じでどんどんやってきます。

そのうちに体（心といってもよい）が拡散したような感じがして、だんだん宇宙そのものになってゆく気がしました。地球の苦しみや悲しみ全部を幸せが包んでいるように思われて、何ともいえないゆったりとした幸福感がわき起こり、その幸福感自体が私なのだとわかったのです。涙が溢れてきて、存分に泣きました。

光が去った後、これが宇宙創造神と一体化するということなのかしらと思いました。そのときの光と久保田先生の光とは同じです。名古屋支部大会で先生の体から出ていたのはオーラを超えた、もっと別の何かではなかったかと思います。最近は先生の右手から金色のオーラが多く出ています。

気象変化と連動

私は喘息を治すために種々の検査を受けました。二十種類以上の因子にも反応しませんので、大学病院でも気休めの治療しかしてくれませんでした。でも私は二十年間喘息とともに生きてきて、原因らしいものがわかったような気がします。

それはまず台風です。台風の発生時刻に発作が起こっているのですが、発作が起きているときはまだニュースでも発表していません。台風の進路も喘息の状態でわかります。

次に地震や火山の爆発です。喘息発作に吐き気が伴います。吐き気といっても、頭から吐きそうだとか、首の後ろからとか、腕や足からとか、言葉で言いあらわすと〝吐き気〟となるのです。

地震と火山では吐き気の部位が違うのですが、まだはっきりとはわかりません。とにかくM6以上の地震なら八〇パーセントはわかりますが、地球単位なので日本なのか外国なのかはわかりません。夢と併用すれば九〇パーセント以上の確率になるでしょう。ただし十日以内に起きる確率です。

昭和六十年はハレー彗星のためかはわかりませんが、急激に症状が悪化し、入退院を繰り返しました。五月末には「もうだめか」と何度も思いましたが、私の考えではない〝何か〟がクエン酸というヒントを与えてくれたので、入院をやめて死を覚悟でクエン酸に賭けました。

するとまるで薄紙を一枚一枚はぐように六カ月かかって、やっと普通に歩けるまでに快復しました。クエン酸自体は病気にたいして何の効果もありません。しかしエネルギー循環を助けるので（その一因子なので）、本当の意味での自然治癒を促す作用があるようです。

反宇宙的想念に屈しない

それまで気象変化によって起こっていたと思われた喘息発作が、快復の兆しが見え始めた七月頃から、反人道的事件や多数の犠牲者の出る災害や事故の発生と同時または直前に起こるようになりました。

九月にGAPに入会したことも関係しているのかもしれませんが、反宇宙的想念や多数の苦しみの想念の影響を受けるものと思われます。これからは早く喘息が治るように精神的にも肉体的にも鍛えてゆかないと、地球的想念波動に流され、ボロボロになってしまうでしょう。幸い何か事件とかが起こる前にUFOが出現するようなので、腹に力を入れてドンと受け止める態勢をつくるようにしなければいけませんが、今のところうまくゆきません。でも投げ出すことはできないので、楽しく戦えるようになるまで頑張ります。

〈掲載イラストは筆者による〉

ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤

日本GAP企画第八回海外研修旅行「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」報告

●久保田八郎〈日本GAP会長〉

▲前列左より＝田中正（添乗・千葉県）、小川里津子（岡山県）、朏文子（長崎県）、高野昌子（山形県）、蒲地宏子（佐賀県）、富岡設子（神奈川県）、鈴木芳美（静岡県）、佐藤春雄（秋田県）。
後列左より＝久保田八郎（団長・東京）、小川照廣（岡山県）、島村謙一（熊本県）、斉藤淳一（千葉県）、伊東芳和（東京）、井川博文（神奈川県）。

宇宙を理解するにはまず自分たちのホーム惑星である地球を理解する必要があるというわけで、日本GAPが海外研修旅行を実施し始めてから今年で八回目になる。その間世界の謎の遺跡を主体にして多数の国を歴訪し、多大の成果を収めてきた。

今回は未知の国トルコを加えたが、これはトルコ人が日本人にたいしてきわめて親日的であることと、二千年前エルサレムを脱出したヨハネが、現在のトルコのエフェソスに居住してそこで没したという史的事実から、GAP会員なら一度はエフェソスを訪れるのも有意義であろうと考えたからである。なぜならこのヨハネこそ二千年後にアダムスキーという名で転生して、宇宙的な大パイオニアーとして活躍したからだ。

トルコ風呂は健全な蒸し風呂

八月六日、うだるような暑さの中を成田空港からアリタリア航空七八七便で出発した一行十四名は、途中ホンコンとニューデリーに立ち寄って、計二十六時間に及ぶ長途の飛行を終えた後、七日の現地時間午後一時にトルコ・イスタンブールのイェシルキョイ国際空港に着陸。ただしローマから乗り換えたアリタリア航空七〇〇便には、事情により わが旅行団の内、八名はファーストクラスに乗ることができた。私もその一人として座る。席が大きく、ゆったりして乗り心地がよい。ローマ空港は昨年十二月の銃撃事件以来、空港内が大幅に改装されて見違えるようにきれいになっている。イタリアは汚い国だという印象を払拭するのにいいだろう。

イスタンブールの空港を午後二時に出た一行はバスで市内へ向かった。私個人としては海外の旅は今回で十二回目で、ヨーロッパ各国、アメリカ、中南米などをかなり回ったけれども、トルコはこれが最初なので多大の関心をもって市内の風景を見る。回教国らしい東洋的な雰囲気が漂っているが、むしろこうした国にエグゾティシズム（異国情緒）が溢れて私は好きだ。東洋的といっても私が見聞した他の回教国ほど不潔ではなさそうだ。

日本ではトルコについてほとんど知られていない。いかがわしい風呂にこの国名が冠せられていたが、トルコ人留学生の新聞投書により抹消された。本場のトルコ風呂というのはハマムと呼ばれる健全な蒸し風呂だという。ここでトルコの歴史を概観しよう。

雄大な歴史を持つトルコ

アジア大陸の西端に位置するアナトリア半島は北が黒海、南は地中海、西はエーゲ海に囲まれている。この半島全体とボスポラス海峡をはさんでヨーロッパのブルガリア側とギリシャ側に少し食い込んだ形で接している小部分とが現在のトルコ共和国で、いわばアジアとヨーロッパの接点をなしている。

ボスポラス海峡の東側つまりアジア側のウスキュダル地区と、西側のヨーロッパ地区とでトルコ最大の都市イスタンブールが形成され、さらにヨーロッパ側はゴールデン・ホーン（金角）湾をへだてて北側のベイオール地区と南側のイスタンブール地区とに分けられる。観光の対象となる名所旧蹟の多いのはこのイスタンブール地区だ。

トルコの面積は日本の約二倍あるが、人口は半分以下の四千六百万人。九九パーセントはイスラム教スンニ派。しかしこの国土を大昔からトルコ人が占有していたわけではない。

紀元前一七五〇年から五百年この地で栄えた謎の民族ヒッタイトによる帝国がある。これは旧約聖書にヘテ人として出てくるが、中近東では鉄製武器を持つ最初の民族で、エジプトを脅かす強国だった。政治形態も進歩しており、王制は存在したものの、議会制民主政体を保っていた。ところがこうした国は軍事面で弱体化するらしく、エジプトのラムセス二世の大軍団とカディシュ（シリア）の戦いで大敗を喫し、ついに前一二七〇年、和平条約を締結した。この碑文はエジプトのルクソール神殿壁面に象形文字で残してあり、私も二度見たことがある。こうしてトウドハリヤシュ五世のときに王国は滅亡した。

その後アナトリア半島の西側はギリシャの影響下に入り、三三〇年にローマ皇帝コンスタンティヌスが、ビザンティウムと呼ばれていたギリシャの町（現在のイスタンブール）をコンスタンティノポリスと改名し、ここを東ローマ帝国（ビザンティン帝国）の基礎とした。

こうしてローマ人の支配下に入ったアナトリア半島も、一〇七一年にセルジュク・トルコ族の進出によって東ローマ帝国が崩壊し、セルジュク帝国が数百年続いたあと、一四五三年に別なオスマン・トルコ族がアジア、ヨーロッパ、アフリカにまたがる大帝国を建設して数世紀間強大な国力を誇った。

やがて封建制オスマン・トルコはヨーロッパの近代化の波に洗われて苦境におちいるが、これを救った英雄がケマル・アタチュルクで、オスマン帝国のスルタン（皇帝）制を廃止し、共和国を樹立して初代大統領となり、近代化のために政教分離その他で大改革を遂行した。一九三四年に国会は彼にアタチュルク（トルコの父）という尊称を贈った。現在は首都アンカラのアタチュルク廟に葬られている。一人の偉人の出現如何で一国の運命が左右されるという実例をトルコほどに如実に示した国はないだろう。

Seeing is Believing
百聞は一見にしかず

二時半にまず一行はアヤ・ソフィア（神の英知）と呼ばれる大聖堂へ行く。三二五年にコンスタンティヌス帝が創始したが、現存の建物は五三二年にユスティニアヌス帝が建造したビザンティン建築の傑作。この大聖堂の名はよく知っていたものの、写真と資料による貧弱な知識を一歩も出なかったが、内部へ入って壮大なのに一驚を喫した。ドームの直径三十メートル、高さ五十六メートルという巨大なもので、古色蒼然としているが建築当時はさぞかし壮麗であったろうと感嘆する。一四五三年にはオスマン・トルコ軍が占領して、大聖堂はイスラム教のモスク（回教寺院）にされた。したがって日本の法隆寺より古い世界最古の教会内部にはイスラム風の装飾が施され、初期のキリスト教聖画関係モザイクは次々と漆喰で塗りつぶされたが、修復されたものが少しは残っている。外部にもモスク特有のミナレット（尖塔）が後世に四本建てられた。

いずれにせよ史跡や遺跡類は現物を自分の目で見ないことにはピンとこない。まさに百聞は一見にしかずで、そのゆえに私たちGAPグループは毎年海外へ出かけるのだ。この研修旅行でどれほど目が開けたか知れない。旅こそは最大の学習だという言葉を今更のように痛感する。

語学の天才、ファティさん

私たちのガイドさんはトルコ人で、名をファティ・ジモックというヒゲ面の大男。おそろしく日本語が達者で、聞いてみると英文で書かれた日本語の独習書を数冊読んだだけでマスターしたという。他にも英語、フランス語、ロシヤ語ができるといい、したがって英米人観光団相手には英語、フランス人にはフランス語というふうに使いわける。

この語学の天才は、イスタンブール大学の英文科を卒業してから更にボスポラス大学で考古学を学んでガイドになった。まだ独身の四十歳。トルコ中南部の出身で、母親は健在だという。日本に在住した経験はない。

母国語以外の外国語で最も使いやすい言語は何語かと尋ねると、英語だと答えた。母国語と同じぐらいに出来るらしく、英文で書いた観光案内書を何冊か出している作家でもある。カメラはニコンを愛用し、自分で撮った写真を自著に掲載する。したがって写真家でもあるわけだ。典型的なトルコ人の風貌は知的であり、かなりなインテリらしい。あなたの先祖はオスマン・トルコ系かと聞くと、少し違う種族だと答える。少々才気走った傾向が見られるけれども、親切な人である。

聖ソフィア大聖堂をバックに全員の記念写真を撮ろうとしたら、それよりも前方に見えるブルーモスクをバックにして撮るほうがよいとファティさんが言うので、広場の端に並んでセルフタイマーを使って撮影すると、周囲のトルコ人たちがもの珍しそうに寄ってきた。標識がわりに使う小さな日章旗を見て日本人とわかったらしく、敬意に満ちたまなざしで見つめている。私たちもトルコ人に敬意を表して、用意してきたトルコの国旗を垂らす。実際、トルコ人が日本人に非常な親密感を抱いていることはその後の旅で次第にわ

▲ブルーモスクをバックに。中央はファティさん(イスタンブール)

かってきた。その理由はこうだ。

トルコ人が親日的である理由

トルコは前述のようにオスマン帝国の衰退にともなって、ヨーロッパの列強から反撃をくらいだした。そしてロシヤ人からも痛めつけられた。ロシヤとは計六回にわたって戦争をやっている。そのロシヤに対し日露戦争で当時の東洋の小国日本が列強を驚倒させる凱歌を奏した上、日本海海戦では日本海軍がロシヤのバルチック艦隊を全滅させたために、以来、トルコ人は日本人を英雄視し尊敬するようになったという話を私は昔から聞いていたが、誇張された伝説だろうと思っていたところ、ファティさんに尋ねてみると、確かにそのとおりだと真顔で答えた。やはり本当らしい。だからイスタンブール市内には東郷元師の名をとったトーゴー通りとかミカド通りという街路名が残っているという。こうしたことも日本では全く知られていない。

右と同じ理由によって日本人を尊敬している国でポーランド、フィンランド、エジプトその他があることを私も添乗の田中さんも知っている。

日本人に安いトルコの物価

四時にエタップ・イスタンブール・ホテルに入って、食堂で夕食後、大勢で付近の商店街を散策し、安いレストランでトルコ茶を飲み、羊肉を食べる。この勘定は総計で八千トルコリラ。日本円にして二千円足らず。一人あたり二百円にも達しない。といってトルコの物価が安いのではなく、円とトルコリラとの相対的な価値や収入の問題である。一般トルコ人にとっては安くないのだ。ファティさんによると日本製カメラは庶民にとって夢の夢で、これが持てる人は一握りの高所得層だけという。

翌八日は五時すぎに起きて仕度をし、空港へ向かう。今日はトルコ中部のカッパドキア地方へ行くのだ。八時にトルコ航空一〇八便に乗る。右隣に座ったトルコ人少年と英語で話し合う。彼は十四歳の中学生で、東部のヴァン市の叔父の所へ行くという。英会話力はなかなかのもので、日本の中学生よりもはるかにうまい。教育内容の相違なのか、トルコ人に外国語習得のすぐれた能力があるのか、実態はわからない。日本をどう思うかと聞いたら、科学的な偉大な国だと答えた。これはおそらく一般トルコ人の見解だろう。

ヒッタイト帝国の遺物に感動

九時五分にアンカラのエサンボア空港着。バスで市内へ向かう。茶褐色の広漠たる丘陵と大平野が展開する。白壁に赤い屋根の粗末な民家が山腹に密集した地区がある。

十時にアンカラの旧市街に着く。やはりイスラム的な雰囲気に満ちているが、新市街へ入ると、これは別世界のように近代的なビルが林立し、やたらと人が多い。この町は標高千メートルの高原都市。人口二百二十万、イスタンブールに次ぐトルコ第二の大都会で、一九二三年にアタチュルクがここに共和国政府を樹立して新生トルコの首都になった。古代にヒッタイト族が占有した地だけあって、ヒッタイト関係の遺物や出土品が市内のアナトリア文明博物館に展示されているというので、まずその博物館に直行する。

▲アンカラ市内

入ってみると、あるわあるわ、写真で知っている名高い石の浮彫群が充満し、壮観だ。撮影OKなので、35㎜一眼レフと大判6×9カメラの二台で撮りまくったが、これはよい資料になった。

中部の大平原地帯

十一時半にバスで出発。有名なマリケス・レストランの広い庭で豪勢な昼食をとった後、またバスで出る。車内で運転手の息子さんだという青年がレモンの香油を顔や手に塗ってくれる。妙な匂いがする。トルコ人の習慣らしい。

日本で出ているガイドブックによると、アナトリア半島は海岸地帯の間近まで山が迫っており平野はほとんどないとあるので鵜のみにしていたら、とんでもないことで、果てしない大平原が広がる中を二車線のハイウェーがは

るか彼方までつらぬいている。要するに中部高原地帯は標高二千メートル級ながら大平野の耕作地帯なのだ。麦、豆、その他の作物が織りなす緑の絨毯の中をバスは突っ走る。碧空下の直射日光は暑く、バスには冷房装置がないけれども、天井の空気抜きから風が入って爽快だ。

三時前にバスを降りて『塩の湖』と呼ばれる海岸を散策。夏にセ氏四〇度を超える暑気のため海水が蒸発し、浜一帯の塩分が結晶化して白くギラギラと光る光景は珍しい。レンズに偏光フィルターをつけて撮る。

またバスでドライブ。村々の民家はあちこち残っているのだ。シルクロードといっても一本だけではなく、昔の幹線道路は三本あり、その一本はローマを基点として小アジア（トルコ）経由で中国の洛陽までつながっていたが、トルコは中国の絹をヨーロッパに輸送する重要なルートだった。

五時十五分にネアシェフィルという町へ入る。土俗的な古い民家が多く、ここもメキシコ的なエグゾティシズムに満ちている。

▶「塩の湖」。一面塩のかたまり。

白壁、赤屋根の粗末な家が多く、メキシコの風景に酷似している。

四時半にアズカラハンという十三世紀頃建てられた隊商の宿の前に停車して見学する。今私たちが突っ走っている道路は昔のシルクロードそのものなので、こうした石造の隊商宿の遺跡があちこち残っているのだ。シルクロードといっても一本だけではなく、昔の幹線道路は三本あり、その一本はローマを基点として小アジア（トルコ）経由で中国の洛陽までつながっていたが、トルコは中国の絹をヨーロッパに輸送する重要なルートだった。

五時十五分にネアシェフィルという町へ入る。土俗的な古い民家が多く、ここもメキシコ的なエグゾティシズムに満ちている。

驚異の地下都市

五時五十分、やっとカイマクルの地下都市へ到着。ここで初期キリスト教徒が迫害をのがれて岩山を掘り抜き、無数の岩窟住居を地下に作った。地下八層まで発掘され、三十二メートルまで降りることができる。迷路のような天井の低いトンネルを這うようにして降りて行く。よくもこんなに掘ったものだと驚嘆のほかない。現在は無人化しているが、一九六四年まではこの地下都市にトルコ人が住んでいたという。ガイドなしに一人で入り込んだら絶対に出て来ることはできないだろう。狭いトンネル通路がクモの巣のように縦横に張りめぐらしてあるからだ。

カッパドキアの奇岩怪石

地上へ出てから『ハトの家の谷間』へ行く。巨大な奇石の中に無数のハトの巣が作ってあり、皆人間の持主がいるという。次にカッパドキアの最も有名な奇岩怪石を見渡す丘より谷間を望見。この世のものとは思えぬすごい光景が展開。

約三百万年前の火山噴火の結果、溶岩や火山灰で覆われた台地が風化浸食作用で自然に出来たもので、六年前に見たアメリカのグランドキャニオンを彷彿させるが、こちらの方がはるかに面白い。ピラミッド型、円錐型、尖塔の頂上に帽子のような黒い石をのせた奇妙な岩などが無数に林立する光景を眺めると、こんな場所が地球上に存在したのかと啞然とするような、すさまじいパノラミックな風景だ。

しかしトンネルもぐりで腰痛が起こり、くたびれたので、夜は夕食抜きで早く寝た。六十二歳の年齢を感じる。

翌九日も快晴だがさほど暑くはない。体調も回復した。八時に全員バスで出発し、今度は『刀の谷間』へ行く。剣のようにとがった岩が林立するのでこう呼ばれる。

続いてギョレメ渓谷の岩窟寺院へ行く。七世紀にアラブ人の迫害をのがれたキリスト教徒たちは、この谷の岩を掘ってあちこちに岩窟教会を作り、信仰を続けた。

内部へ入ると十一世紀に描かれたという壁画が美しく残っている。付近の岩窟食堂には昔の修道士たちの長いテーブルとベンチの役目をした岩が見られる。人間の信仰というものの強さを切実に感じさせる場所だ。ギリシャ正教なので、壁画の十字架も縦横の長さが等しい。続いて『坊さんの谷間』をバックに全員の写真を撮ってから『ザルヴェの谷間』へ行き、多くの岩窟を外から見る。

トルコ絨毯の〝魔術〟

これでカッパドキアの〝この世のものならぬ〟光景の見学を終えて、十時五十分にバスで出発。十分ほど走ってファティさんの言う〝アリ・ババ〟氏の絨毯工場へ立ち寄った。世界ではペルシャ（現在のイラン）絨毯とトルコ絨毯が名高いが、このカッパドキアはトルコの本場中の本場で、トルコ絨毯の八五パーセントはこの土地で生産するという。さだめし大規模な工場かと思いきや、たった三人の小娘が原始的

▲「坊さんの谷間」(カッパドキア)

な織り機で織っているだけだ。

ここの大広間でアリ氏が達者な日本語で絨毯について滔々と説明する。そして金の価値を知らぬ小娘たちにチューインガムやチョコレートを与えて仕事をさせるので、全部手織りだから価値があるのだという。娘たちの労働力を搾取しているのだと平気で話すので、おかしくなってくる。

しかし不可解な点もある。次々と広げてみせるぼう大な量の絨毯がわずか三人の小娘の手織りで出来るはずはない。とすると付近の多くの家庭に仕事を請負わせているのか、あるいはひそかに機械工場で大量生産をやっていながら、ここではいかにも全部手織りのごとく見せかけているのか——。

十二時にアルジュラヒ村のアタマン・レストランで昼食。塩からい海産物(タコその他)を熱く煮たものが出たあと魚のスズキを焼いたのが二匹出る。うまい。日本のショーユが置いてあるのを見ると日本人観光団がかなり来るのだろう。どこのレストランもフルコースのボリュームのある料理を出す。

約五時間四十分の長途のバス旅行を終えて六時二十分にアンカラの空港に到着、七時五十五分発のトルコ航空一五五便で出発、九時前にイスタンブール空港着、バスで十分の大レストラン『ハッスル』へ行き夕食をとる。各国の観光団が来ている。隣はイギリス人のグループだ。アメリカ人は過激派のテロを恐れて全く来ないという。

十日。今日はエフェソスの遺跡へ行く日だ。早朝に起きて七時三十分にバスで出発、八時半にトルコ航空一五五便で離陸、十時六分トルコ西端のイズミール空港着。ここは近代的ビルの建ち並ぶヨーロッパ風のスマートな都市で、ファティさんによると、あまり面白くない町だという。だが町には二頭立の馬車もある。観光用かと尋ねたら、タクシーがわりに使うのだといい、料金はタクシーより安いと答えた。

エフェソスの遺跡

十二時五分にエフェソスの遺跡に着いた。イズミールの南約七十四キロの地点で、セルチュック町に属する。

ここは紀元前千年頃からイオニア人が都市を建設し、アルテミス神殿その他を築いたが、後にローマ時代には港町として栄えた。だが現在、海は遠ざかっている。往時二十五万人が住んだ大都会だけあって、広大な地域に、古代七不思議の一つに数えられ使徒パウロも訪れたというアルテミス神殿、ハドリアヌスの神殿、大理石通り、図書館趾などの遺跡が多く残り、トルコでも有数の観光地として各国の旅行団が押し寄せており、にぎやかだ。

しかし私たちの最大目標はヨハネの遺跡にある。冒頭に述べたようにヨハネこそ二千年後にアダムスキーとして転生した人であるからだ。したがってここはエルサレム同様、アダムスキーの転生コースのルーツの一端となる場所である。

師イエスの磔刑後、アグリッパ王の迫害をのがれようとしたヨハネは、パレスティナを脱出してからこのエフェソスに住みつき、ここでヨハネ福音書を書いて没した。その墓の上に後世ローマのユスティニアヌス帝と妃のテオドラが教会を建立したが、これは『聖ヨハネ聖堂』と呼ばれていまは廃虚と化している。

だが昼すぎとなったので私たちはいったん付近のトゥサン・ホテルの裏庭の木陰のテーブルで昼食をとった。プールがあり、快適な場所だ。ナスビを焼いたものにヨーグルトをかけて食べるのがおいしい。焼肉も出る。デザートには桃など、たっぷり食べたあと、二時に再度バスで出て、エフェソスの遺跡群に属する聖母マリアの家へ行った。

聖母マリアの家の謎

古来からの伝承によると、ヨハネはエルサレムを脱出する際に、聖母マリアを連れて出たあと、エフェソスまでエスコートしたという。しかしその住居跡は不明とされていた。ところが一七九〇年、ドイツ人の修道女アンナ・カテリーナ・エメリッヒがエフェソス近郊の標高四百二十メートルのソルミソ山頂に埋もれている小さな小屋の幻を見て(一説によれば夢で見たともいう)、これが聖母マリアの住んだ家であると宣言したために、発掘したところ、実際に小屋が現れた。それでマリアの家に違いないということになり、修復されて現在は礼拝堂になっているのである。

日光のいろは坂を思わせる曲がりくねった道をバスで山頂まで登り、降りて少し歩くと茶褐色のレンガ作りの小さな家に着く。中へ入ると奥のアーチの下にマリア像が安置され、燭台がある。土間に敷きつめてある大理石は新しい。近年修復したものだろう。横に

小さな部屋が付属している。ローマ法王パウロ六世は一九六七年七月二十四日にエフェソスを訪れたとき、この家を巡礼地に指定した。

だが私にはどうもピンとこないものがあった。本物だというフィーリングが起こらないのだ。だいいち、ここはヨハネが住んだ港町とはかなり離れた標高四百メートル余の山中である。付き人が何人かいたのかもしれないが、迫害をのがれるとはいえ、なぜヨハネと離れてこの山奥に住まねばならなかったのか。食糧その他の生活必需品をどのようにして調達したのか。

疑惑が消えぬままに外へ出ると、石積みに数個の蛇口が取り付けてある。ここから出る水を飲めば難病が治るといわれているので、大勢のカトリック信者が来るらしい。水をつめるプラスチックのビンも売っている。ルールドのミニ版だ。飲んでみると冷たい生水なので、おいしい。ここでは全員記念写真を撮影する気になれなかった。

ヨハネの墓を訪れる

三時前にバスで山を降りて再度エフェソスの遺跡へ行く。広大な都市跡の大理石通りを歩いて、ヨハネの墓へ来た。きれいな大理石を敷きつめた約四メートル四方の四角な床の四隅に柱が四本立ててあるだけの簡素なものだが、烈日を反射して美しい。

後方に小さな四角形の穴がある。この地下には住居の遺跡があるとファティさんが説明する。つまりヨハネの住んだ家の跡に大理石板をかぶせて墓にしたわけである。ここは確かにヨハネの偉大な波動を感じさせる場所で、住居跡であることは間違いないだろう。

全員記念写真を撮影後、四時にエフェソスをバスで出発。冷房がないのでムシ風呂のようだ。排気ガス公害を防ぐためにバスに冷房装置をつけるのは禁止されているという。

イズミール空港を六時三十五分に離陸してイスタンブール空港へ七時十三分に着陸後、バスで夕暮の海岸へ出て降りる。沢山の人が海岸通りを散策し、露店の魚屋が店を並べている。

酒タバコと無縁

▲ヨハネの墓(エフェソス)

八時前にレストラン『ウチュレ』に入り、典型的なトルコ料理を賞味。多種類の珍しい料理が次々と出る。

私は五月十日の東京月例会の夕食会を最後としてアルコール類を一切断ち切ってしまい、ビール一滴も飲まない生活を続けてきた。この旅行中も飲まないようにしていたのだが、どうも私が飲まないと皆さんが遠慮して飲もうとせず、座がシラケるような気がするので、この夕食で奉仕的に少し飲むことにした。ビールを少々とラクというトルコの地酒を試す。これはブドーを原料とした四十五度の強烈な酒で、ストレートでは飲めないから水で割るのだが、割ると白く濁り、甘味がついてとてもおいしい。私が飲んだので俄然一座の雰囲気が盛り上がった。

散々食ったり飲んだりして一人日本円で千七百円だから安い(こうして旅行中は十五日まで少し飲んだが、帰国後また飲まなくなった。アルコールで肉体を麻痺させるとテレパシックな感覚発現の障害になるような気がして飲む気になれない。現在は酒タバコと無縁である)。

トプカプ宮殿と洗礼のヨハネの手

十一日も快晴。九時半にバスで出発。ガラタ橋を渡ると、すごい人波。十時頃トプカプ宮殿に到着して送迎門より入る。この宮殿は十四世紀に勃興して一九二三年にトルコ共和国誕生とともに終焉を告げたオスマントルコ帝国のスルタン(皇帝)の居城である。資料で読んで知ってはいたが、実際に来て見ると、広大な敷地に残る壮大な建築と陳列されている多種多様な宝物類に驚嘆のほかない。まさに最盛時のシュレイマン大王の権勢と栄光で輝いているかのようだ。歴代の王三十六人の内、二十六人がここに住み、常時六千人が居住したという。無数の金銀宝石、一万点以上に及ぶ陶磁器、ハーレムの玉座、その他の遺宝が陳列され、現在は博物館として公開されている。

膨大な展示品を見てゆくうち、展示室の最後の部屋に驚くべき物があった。洗礼のヨハネの片手と称するものがあるのだ(注=洗礼のヨハネはイエスに

▲トプカプ宮殿送迎門(イスタンブール)

洗礼を施した人。イエスの弟子のヨハネとは別人物)。

覗くと黄金の薄板で作られた腕の形の鞘の、手の甲の一部に穴があけてあり、そこに黒ずんでミイラ化した骨が見える。片腕の骨全体は黄金板で覆われているので見えない。ファティさんの説明によると、ヨハネの遺体はバラバラにされて、あちこちに保存してあるという。本物とすればすごい物だが、残念ながらわずか数センチ四方の穴から見える程度では、何のフィーリングもわいてこない。

宮殿の奥の庭が展望台のようになっており、ここから素晴らしい風景が展開する。左側がイスタンブール地区で、十六世紀のシュレイマニエ・モスクが夢のように浮かび、金角湾にかかるガラタ橋の右手には近代的なビルの林立するベイオール地区が見える。

十二時前に宮殿のそばのマルマラ海を見渡すテント張り大レストランで昼食。回教徒特有のシシカバブという羊の焼肉がまたも出るが、全く手がつかない。ファティさんは毎日一頭分の羊肉を食べるという。そのせいかトルコ人の男には出腹が多い。また口ヒゲを生やしている男も多いので、聞いてみるとただの習慣だと答えた。これは回教徒の習慣なのだろう。トルコ国内にはモスク(回教寺院)が四万八千あるというから完全な回教国だ。

大バザールの賑わい

一時十分にバスで出発して大バザールへ行く。ここは十五世紀に建設された由緒ある場所で、約三万平方メートルの敷地に三千軒(一説によると四千五百軒)の小さな店が密集して、宝石、金銀細工物、民芸品などを売っている。エジプト・カイロのバザールに似ているが、店はもっときれいで清潔であり、通路もゴバン目になって整然としている。メキシコ・オアハカのメルカード(バザール)で閉口した悪臭もない。

ガイドブックには、言い値で買わずに必ず半値で切り出して値切れとあるが、実際にはほとんど値引きしない。しかし日本人にはきわめて友好的で、コンニチワと日本語で声をかけてすり寄ってくる。これはおとなしい日本人がよい標的にされているせいなのかもしれない。

土産用に少々買物をした店の若い男の店員としばらく英語で話し合った。店主の息子で十九歳の彼は実に愉快な男で、トルコ茶を出してもてなしてくれた。トルコ人はなぜ日本人にたいして、こうまで友好的なのかと尋ねると、三百年昔日本人とトルコ人は兄弟だったからだと言う。セルジュクやオスマンの血を引く彼らには、どうやら東洋人だという自覚があるらしい。三百年昔というのは変な話で、彼の英語では三千年昔のつもりで言ったのかもしれない。いずれにせよ日本人にとってトルコが大変気持のよい国であることは確かだ。これを卒直に受けとめておけばよいのだろう。

イスタンブールの夜は更けて

夜は八時三十分にホテルを出た。トルコ滞在最後の夜なので、男は背広ネクタイ姿、女性も着飾ってバスでキャラバン・サライという大きなナイトクラブへ行く。各国の観光団が多数つめかけて国際色豊かだ。

五人組のジプシー風楽団の演奏がすでに始まっている。トルコをテーマにした行進曲はモーツァルトのピアノ・ソナタイ長調の終楽章、ベートーベンの『アテネの廃虚』の第四曲等、名高いのがあるが、トルコの民族音楽そのものはメイジャーでもマイナーでもないような哀愁を帯びたメロディーが多く——どちらかというとマイナーが多い——、明らかに東洋の音楽だ。

少年三人組、若い娘さん三名を加えた六人組の民族舞踊がしばらく続いたあと、呼びもののベリーダンスが始まった。中近東特有の、腹を出した女が腰を激しく振る踊りだが、ファティさんによると、三人の踊り手の内、三番目に出た女性がトルコナンバーワンだという。なるほど素晴らしい踊りだ。

最後のハイライトは男女二人の歌手による各国語の歌唱と各国観光団の斉唱である。この歌手というのはセルチュック、ラナ・アラゲスというトルコ一流の芸能人で、私の記憶では二人共七カ国語で歌ったと思う。最初にいきなり日本の童謡『桃太郎』を日本語で歌ったあと、セ氏がステージを降りてマイクを持ったまま何を思ったのか私の方へ近づいてきた。バンド演奏は『浦島太郎』の前奏を始める。セ氏がマイクを突き出して歌えと言う。「よし、やったるで」立ち上がった私は腹を据えて歌った。「むかしむかし浦島は——」。氏も一緒にうたう。一番歌詞を歌い終えたら、やんやの大喝采。各国の婦人たちの熱い?視線をあびる中で日本男子の面目を施して安堵した。

こうして二人の歌手は次々と各国語で名高い歌を歌い、その歌の国の観客にも斉唱させ、手拍子を打たせては巧みに国際親善の雰囲気を盛り上げる。二人の演技は素晴らしいもので、場内は熱狂の坩堝と化す。音楽に国境はないという言葉をこの場所ほど感じさせる所はない。

エルサレムにもこれに似たハン・ナイトクラブというのがあり、二年連続二度ほど行って、一度はステージに引っ張り出されて歌わされたことがあるが、キャラバン・サライはもっと豪華で楽しくて高級な感じがする。

二人の歌手が真っ先に日本の歌をとりあげたのは、私たちの正装にたいし

て答礼の意を表したのだろうと思う。

危険をのがれるカルマ

西洋と東洋の混淆した魅惑的な国トルコをあとにして隣国ギリシャのアテネ空港へ降り立ったのは十二日の十一時四十分である。ここも快晴だ。

私たちの旅行は奇妙に雨にたたられない。第一回目の旅行からそうである。また何度も言うように私自身は危険をのがれる特殊なカルマを持つので、私が同行する旅行で危険な事態が生じたことは全くない。提携旅行会社の添乗員たる田中さん(日本GAP本部役員)もこれを不思議がっている。「GAPの旅行ほど不思議なものはない。全く事故が起こらないんだ」と言う。たまに旅行中、病人が出ることもあるが、すぐに治ってしまう。そして毎回全員無事に帰国する。「何かが、ある」という事に気付いている人は多いと思うのだが——。

◀トルコナンバーワンのベリーダンサー

といって完璧なコーディネートをやっているわけではなく、予備知識の不足、勘違い、もの忘れなど失敗も多い。それで反省に反省を重ねながら旅を続ける。また旅行団を常に観察し、人間関係を鋭敏に見抜く必要もあるが、こちらが疲労すると、それどころではなくなってくる。団長としての気苦労は相当なものだが、極力顔に出さないようにする。これからみるとプロとはいえ田中さんの労力は大変なものだろう。

日本人の多いギリシャ国

紙数の都合で急ぐことにしよう。アテネは二度目だが、ここはヨーロッパなのでトルコとは全く雰囲気が違う。またギリシャ人は日本人に対してなれなれしくしない。現地旅行社のナナさんという婦人に聞くと、ギリシャ人は大変親日的だという。単なる外交辞令でもないらしい。ただ表情にあらわさないのだろうと結論づけた。だが駆け足の旅行者には実態はつかめない。

まずアクロポリスの丘に登り、雄大なパルテノン神殿を見学。東側の正面は足場を作って修復中なので、正面側は写真にならない。以前よりも柱の数がふえている。ガイドは中学の先生のジョージ・ラグーダキス氏。この人も日本語を独習で覚えて、夏休みにバイトでガイドをやっているという。

丘を降りて博物館へ入る。ミケーネの部屋が素晴らしい。夕方スタンレーホテルへチェックイン。ここは五十三年にも宿泊した。

八時四十分にカロケリノスというナイトクラブへ全員で行く。民族音楽、民族舞踊があり、ベリーダンスも演じられたがトルコの方が良い。日本人グループも数組来ている。各国のグループから男が引き出され、ステージで腹を出してベリーダンスをやらされる。日本人は三人が出演し、GAPからは鈴木芳美君(静岡県)が健闘。満場爆笑の渦。

翌十三日、快晴下をバスでエーゲ海のサロニカス湾沿いに走り、コリント運河に寄った後、コリントの遺跡へ到着。パウロが福音を説いた演壇が高さ二メートル以上に修復されている。以前には土台石しかなかった所だ。

続いて十二時四十五分にミケーネの遺跡に着いて、ライオンの門をくぐる。以前と同様、大変な混雑で、上半身ハダカの白人が多い。

偉大なシュリーマンの発掘になる円形墓地Aの所で、女性ガイドのコラさんが、まわりくどい日本語で長々と説明をするので暑くてかなわない。適当なところでやめてもらって、丘を登り、宮殿趾へ行く。コラさんはアガメムノン王とクリタイムネストラ妃の肝心の物語を話さぬので、かわって私が一同に説明する。不倫ナンバーワンの伝承なので彼女には話しにくいのだろう。

丘をくだってアトレウスの墓へ行く。暑いのと疲労でへたばりそうだ。二時半よりの昼食休憩で生き返り、現存する最古の円形劇場を五時に見たあと、夜八時四十分にホテルへ帰着。

翌十四日は病人が出たため田中氏が付き添ってアテネの病院へ入院させる。結局十二名でエーゲ海周遊の船旅に出る。

エギナ島、イドラ島、ポラス島をまわり、その都度上陸し、買物をする。紺碧の空に島の白亜の近代的な民家が映えて美しい。商店からはギリシャ独特の牧歌的な明るい民族音楽の男声合唱が流れてくる。何もかもがトルコと対象的だ。

帰途船室内はブズキという楽器を主体に民族音楽の演奏があり、民族舞踊も行われ、ついには各国人が輪となって踊り、大歓声がとどろく。ここは人種展覧会だ。日本人グループも数組いる。一体にギリシャは日本人観光客だ

▲パルテノン神殿(アテネ)

らけで、どこへ行っても出会う。日本人好みの国なのだろう。

ブルーノの火刑場跡を訪れる

病人も回復して全員で元気よく十五日午前十時前ローマへ移動。まずバチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂へ行く。私は四度目だが、来るたびに巨大さに驚く。正面の壁は修理中。この日は聖母昇天祭のため聖堂内でミサをやっており、奥まで行けなかったが、ミサを見るのもよい体験になった。

ただし市内は祭日なので商店は全部閉鎖、車の往来も少なく閑散としている。これがホントの『ローマの休日』だと笑う。型のごとくコロセウム、フォロロマーノ、トレビの泉などを見学し、午後は自由行動。私は一人タクシーでローマ中心部から西寄りの位置にあるカンポ・デイ・フィオーリ（花の広場）へ行った。

▲サン・ピエトロ大寺院（ローマ）。左端より筆者、ガイドの三宅さん。右端は田中氏。

ここは十七世紀の哲学者ジョルダノ・ブルーノが、コペルニクスの地動説を支持し、無限の宇宙に無数の世界が生成消滅するという宇宙無限論を説き、万物は唯一の創造主のあらわれだという汎神論を主張して当時のスコラ哲学、神学に真っ向から対立したために、宗教裁判にかけられて、一六〇〇年の二月、生きたまま焼き殺された歴史的場所である。

来てみると予想外に汚い場所だが、彼が死んだ位置に大きな銅像が立てられている。今は周囲に五、六階建の汚いビルが並んでパッとしないが〝中世のアダムスキー〟ともいうべき偉大な宇宙的先駆者の顔は西日を浴びて美しい。万感胸に迫って佇立し、低徊する。

約一時間ここにいて写真を撮ったりしたあと、タクシーでホテルへ帰った。ブルーノについてはいずれ稿をあらためて書いてみたい。

夜は全員でカンツォーネ（歌）の聴けるレストランへ行って食事。ここにも日本人グループ数組が来ている。

GAP旅行団を讃える

ローマのガイドは三宅さんという奄美大島出身のローマ在住十六年のベテラン女性。イタリア人と結婚し、イタリア語はペラペラ。

この方が田中さんに語った話というのが興味深い。それはこうだ。ローマへ来る日本人観光団は数多いが、いずれも遺跡へ来るとガイドの話を聞こうとはせずに、てんでに散らばって写真を撮りまくる。ところがGAP旅行団はきちんとガイドを取り囲んで話を聞いてくれる。こんな立派な旅行団に出くわしたのは初めてだという。

オレンジ色の円盤を目撃！

ローマのプレジデントホテルへ一泊した翌十六日、見学日程のすべてを終了した私たちはアリタリア航空七八六便で帰途についた。事情により四名だけはファーストクラスのゆったりした席に乗り、私もその一人となる。

デリー時間の八時三十分頃、後方のエコノミークラスに乗っていた小川里津子さん（岡山県）が円盤を目撃した。右舷側の窓近くに座っていた里津子さんにむかって、窓の外を見た外人の老未妻が、外を見よという合図をするので、のぞいて見ると、見かけ上直径四センチぐらいのオレンジ色の丸い光体が飛行機と並行して飛ぶのを約三十分目撃したという。右隣にはご主人の小川照廣君と鈴木芳美君が座っていたが、二人ともよく眠っていたので起こすのは可哀そうだと思って知らせなかった。なぜ起こしてくれなかったんだと小川君は残念がっていた。

これは毎回旅行前に参加者全員に渡す『旅行心得』の中にガイドに関する注意事項が述べてあり、旅行説明会でも注意するので、皆さん方がよく守って協力するからである。まず日常のマナーから基礎を築いて洗練された紳士淑女になろうというのが昔からのGAPの方針だ。自慢めいた話になって恐縮だが、以上は事実を率直に述べたにすぎない。

不思議な閃光三発

私自身もデリー空港を離陸後、眠れぬままに窓の遮光板をあけて暗黒の夜空を約三時間見つめていた。三回の小さな光体が飛ぶのを見たけれども、その後あるとき機体の左後方からものすごい閃光が機体を数秒間照らして消えた。驚いて見つめていると、約二分後にまた強烈な閃光が照らす。そして約二分後に三回目の閃光。目も眩むばかりの光が規則的に三回連続して発生し、その都度機内は明るくなったが、乗客はみな眠っていたので知らない。ただ右隣の朏文子さん（長崎県。GAP会員・朏民典君の母堂）も目を覚ましていて、並んだもう一つの窓から外を見つめていたので、この閃光を目撃して

いる。雷光があんなに規則的に光るとは考えられぬので、別な原因によるものだろう。とすると私と舩さんの二人が窓をあけて外部をのぞいているのを知った円盤が、接近して強烈なサーチライトを照射したのか!? 蒲地(かもち)宏子さん（佐賀県）もこの閃光を目撃したことがあとでわかった。

小川里津子さんが目撃したのと同じようなオレンジ色の二個の光体を伊東芳和君（東京）も左舷の窓から見ている。目撃者一同の話を総合すると、どうやら私たちの旅客機に円盤が並行して長時間飛んでいた、ということになりそうだ。

短期間だが実に楽しくて有益な旅行だった。参加者各位のご協力と、激励して下さった多数の会員各位に衷心より感謝の意を表したい。

〈掲載写真はすべて筆者撮影〉

付記 ■帰国後、エフェソスのヨハネの墓の写真を春川正一氏に見せたところ、イエスの弟子特有のすごく高貴な透明な波動を感じるという。そして左右の柱の空間に一人の老人の姿が見えるといって、みずからスケッチしたのが右下の図である。

マリアの家の写真を見せたら、やはりマリアの波動は出ておらず、大昔、だれか超能力者が住んだ跡だということだ。

トプカプ宮殿の洗礼のヨハネの右手の骨の写真については、ヨハネどころではなく、むしろ高貴な人を殺した古代の残忍な軍人の骨だという。

また重要なことだが、私たちGAP旅行団には四名のスペース・ピープルと三機の円盤がエスコートしていたということである。だから夜間に円盤や閃光を見たのだ。

■普段でもそうだが、旅行を通じて腹の底から痛感したのはテレパシー能力の重要性である。それもただ他人の想念を読み取るというだけでなく、万物の波動をキャッチするという超高度なアンテナ人間になる必要がある。そのためには四つの感覚器官を制御しなければだめだというア氏の『テレパシー開発法』の理論をイヤというほど思い知らされた旅ではあった。またどこへ行っても人間は皆同じだとの感を深くした。根本的に差などはない。

■歴訪した都市ではイスタンブールが魅惑的だった。いつかまた訪れたい。ガイドのファティさんが書いた『イスタンブール』と題するガイドブックの最後の一節を引用しよう。

▲夕暮のイスタンブール

「私にとってイスタンブールは、いつの日も青春を生きる乙女のようである。彼女はジュリアス・シーザーに『来た、見た。だがわが目を疑う』と言わしめた。

我々の旅は終わった。〝ガラタ橋の下〟に行く時間が来た。不死鳥のようによみがえろう。酒(サケ)を片手に、彼女の美しい横顔をながめながら――」

Impressions of Greece, Turkey and Italy
「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」に参加して

機内から二個の光体を目撃

東京　伊東芳和

この度の「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」は大変心引かれる思い出深いものとなりました。これは一重に久保田先生、田中さんのご尽力によるもので、心より感謝致しております。ありがとうございました。

トルコに着き、イスタンブールの空港を後にし、バスの車窓から流れる異国情緒豊かな町並みを見るにつけ外国に来たという実感がわき、目はすっかり外に釘付けになりました。一つももらすまいとする幼稚園の園児のようでした。

カッパドキアの見渡す限りのスケールの大きな雄大さには、ただ驚くばかりで、言葉もありません。そしてキリスト没後、迫害を逃れ、この自然の奇岩怪石を掘り抜き、なおかつこれら自然と融和し、見事なキリストの壁画を描いた初期キリスト教徒のキリストへの思いは、我々の想像の及ばぬものがあったのではないでしょうか。

古代遺跡のすばらしさは言語を絶する物で、古代人の力と知恵にはほとほと感服致します。何か我々のあずかり知らぬ「力」の存在を思い起こさずにはいられぬものを感じました。

この旅行中期待した何かが起こらなかったと思われた矢先、帰りの機中で円盤目撃事件が起き、やはり我々グループはスペース・ブラザーズから注視されているのだという思いを新たにしました。私も前後して反対の窓から点滅する二個の光体を翼の下から目撃したのですが、この直前になんとも言えない愛のフィーリングに満たされた気持になりました。意識の高揚が起こり穏やかな喜びが充満されたのです。それはスペース・ブラザーに想念を送っているさ中に起こったようです。このような感じは初めて経験するものです。

そういえばローマでの先生のジュースの色の変化も不思議な気がしました。何か目に見えない「力」でも加わったのでしょうか。

終わりになりますが、私の発熱の際、皆さんに大変お世話になり、また何かと面倒を見て頂き本当にありがとうございます。田中さん、高橋さん、蒲地さんにも重ねてお礼を申し上げます。

最高の旅であった

静岡県　鈴木芳美

先日は素晴らしい写真を送って頂き、どうもありがとうございます。今回の「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」は楽しい思い出の多い、私にとっては最高の旅行であったと思います。参加したのは正解でした。

今回の旅行によって自分の将来への展望が開けたといっても過言ではありません。素晴らしい人々との出会いによって自分の半生が一変してしまう——そんな旅でした。本当にありがとうございました。

強烈な閃光を目撃

佐賀県　蒲地宏子

先日のGAP海外研修旅行に参加させて頂いて本当に有難うございました。大変お世話様になりました。

トルコ、ギリシャ、イタリアと十二日間に渡り大変めずらしい景観と予想以上のすばらしい遺跡、異国情緒あふれる街並と人々、そしてGAP会員の方たちの心なごむ雰囲気で本当に楽しい旅行ができたことを心よりうれしく思います。

それから偶然機内で先生の隣の座席でごいっしょさせて頂いたとき、色々と質問をさせて頂いたこと、ホテルの喫茶室で夜遅くまで談笑したことなど感謝致します。

今回の旅行で先生をはじめとして会員の方たちといっしょに行動を共にすることができ、色々と勉強をさせて頂いて思い出深いものとなりました。GAPとのご縁があったことを心よりうれしく感じております。

◀カッパドキアの地下トンネル中の編者。蒲地宏子さん撮影。

成田までの帰りの機内の中から、雲の間からものすごい光が四発程あたり一面を明るくしました。最初は雷かと思いましたが、ものすごく印象に残りました。UFOの光だったのでしょうか。

オレンジ色の光体を目撃

岡山県　小川里津子

旅行中は大変お世話になり、ありがとうございました。帰国しましてちょっと体調をくずし、お医者様のお世話になりましたが、やっと回復しました。

帰国しまして八月十四日の新聞を見て、ある不安感がやはり現実となったことに驚いています。トルコで事故にあわれた日本人の方々はやはり面識のある方々でした。

トルコの空港だったと思いますが、バスの中でお会いし、お話をした方々でした。私が座っていると中年の女性がにこやかに話しかけてこられたのです。新聞に載っているとおり、その方は横浜でH電鉄が募集したトルコツアーの十三人の小さな団体で、観光コースは私たちと同じイスタンブール、カッパドキア、イズミールで、私たちのすぐあとカッパドキアに行くこと等をお聞きしました。その奥様のご主人らしい方とツアーの仲間の若い女性の方がいらっしゃいましたが、不思議と皆同じ暗い顔なのです。強い不安感のようなものが想念となって私に訴えてくるのです。その感情は鉛のように心に重く残って、どうしても消えてくれないのです。「どういう団体ですか」と聞かれたので「宇宙哲学の団体です」と言うと、その方は「いいグループですね」としみじみおっしゃっていました。

バスが着いて別れ際に「無事に旅行して下さい」と言われたので「くれぐれもお気をつけて」と、私の内部から感じる不安を打ち消すように大きな声で別れの挨拶をしたのです。事故にあったのはそのグループの方々なのでした。

以前にもこういう強い想念を感じたとき、いろんな事故がありました。不幸にも去年から数回ありましたから今回もすごく不安でした。

(注＝筆者・小川里津子さんは一種の超能力的感覚の持主。GAP旅行団がトルコのカッパドキアを去って入れ違いに来た日本人のツアーグループの乗ったバスがトラックと正面衝突して多数の重軽傷者が出た)。

私が飛行機から見た光体もいつもと同じ印象のものでした。二年間で十数回UFOを見ましたが今回が一番長く見られました。いつもならビールをコップ一杯飲むと朝までぐっすり眠れるのですが、その日は少し違いました。

外は暗いのに窓に強い光を感じて頭が痛くなって目が覚めたのでした。窓、窓、窓をあけねばと思っていると、サッと窓をあける人がいたのです。老いた外人の方でした。その瞬間その方は驚いたように後方の夫人を呼んでいるのです。しきりに窓の外を指さして、あるものを発見した驚きの様子なので、私もその指の方向に目を向けてみました。

美しい光体！　大きさは胸につけ

ているバッジと同じくらい。オレンジ、ホワイト、ブルーを混ぜたような点滅しない丸い光体は、私が乗っている飛行機と同じスピードでついて来ているのです。窓からちょうど同じ位置で三十分間見えました。あたたかく見つめている、私たちを見つめている――これが光体から受けた印象です。皆さんを起こそうかと迷いましたが、それを鋭くさえぎる何かを感じました。

十二日間の先生との旅行は、最初先生がおっしゃった「私がついているからGAPの旅行は大丈夫」という言葉の意味を身をもって感じました。今回の旅行はすばらしかったと感謝しております。

宇宙的ロマンの旅

神奈川県　富岡設子

長い飛行機の旅の緊張がやっとほぐれたとき、私はしっかりとイスタンブールの地に足を着けていました。そのときの感激は生涯忘れないでしょう。なにしろ生まれて初めての体験です。

同じ夏でも日本とはまるで違う気候、異なった建築様式、回教徒の人々、車、街路樹、あらゆる色彩。ああとうとう来た。今私は間違いなく異国にいる――。

複雑な歴史を持ち、東洋と西洋が入り混じった不思議な魅力あるトルコは、全体に乾いた、また色あせた雰囲気を漂わせており、発展的なものよりも懐古的な印象を与えるのでした。

波動も実に混沌としているように思われましたが、その中から強く浮上してくるものがあるのです。それは「母性的な温かさ」です。これは不思議で、どこに行っても感じ取れました。トルコが単に親日的というだけでなく、トルコ人自身が持つ独特な性質なのでしょう。

〈カッパドキアの衝撃〉レンガの山、一面のヒマワリ畑、羊の群、トウズ湖（乳白色に輝く塩の湖）、大昔の隊商の宿の遺跡、哲学者たち（仕事をしないで屋外で一日中座り込んでいる男たち）などを車窓から見ながら、サービス満点の快適なバスの旅。

どこまでも続く異様な火山地形に圧倒され続けるうちに絶好のシャッターチャンスが来ました。真赤な夕日が巨大な岩の間へとろけるように沈んで行くのを見たのです。「なんて凄いのだろう！　これが地球の一部だなんて！」このとき私は全ての事から解放されている自分の体を実体のないものと感じていました。

次に見たものはどれも想像を絶するものでした。巨大な地下都市、洞窟修道院のフレスコ画、迫害されたキリスト教徒たちの追いつめられた生活の場を複雑な思いで見てまわりました。その地下都市は真っ暗闇の中で語りかけてくるのです。「生きようと思えばこのような場所でも生きられるのだ」と。

〈エフェソスでのヒント〉かつて海港都市として繁栄したこの大都市は本当に見事なものでした。白昼に白い歴史の産物が光り輝き、一条の大理石通りが私たちをはるか昔へと誘ってくれるのでした。ここまで来てやっとこれが遺跡の旅の楽しさだと思いました。宇宙考古学の旅を難しく考える必要はありませんね（以下略）。

奇跡の連続――人生で最高の体験

秋田県　佐藤春雄

今回の海外研修旅行は私の今生で最も素晴らしい大奇跡でした。出発する一カ月前までは決して長期の旅行などは考えられませんでした。自分の身体上の理由から海外旅行は絶対に考えられませんでした。ですからせめてもとの思いから五十六年の十月から今年の五月までは大阪、福岡、沖縄以外の支部大会には参加してきました。

それと、おふくろが今年四月中旬より目の病気（白内障）のために入院し、最終的には手術するという結果になり、七月の中旬にやっと退院したのでした。ですから海外旅行は本当に夢物語としか考えられませんでした。

それが急変し、旅行に参加しようと決心してからも何度も本当に実現するだろうかと思い、今までミラクルワードやイメージ法を用いて望んでいることを口で繰り返し唱え、必ず実現するイメージを描き、もう実現したと思い込むのだと教えられていましたが、いざ実際に直面するといろんな雑念が先に出て本当のイメージは湧きません。ですから正直なところ本当にそうなるのだろうかと何度も疑いました。

でも今までにこの方法で自分が一銭も出さずに七十万円の車を手に入れたり、実際に実現したことが数多くありましたので、それらを手がかりに信念を強く持つように努力し始めました。

今はある事情で仙台市内に住んでいますが、今年の四月より一年間の予定でしたので、住所は秋田にしておりましたら、パスポート取得上大変面倒なことになった末、もうだめかと思っていた出発前の八月四日の午後に仙台市で取れることになったのがまず第一の奇跡でした。

第二が旅行費用の捻出。これもすでに述べましたようにおふくろの長期入院のためにローンは駄目でしたので、どうしても現金で全額を用意しなければなりません。休日が七月三十一日の午後から八月十七日までときまっていましたが、それまでは全く私用時間がとれなかったために住所変更、パスポート等の面倒な手続き一切をだれかに頼まなければなりませんでしたが、それを全部田中さんがやって下さいました。そして住所変更の際に健康保険証を頂いて下さったものですから、これを証明書として自分が入っていた生命保険会社から多額の金が借りられました。

そして八月四日に無事パスポートがとれてなんとか行ける状態になりましたが、その日の午後から深夜にかけて台風が接近して大荒れとなり、最初に計画した常磐線がまず全面ストップ、そして東北本線、在来線はすべてストップ。とうとう新幹線までもストップして身動き出来ない最悪の状態になりましたが、五日の午後から少しずつ回復し始めましたので東京へ出ることができました。これが第三の奇跡です。このことでも田中さんと先生には大変ご心配をかけてお世話になりました。

以上述べましたように出発前の奇跡的出来事の連続に私は本当に感動しました。いまだにまだ夢心地の状態でもありますが、ただ確実に言えることはみずからこの肉体でこの足でトルコ、ギリシャ、ローマの素晴らしい異国の大地を踏みしめてきたということです。そして自分が現地で買ったガイドブック、写真、絵ハガキ、先生に送って頂いた素晴らしい全員記念写真、蒲地さん、鈴木氏、斉藤氏から送って頂いた写真などを見るたびに、私は本当に行ってきたのだとの思いが強まってきています。

私が今回参加した主な目的は、今の自分、特に国内の事しか考えない自分を海外へ行って目を開かせたい、何も望まずに参加し、見事に帰って来たいということにありましたが、それでも一番強く感じていることは、井の中の蛙（かわず）、大海を知らずで、全く視野の狭い自分に気がついたということです。それと日本の緑の豊かさは世界一といえるのではと思いました。さらに日本の生活の豊かさ等々、数えあげればきりがありません。

そして国外から日本を見てあらためて強く感じたことは、日本GAPの活動の素晴らしさ、特に久保田先生の絶えまのない奉仕的生活への努力の縮図を旅行中にこの目でしっかりと見ました。また田中さんには本当に何から何までお世話になり、その上、これは恥ずかしいことですが、私たちの年代はどのように生きるべきかを教えられたように思います。また終始親切に面倒をみて下さった同行の皆様方、本当に有難うございました。心からお礼を申し上げます。

最後に先生と田中さん。今後ともあのような素晴らしい旅行を計画し、実現させ続けられますようお願い申し上げます。あらゆる生命、万物の創造主に心より感謝！

なつかしい思い出に満ちた旅

長崎県　朏　文子

「ギリシャ・トルコ・ローマ宇宙考古学の旅」の予告を初めて読みましたときは、他人事で私とは全く関係のない事と思っておりましたが、なんとなく行けるような道が開け、三人の子供達からも勧められて遂に参加の幸せを得たわけでございます。久保田先生、そしてGAPの皆様のグループにお取引先のお嬢さんである蒲地宏子さんとご一緒に加えて頂きまして本当に一生の思い出の旅が出来ました。

夢の彼方のように思っておりましたトルコのイスタンブール、ギリシャのアテネ、そしてイタリアのローマを現実にこの我が目で見、肌に触れることが出来ました。素晴らしい思い出ばかりでございます。

そして最高の幸せは帰途アリタリア航空機で久保田先生のお隣に席を頂き、ローマより成田までお伴をすることが出来ました事です。そして途中ニューデリーからホンコンの間であったように記憶しますが、皆様がおやすみになっておられた真夜中に、先生が窓をあけて外をしきりに眺めておられましたとき、私はちょうど目を覚まして一生懸命眠たい目をこすっておりました。おかげさまで昼間のように明るいUFOのビームを三回見ることができました。大変に嬉しうございました。

大山の風格の久保田先生、眼鏡をかけて人員を数えておられる姿が目に浮かぶ田中様、帝国ホテルのお話の面白かった伊藤さん、静かにポツポツお話をなさる井川さん、病気をなさって可哀そうだった斉藤さん、眼鏡と背中のリュックが印象に残る島村さん、福岡まで不思議に飛行機ご一緒でしたね。よくお世話をなさって明るくてやさしい高野さん、モダンで美しい富岡さん、本当にお人柄のよい佐藤さん、東北なまりのお話が耳に残っております。あまりお話をする機会のなかったお方で、しっかりした感じの鈴木さん、そして微笑ましいカップルの小川さんお二人。本当に皆様おなつかしく存じております。よき思い出の頁を繰りながら思うままを書き綴り、送らせて頂きました。

サンピエトロ大寺院での出来事

山形県　高野昌子

昨年の今頃に、今度の旅行はヨーロッパ、それもギリシャ近くの国々へ行くだろうと思っていました。そして今年になって行先が変更になったとき、私も行こうと思いました。

トルコは私の過去世への旅行でした。イスタンブールは遠い昔に自分が触れていたものを確かめているような気がする都市で、ムッとする熱さまでもが懐かしい感じでした。

アヤソフィア（大聖堂）のモザイク画は悲しすぎ、涙で苦しみ、そして赤い血が見えてくる。人々の争いと苦痛から逃れるように、自分たちで目を閉じてしまっているように感じました。

アンカラのヒッタイト博物館はあまりに現実そのものでした。

アンカラからカッパドキアへの道。この風景に懐かしさで涙がこぼれました。大地の色、塩の湖、四方を囲む山の高さまでが過去世の記憶のままです。岩を含んだ大地、小川の流れる道、草の枯れた感触が今にも足に感じるようでした。二千年前、私はこの道をインドへ向けて歩いていました。

ギョレメの教会の壁画。チャクラが凝縮してゆく波動を感じました。今にも岩の階段から黒い服にサンダルをはいた修道士が、石段を見つめながら歩いてくるような気がします。

私は二千年前に、自分の信念のもとにこの地を歩いていました。そして今この地を訪れて、真理と自分を求めていると感じました。

エフェソスは驚異でした。マリアの家にはなにか割り切れないものを感じました。

ヨハネの墓が目の前に現れたとき、とにかく嬉しかった。感動しました。没して二千年程たつというのに、いまだ変わらぬこの波動を感じるために私はここへ来たのだと思いました。

すべてを包み込むような巨大な力を感じ、その力が私をつらぬいて、過去の楽園を今の私に感じさせているのだと思いました。

トプカプ宮殿。この日は睡眠不足で、かまえることができなかったために、すべての印象が素直に感じられ、過去と現在を結び、意識のみがタイムマシンに乗り、過去を見て、そして現在の私が今を見ている。そんな二つの映像が見えてきて、まったく不思議な体験をしました。

グランドバザールはとにかく楽しかった。

ギリシャは暑かった。エーゲ海はとってもきれい。

サンピエトロ大寺院。弾圧、抑圧、偏見、虐殺——。そんなことを意に介さないほどの信念の強さと、何物にも屈することのない強い意志を感じ、驚くほどでした。

そしてまた地の底から神に救いを求めようとする虐殺された人々の叫びで寒気がし、いまにも私を地の底へ引きずり込んでしまうような、そんな二つの印象がごっちゃになってなぜか涙がこぼれました。

私がバチカンに入り、バスを降りたとき、大寺院に向かって右手通路の上空から「マサコ」と呼ぶ男性の声が聞こえました。そのとき私の目には数機の円盤が見えていました。

その声が次には寺院の右側から、そして寺院に入ってからも数度名前を呼ばれました。呼ばれるとチャクラが焼けるような気がしました。

大寺院の中を一周してガイドさんについて一度外に向かったのですが、どうしてももう一度声のする方へ行きたくて戻りました。先生と歩いて行って司祭さんを見たとき、あの方だと感じました。そして「ありがとうございます」と自然に心の中でお礼を言っていました。

あとで先生とはぐれてしまって、一人でミサの群集の後方でどうしようかと迷っていました。私のいた所からも先生の姿は見えましたが、どうしても行く気になれず、外に出ようかと思って歩きだしたら、「待って」という声がしました。まったくチャクラへの送信です。振り返ったら私をニコニコ見ている方がいました。私がこの人だと感じてその方の方へ行こうとすると、自分の方へは来てはいけないというので、その方には近づくことができませんでした。それで「もし宇宙の方なら私について来て頂けませんか」と送信して私が歩きだしたら、その方も私のかなり後ろを歩いていました。出口の途中まで来たとき「バイ」とおっしゃったので、私も「ありがとうございました。さようなら」と送信して別れました。とてもすばらしい体験でした。

人は幾度も生まれかわり、古い記憶を少しずつ忘れ去り、そしてまた新しい生を受けて今ここにいます。だけど人々の残したものは数千年の時を経て姿を変えようとも、なお威厳をもってその場所に存在しています。そして私に過去の姿を思い出させてくれました。

最後に、この旅行を企画してくださった久保田先生、田中さん、楽しい思い出を与えてくださいました同行の皆さん、そしていつも変わらぬ愛ある宇宙の意識に感謝します。

▶ギリシャ・ミケーネの遺跡にて。
小川照廣氏撮影。

GAP News

GAP短信

■各地UFO写真展、大盛況！

今年夏はGAP東京本部、地方支部等により五カ所でUFO写真展が開催されていずれも大盛況裡に終了した。

1. 新潟UFO写真展（新潟支部主催）

七月二十四日より二十八日まで五日間。新潟市『伊勢丹デパート』六階『ふれあいのひろば』にて。入場者千四百四十九名。写真六十点を展示。スライド映写による解説、会長のUFO講演ビデオ放映、小冊子配布、アンケート実施、ア全集と本誌の即売。新潟日報社、有線放送テレビ社が取材。

期間中デパート側によるミニプラネタリウム星座教室も共催。アンケート総合結果は賛辞多数。

2. 静岡UFO写真展（静岡支部主催）

八月十四日より十九日までの六日間。静岡市『ライブアピタ静岡』三階『ライブスポット』にて。入場者は六日間で計二千名強。写真約六十点を展示、会長講演ビデオ放映、小冊子配布、入場者へ対話形式による説明、読売新聞来訪取材十六日付県版に記事掲載。

3. 福山UFO写真展（松山支部主催）

八月十四日より十九日まで六日間。広島県福山市『天満屋百貨店』八階の『シティーギャラリー』にて。入場者は総計七千五百名。小冊子配布、UFO8ミリ映画上映。ア全集、本誌の会場即売は禁止のため展示のみ。入会案内書配布。十四日福山市上空に三機の巨大な母船が市民二名に目撃され、十六日早朝五機の円盤編隊が低空で通過するのを新聞配達の少年が目撃。

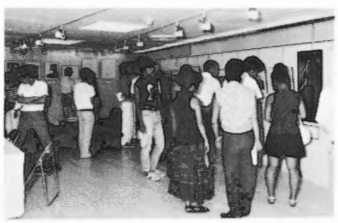
十月十八日より九日間、松山市丸三書店でUFO写真展開催予定。

4. 千葉UFO写真展（東京本部主催）

八月十五日より二十日まで六日間。国鉄千葉駅ステーションビル『ペリエ

今回は二回目で交通不便な小さなデパートが会場なるも、六日間で二千名を超える入場者数はデパートの催事中最高記録。会場内の図書即売は禁止のためGAP入会案内書を配布。

I四階ギャラリー』にて。アダムスキー関係写真約五十点、アンケート実施。UFO目撃記録用紙配布。ア全集、本誌即売。入場者数計五千二百五十二名。



会長講演ビデオ放映。読売、東京、朝日各新聞が紹介記事掲載。千葉テレビ取材放映。ア全集即売で『生命の科学』が最高の売行きを示した。期間中、掘江健一氏撮影のステーションビルの写真中、左側の空中に母船らしき物体が出現。

5. 福島UFO写真展（山形・仙台両支部合同主催）

写真四十五点を展示。八月十五日より十七日まで三日間。福島県福島市『岩瀬書店ギャラリー』にて。ア全集、本誌即売、入会案内書配布。入場者計三百五十名。福島日報、読売、河北新報に紹介記事掲載。テレビ、ラジオも放送。開催を急拠決定し準備期間不足の割には成功。来場してUFO目撃体験を詳細に話す人もいた。ア全集即売コーナーを受付と切り離したらよく売れた。半日がかりで本誌92・93・94号を読破する人もいた。

■台湾UFO研究会会長・呂應鐘氏再来日、久保田会長と会談

九月四日東京駅前にて会長は呂氏と二度目の会見を行い、依頼されていた原稿と昨年度総会全員記念写真を手渡した。これは年末に呂氏が台湾で創刊予定のUFOと科学の専門誌『SUF』に掲載される。発行部数四十万部。また台北市でセミナー開催計画があり、久保田会長に講師として出席要請もあった。会談は英語で友好的に行われ宇宙考古学研究家・高坂勝己氏も同席した（氏はラエリアンを退会済）。

■デンマークGAP機関誌、松山事件を掲載

デンマークGAP発行英文版機関誌『UFO contact』今年八月号に、日本GAP英文版機関誌『UFO contactee』（こちらはeの字が二つ多い。意味も違う）第二号に掲載した松山事件の全貌を伝えるA Japanese Boy Who Went Aboard A Flying Saucerが写真とイラスト付きで全文転載された。同誌は世界のUFO研究グループ、各国政府機関に送られているので大反響が期待される。

■六十二年度GAP海外研修旅行

来年度はアメリカ西部東部とメキシコ・ユカタン半島の古代マヤ遺跡を巡る十二日間の旅を企画。詳細は本号47頁の予告を参照。

'86 GAP-Japan General Assembly

61年度 日本GAP総会

空前の大盛況！

●昭和六十一年九月二十一日(日)
●銀座ガスホール（東京都中央区）
●出席者　三百九十五名

畳り空の涼しさが心地よい秋の午後、東京月例研究会二百回達成を記念して、昭和六十一年度日本GAP総会が開催された。

Uコン93・94号に連続紹介された偉大なコンタクティー（別惑星の人と会見した人）が出演されるとあってか、受付には開場前からたくさんの方々が集まった。一年ぶりにお会いする方、数年ぶりにお会いする方も見受けられ、再会を心から嬉しく思う。また、今年の特徴として、初めてお目にかかる方が多かったようだ。それもそうだろう。総会前にはGAP本部あてに「会員でなくても出席できるか」という問い合わせが二十件あまりあったというから、問い合わせなしの方々を含めたら、GAP会員以外の出席者数もかなりのものと思われる。それだけUコンに連載された春川正一氏の体験記の与えたインパクトは大きかったのであろうし、そうして会員以外にも春川氏の体験や総会開催の情報が伝わっているということは、とりもなおさず会員有志の奉仕活動によるUコンの書店卸しが「知らせる運動」として絶大な成果を上げていることを示すものである。

客席は受付の混雑ぶりを反映して、どんどん席が埋まってゆく。そして遂には満席になり、立たなければならない人が数十人出るほどの大盛況となった。最終的な出席者数は三百九十五名ということで、これは新記録だ！

総会は篠芳史氏の堂々たる司会によって始められた。篠氏の紹介によって拍手の中を日本GAP会長久保田八郎先生が登場される。久保田先生の演題は「アダムスキー問題と日本GAP」である。

昭和二十八年にアダムスキー氏と文通を開始し、昭和三十六年にはアダムスキー氏の要請により日本GAPを創設して、今年(昭和六十一年)九月で満二十五年を迎えられたという久保田先生は、アダムスキー氏の著書との出会い、翻訳出版における不思議な援助を受けた話、機関誌刊行の苦労話など、日本GAPの歴史を紹介された。戦後の混乱期に活動を始められた先生のご苦労は察するに余りあるが、先生が必要とされるものはどこからともなく与えられたというお話や、子供の頃からUFOを見ていたというお話を考え合わせると、先生は昔からスペース・ブラザーズ(友好的異星人)に見守られていたと考えざるを得ない。

東京月例研究会は今年八月で二百四回を記録したが、それに関連して先生は「何事も続けることが大切」と強調された。そして今、地球は過渡期にあるのであり、いつか必ず宇宙に目覚める日が来ると私たちを励まされる。

また、春川氏を「第二のアダムスキー」と称え、春川氏との交流の中から、万物の波動を感じるテレパシー能力の重要性を今夏の旅行の体験談を交えながら説く。そしてその能力は強烈な忍耐と信念によって毎日欠かさず練習を続ければ必ず発現すると、実例を紹介しながら強調された。「忙しい、というのは弁解にならない」というお言葉は怠け者の私の心に痛く、「よし、今度こそ！」と決意を新たにした。

最後に先生は、自分一人でも信念を持って活動を続ければ、それは必ず輪となって周囲に広がると結んで一時間の講演を終えられた。

続いて春川正一氏が登場。「私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性」と題する一時間二十分にわたる大講演は、春川氏が本物であることを改めて証明した。春川氏の高次な波動は会場を力強く包み込み、その真実の波動に満たされて私の全身の細胞は喜びに震えた。

春川氏は「同質結集の法則」によって自ら久保田先生に話しかけたということだが、ニセコンタクティーが横行する現在、よく先生は春川氏が本物であることを見抜かれたものだと不思議に思う。しかも初めて会ったのは三月であったというのに、四月発行のUコン93号には早速対談記事を掲載しているのだ！　そのものすごい眼力と迅速な判断には敬服させられる。

最後に「東京月例研究会二百回達成のお祝い」として短時間の音と光のショーが繰り広げられ、久保田先生に感謝の花束を贈呈して総会の幕は閉じた。

会場を東芝ビル七階の『四季』に変えての大祝宴会も過去最高の出席者があり、久保田先生への記念品贈呈、春川氏への花束贈呈、会員有志による歌、演奏、福引など、終始なごやかに、楽しく進められた。

この楽しい雰囲気は二次会に持ち越され、春川氏も十時半過ぎまでおつき合い下さるほど楽しんでいただいたようだ。私はここまでで失礼したが、ホテル組は深夜まで、あるいは明け方まで歓談されたに違いないと推測する。

素晴らしい一日は終わった。私の人生で最良の日になったに違いない。久保田先生、春川先生、全国からお集まり下さいました皆様、今日は本当に有難うございました。

（安藤澄雄）

東京月例研究会200回達成記念
200

日本GAP総会
東京月例研究会200回達成記念

GAP-JAPAN

A Japanese Young Man's Visit to Other Planets Supporting G.Adamski's Claim

私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性

●春川正一——本誌連載中の「私は別な惑星へ行ってきた！」の主人公が、あらためて語る驚異的秘話！

昭和六十一年度日本GAP総会における講演（一時間二十分の全文収録）

〈司会者による紹介〉

ご紹介にあずかりました春川でございます。先程久保田先生からもったいないようなご紹介を頂きまして本当に緊張いたしております。ということは私自身もいろいろな体験を経てここに立っているわけですけれども、地球的なカルマに乗っかっている人間ですから、いま脈搏が一・八倍ぐらいにふえているんじゃないかという感じです。

まずお断りしておきたいのは、私は科学者ではございませんし、ましてや技術者でもないし、専門的な知識が非常に乏しい人間です。ですからなぜ私のような者にプラザーズ（注＝友好的な異星人）がコンタクトしてきたのか、いまだに不思議な部分が自分の中にあるわけです。とにかく主観的なレベルでしか私自身は話ができないのです。ですが精一杯お話ししたいと思います。ですから先程先生が言われた五官で映るこの春川という人間ではなしに、この後ろにある波動みたいなものを感じて頂けたら有難いと思っております。

テレパシーというものを知る

私がどのような過程でプラザーズと接触したかということからお話を始めたいと思います。私は現在静岡方面に家があります。非常に田舎なのです。田舎でのんびりしていい所で、たまにこうやって東京へ出てきますと、ああ東京の街は賑やかだなと思うぐらいに非常にのんびりした所でございます。

当時私は中学生でした。そしてとにかくUFOとか世の中で解らないものといいますか、謎の物体とか、解らないものという一つの烙印を押されているものには、あまり近づかないような人生を歩んでおりました。

というのは私の父親が非常な唯物論者だったのです。それで小さい頃から唯物論的な教育を受けまして、とにかく『知らぬが仏』で解らないものには近づかないほうがよいと考え、UFOとか超能力とかいう観念なんてものは自分の生活、ライフスタイルの中にはどこにも見当たらなかったんです。それ以前の人生においてはです。

もともと市街地に住んでおりましてから田舎に引越して、当然通っていた学校が転校になったのです。それで今よく言われますけれども当時はあまり話題にのぼっていなかった『いじめ』という問題がありまして、田舎の学校で結構いじめられたんです。そして非常に寂しい思いをしていました。友達ができないんです。

今聞いて頂いている方で感じられる方があると思いますが、話をすることがあまりうまくないんです。他人に自分を表現することがうまくない。そういう自分の持っている力のなさみたいなものが『いじめ』という反動で返ってきたのかもしれません。

で、とにかく寂しい。何か生きているものとコミュニケーションがとりたいということを非常に強く感じておりました。都合のよいことに家の裏はすぐ山なのです。鳥獣保護区になっていまして鳥やリスや、ときどき茶色の野ウサギが出てきます。そういうものを眺めて気をまぎらわせていたんですけれども、だんだん耐えがたくなってきました。

当時マスコミがUFOとかスペース・ピープルの問題に関して何度か取り上げておりまして、たしかテレビか何かがきっかけだったと思うんですが、「人間が持っている一つの根本的な、普通の認識をはるかに超えた力がある。それはテレパシーというものなのだ」ということを知りました。

そのテレパシーという能力をどんな人でもフルに発現させれば、必ずやこの地球以外の宇宙空間のどこかに存在する我々以外の生物と接触することができると思いました。当時の私は先程言いました唯物論的な考え方のベースがあったのですが、妙にその考えにひかれたわけです。今考えてみると何か衝動的なものがあったんですね。

たぶんそのときの衝動というのは私が生まれる前の——転生の問題になりますけれど——その頃から何かのきっかけがあったのではないかと思います。

まだ私自身うまく説明がつかないんですが――。

宇宙空間に送信する

そして、「よし、それじゃあ、やってみよう」ということになったんですね。自分にテレパシーという力があるのかどうか、そしてそれが地球以外の生命に届くのかどうか、ましてやそういう生物がいるのかどうか、とにかく衝動的にそれに挑戦してみました。

何をやったかと申しますと、夜寝る前になりまして、私の寝ている部屋がちょうど二階で、窓から夜空がきれいに見えます。そして窓枠に限定された宇宙空間を眺めながら毎晩となえたのです。

「もしここにいるこの春川という人間の呼びかけが解る生き物がいたら、はっきりと答を示してくれないか。反応を見せてくれないか」と心の中で絶叫を繰り返したわけです。

一週間たちましたが何の変化も起こりません。二週間たってもまだ変化はなかった。そしてその間の心境たるや呼びかけを始めた頃よりもさらに悶々としてくるのです。だんだん自己批判も出てまいりました。「なんで僕はこんなことをやっているのだろう？　こんなことを信じてやらなくてもいいじゃないか。ノイローゼになるんじゃないか」と、いろんな事を考えました。ただし今でもよかったと思うことは、そういうことを考えながらもやり続けたんです。

そして始めた日からちょうど三十日目でした。その頃になりますと、人間の心理というものは面白いもので、最初に絶叫に近い精神的決意で始めたのに、なかばもう精神的にあきらめておりまして、「まあいいや、とにかく三十日間夜空を眺め通したということは僕の人生で今までなかったことだ。それだけでも非常に得られたものがあったなあ。毎晩星々があたりまえのように空間を動いて行く――本当は地球が動いているんですが――。そういう光景をなにか無心に眺められただけでもよかったんじゃないか。さあ今日も寝ようか」と思ったんです。

そして重たい雨戸をガラガラと引っ張って、見える空間が狭くなったわけです。そうしたらその狭い空間を、きれいなサインカーブを描いてオレンジ色のはっきりとした物体が横切って行ったんです。

最初、数分かそこらは何も考えられませんでしたが、そのうちに疑問が出てきました。「あれは人工衛星ではないだろうか。自衛隊のジェット機ではないだろうか」

しかし時間を確認すると、そんな物が飛んでいる時間ではないんです。流星ではないだろうか。

そのうち、どうも違う。なにか三角形みたいな形が見えたし、色は今まで見たこともないような色だし――。するとフツフツと心臓のあたりから温かいものが湧いてくるんです。なにか自信のようなものがひとりでに自分の中から湧き上がってきました。

「間違いない！　私の思ったことはついに空間を超えて届いたのだ！」と感じました。

UFOの飛来とテレパシーの始まり

それからの人生というのはめくるめくようなドラマでございました。まず自分の考え方が百八十度変わって、唯物的な観念は次々と心の中で崩壊を繰り返して、だんだんとんでもない世界に入ってゆきました。

まず、一度そういうイメージを自分が体験しますと、そのイメージは自分の意識の中にはっきり残ります。いったんそのイメージが残りますと、その次にテレパシーで呼びかけるときに非常に楽になるんです。自信もありますしね。そして呼びかけた。また（UFOが）来る。呼びかけた。また来る。最初は面白がってやりました。楽しくてしようがないんです。

そのうち沢山来る。近くに来る。光がもっと派手になってくる。長細いのが来たり、ギヤーが三つあるのが来たり、そういうことになってきました。

そしてそのうちに友達がいても来るようになる。家族の前で来るようになる。だんだん私のライフスタイル自体の中にスペース・ピープルが沢山ウェートを占めてくるようになったんです。

そのうち、そのUFOのおかげで沢山の友達ができました。その人達に自分の体験しているものを理解してもらうことができて、非常に気持的にもおだやかになってきた頃です。

ある日、夜、部屋を真っ暗にして明かりを消して、さあ寝ようと思って寝ましたら、突然瞼の裏が白銀色といいますか、白くポーッと明るくなったんです。それで驚いて目をパッとあけたんです。ところが部屋の中は明かりが消してあって真っ暗です。外から車のヘッドライトがさし込んだのかなと思ったんですが、もっと強烈な明かりでした。

そしてもう一回目をつむると、また明るいんです。そしてその明るい瞼の裏にはっきりと黒抜きで、いくつかの象徴的な文字が現れました。映像的な意味でのテレパシーの受信の始まりだったんですね。

テレパシー受信の日々

それからはそういったテレパシー的な情報をさかんに記録に取るようになって、毎日毎日本当に沢山の記録を取りました。ノート十四冊ぐらいになりましたね。そしていろんな事を教えて

頂いたんです。

まず善悪の基準とは何か、本当の人間の力とは何か、宇宙の実体はどうなっているのか、宇宙人は如何にしてテレパシックな精神的な力を通信手段に使い得るまでに発達していったのか——。

すごいですよ。さまざまな絵物語でした。音声的に聞こえる場合もありましたけれど、ただそういうテレパシックな現象の中でいちばん感動的な体験をしたのは、サイレントな声なんです。これはちょっとむつかしい話になるんですが、心底から自分が感動する高波動といいますか、非常に波動の高いテレパシーというのは、言葉でもないし映像でもない、その奥からフツフツと湧き上がるイメージなのです。それによって本当に沢山の事を学びました。

そんなことを繰り返しているうちに、今度は直接スペース・ピープルに会うという出来事が起こりました。

しょっちゅう記録帳を眺め直しては、その中で教えられた心の調整法とか、先程久保田先生が言われたように能力開発法を連日連夜繰り返す日々で、「これからどんな事が起きるんだろうなあ」と内心わくわくするものがあったわけですが、まさか直接にスペース・ピープルに接触するとは、その頃の自分にとっては思いもよらないことだったのです。

最初のコンタクト

それはどういうきっかけから始まったかと申しますと、ある日、日曜日だったのです。大体日曜日の午前中はゴロゴロ横になりながらテレビを眺めるというのが日課でした。

ある日曜日、どうもそれがいけないんじゃないかという異様な衝動にかられたんです。変な衝動なんです。テレビを見ていましても、あ、これじゃいけないんだと思いました。

いけないんだと思うから立ち上がる。そうすると、ここに立っていてもいけないんだと感じました。そしてなにかドキドキするんです。妙な予感なのです。

それで、よしどこかへ行こうと思い、そうだ、古本屋さんへ行こうと思いました。家を出て、駅前に古本屋さんがあるんですが、そこへ寄ろうかなと思って駅前へ行きますと、「入っちゃいけないんだ」と思うんです。で、そのまま電車の切符を買って、電車に乗って都心（注＝この場合は県庁所在地）の方へ出て行きました。

そして駅に着きますと、「あ、これでいいんだ」と思いました。そして繁華街へどんどん出て行きました。「あ、ここだ、ここだ」と思うわけです。

しかし町の中まで歩いてきたのですが、なんだか訳がわからないんです。

そしたらそのとき前方からクリーニングしたばかりのようなパリッとした背広とワイシャツを着て赤いネクタイをしたビジネスマン風の男性が歩いて来るんです。

すると沢山の人混みの中でその人だけに妙に視線が行くんです。そして向こうもこちらをまっすぐ見つめていました。お互いに向かい合って歩いて来ていますから、いつかはぶつかるという状態なのですが、とにかく「ぶつかるから、よけなくては」と思って、私は体をそらしたんです。

そうしたら彼も歩いて来ながら私の前へ出るんです。また体をそらす。また前に出る。そのうちなにか怖いような、逃げたほうがいいんじゃないかとか、逆に引かれるような変な葛藤が起こってきました。

そのうちスーッと私の前に彼が来て、はっきりとわかったのですが、普通のわれわれのような人ではないんです。独特な目なのです。それは非常に優しいようで、その奥に荘厳なきびしさといいますか、そういうものをキープしている独特な目なのです。

それでテレパシーで呼びかけてみました。「宇宙の方ですか？」

そうしたらちゃんと口に出して「そうです」と言うんです。高くも低くもないほどほどの声でした。

「とにかくお話をしましょう」と相手が言って、彼が私の背中へ手をかけて地下街の方へ導いて行ったわけです。

誘われるままに繁華街の地下街へ入りました。ある喫茶店に入って行きました。私はいろんな質問をしました。「今まで僕が体験してきたのは本当なのでしょうか。テレパシーとはどういうものなのでしょうか」など、いろいろ質問しました。皆さんがたぶん今日これから私に浴びせかけたい質問のようなことを私がそのとき聞いたわけです。

そして聞いている際中にだんだん確信が深まっていったんです。最初はテレパシックなものに反応したというだけで、まだ疑念があったわけです。なにか恐ろしい生物ではないか、どこかのスパイじゃないだろうかとか、いろんな疑念があったんです。ところが私しか知らないような目撃体験とかテレパシックな事情を、本当にこと細かに相手は知っているんです。そして日付や時間まで知っているんです。心の中に秘めておいたようなことまで知っているんです。やあもう脱帽しました。

最後に、いろんな質問が終わったあとで、だんだん私も言葉数が少なくなりまして、なにか感動が脳天をかけ抜けるといいますか、血管が切れたような状態で、額から冷や汗がたらたらと出てくるんです。

最後に彼はこう言うんです。

「あなたが望まなければ、われわれは提供しない。あなたは望みますか。わ

れわれの持っている科学を少しでも知りたいと思いますか。そしてあなたは向上を考えることができますか」と聞くんです。「やりますか」と言うもんですから私は「やります！」と言ったんです。「じゃ、これからもたびたびお会いすることになるでしょう」

こうして本格的なコンタクトマンとしての春川の人生が始まったわけです。

すごかったですよ。とにかく担当のブラザーズが五〜六人おりまして、かわるがわる来るんです。彼らはアダムスキーが言われたことと全く同じなんですが、特定の名前を持っていないんです。名前という観念が、われわれの持っている氏名という一つの名詞の観念とちょっと違うんです。

われわれは名前という観念がないと、一人の個人を呼び出したり感じたりすることはできにくいですね。そういう意味で彼らはわれわれに一つの仮名を与えてくれるんです。最初に会った宇宙人はレミンダーという名前を私に与えてくれました。

その次に会った人はベクターという方で、グレマールという名の人もいました。それぞれが宇宙人と一つのテレパシックな波長が合うキーワード的になっているんです。

それからも面白かったんですが、今度はテレパシックな体験以上に直接自分の体で行動する体験が多くなってきました。要は（円盤に）同乗するということになったんです。

円盤の驚異的な構造

本当に素晴らしいですね、彼らの乗り物は——。スカウトシップ（円盤）といいますか、何人か乗り込める円型の宇宙機に最初に乗ったときに、いろいろ不思議な光景を見ました。私たちは普通〝空を飛ぶもの〟といいますと、飛行機とかジェット機とかを想像します。そしてそういう物体をコントロールしているセンターは、メーターとか発光ダイオードがずらっと並んでいて、レバーがあって、車を運転しているような感覚で想像するんですが、いやとんでもない、すごいもんですよ。

まずフリーエネルギーを宇宙空間から生産するような一つのフリーエネルギーモーターが底部にあります。そのフリーエネルギーモーターはちょうどスズメバチの巣のような六角形のパイプの集合体なんです。そういう短いパイプを集めたような板が七層重ねになっていまして、その形の物が光ったり薄れたり、呼吸をするように繰り返しています。

軽い震動音が聞こえていまして、そこから三本ほどのケーブルが出ていまして、UFOの中に接続されています。

面白いのはUFOの壁や床です。こうした物質がすべてフリーエネルギーの力と連動しているんです。そのすべてのコントロールは乗り組んでいる宇宙人の意識と連動しています。ここがすごいところです。

たとえば入口がハッチ式になっておりまして、それが開いて乗り込みます。ところで普通われわれがドアーといえば、ちゃんとドアーの形がわかりますが、しかし円盤のハッチがしまると、継ぎ目がなくなるんです。あれ、どこにドアーがあったかなということになるんです。それだけでもすごく不思議ですね。

想念と連動する装置

そんなことに驚いているあいだに、フリーエネルギーモーターとか、いろんな物が目に映ってきました。

コントロールセンターがすごいんです。スクリーンが何枚かありまして、そのスクリーンの前で宇宙人が静かに立っています。何をやっているのかと言いますと、自分の意識から出る波動を調整しているんです。その波動がスクリーン上である形になって波動の状態を知ることができるんです。

今地球上であるもので、バイオフィードバックという装置があります。脳の中のアルファ波というのがどれだけ出ているかということをメーターで感知したり、光や音で感知する装置がありますね。それによってアルファ波が出やすいような状態に自分を導けるという装置ですが、あれのもっと高度なものだと思って頂ければ間違いないと思います。

とにかくブラザーズが出している波動をさまざまな形で図形が現すのです。そしてそれをある一定の状態になるように調整しているんです。そうするとスイッチが入ります。そしてゆっくりと動き始めます。

これも非常に不思議なのですが、円盤に窓があって外の景色が見えるんですけれど、その窓の横に小さなスクリーンがあって、そこにはそのUFO自体が飛んでいる姿を空中から撮影している映像が映るんです。空中にカメラを放り出しているわけでもないと思うんですが、どういう手段かはわかりません。とにかくそういうスクリーンがあります。

それで彼らが言うんです。「動かしてみないか」と。それで私はスクリーンの前に立ったんです。そしてびっくりしましたね。自分の想念がいかに沢山のカルマを背負っているかということをそのときはっきりと思い知らされました。

というのはその図形は一つの継ぎ目のない縄みたいな図形なのです。それをきれいな楕円形とか球形に近づければUFOはスムーズに動くんです。

ところが私が意識を静めてやっていましても図形がクチャクチャとなるんです。するとUFOがあっちへ行った

りこっちへ行ったりします。時間にして長くやっていたと思うんですが、いっこうにうまくなりません。そのあと何度か乗った段階で少しずつうまくなりましたが、これからまた乗る機会があれば訓練したいなと思っています。

別な惑星へ行く

そして別な惑星に行きました。そのUFOから大気圏外で母船に乗り継ぎます。そして本当に数時間のうちにむこうへ着きました。

私が行ったのは水星とか金星とか、カシオペア座の方向のある惑星につれて行かれました（注＝星座のカシオペア座そのものではなく、その方向という意味）。

とにかく別惑星というのもすごいんです。これはアダムスキーの体験の中にも多々述べられているとは思いますが、まず波動がきれいであるということ、これがすごいと思います。そしてそこに暮らす人々が闘争的なものを一切持っていないということ、これがまずすごいんだと思います。

当然科学技術も進歩しているんです。皆さんが今聞きたいと思っているのはそのことではないかと思うんですが、それ以前の問題として、とにかく感情の出し方が違うんです。

たとえば母船に乗ったときのことですが、母船の中には沢山の宇宙人が右往左往しています。そして挨拶が非常に簡単なのです。われわれは道で知り合いの人に会ったときなど、「どうもこんにちは」と言って何度もペコペコ頭を下げながらすれ違うという光景がよく見られますね。それは挨拶をしているときに相手側の気持がわからないから、なにか不安になるので何度も挨拶をするという、地球人にはそういう性質がありますでしょう、私も含めて。

ところが彼らはそうじゃないんです。瞬間的に目をパッと見ただけで相手の意識や気持の状態がわかるんですね。スッと軽く目で挨拶するだけです。

言葉も慎重ですし、小鳥のさえずりを聞いているような独特な響きがあります。

万物の波動を感知する教育

むこうの惑星へ行きますと緑が豊富で、いろいろな不思議な形をした建物もあります（注＝これはカシオペア座の方向にある別な太陽系の惑星を意味する）。伝説上のバベルの塔というのがあります。渦巻状のデコレーションケーキみたいな建物ですね。ああいう建物が沢山ありましたし、ピラミッド状の建物もありました。あれは波動的な意味があるんだそうです。そういう形自体がそこで暮らす人たちの意識を守ったり波動を高めたりする作用があるのだと聞きました。

そういう建物の中で食事をしたり、学問をしたりします。学校もちゃんとあります。面白いことに時計がないんです。ところがわれわれよりも時間のとらえ方が数段正確だということです。

小さい子供のいる学校へ行きますと歌声が絶えません。歌の勉強しかしてないんじゃないかと思うぐらいです。これはある一定の音楽がうまく奏でられる、または歌えるようになると、ほかのすべての物事を理解してしまうんだそうです。

波動を感知する力を高めることによって、物理的、唯物的な知識のすべてをあとからマスターしちゃうんです。そういうものはほとんど一瞬にしてやっちゃうんですよ。

ただ先程言いました万物の波動を感知できるまでの訓練課程が長いんですね。そういう教育なのです。

闘争の想念のない世界

いやもう本当に素晴らしいんです。植物もありましたが、カシオペア方面の惑星へ行ったときには植物が非常に大きかったですね。

面白いことには、たしかユーコンにも出たと思いますが、蜂がいたんです、大きなお花の上に——。その蜂が地球上にいるスズメバチと同じような格好をしているんです。黄色と黒のまだらが入って、ブーンと音をたてて飛んでいまして、最初に非常な驚きを感じました。三十センチぐらいあるんです。

それでまず恐怖が起こるんです。私は本当は刺すもの、吸いつくもの、引っかくものは嫌いなんです。それで、ギャッと思ったんです。すごく高度な波動に感動してボーッとなっているときにブーンと現れたんです。

ところがですね、針がないんです。お尻の所がツルンとしていて、突起がないんです。ですから同じ蜂の形をしている以上、たぶん地球のものと同じような進化過程をとおって発達してきているにもかかわらず、闘争的な根拠となる形がその生命の中に見受けられないんです。

これはわれわれよりもかなり以前にすべての生物が闘争という想念を捨てたのではないかと直感的に把握することができました。

彼らはそこで驚いている私にたいして言ったんです。最初に彼らが日本に降りて来たとき、北海道に着陸したんだそうです（注＝この「彼ら」とはカシオペア座の方向にある惑星の住民）。北海道というのは非常に自然条件のよい所で、最初は彼らも非常にうっとりしたんだそうです。

ところが、ものの数分もたたないうちに、そこの生命すべての波動、つまり個々の細胞の中にある波動が非常に闘争的な想念の中に埋没していることを彼らは発見し、彼らは非常に痛まし

く思ったんだそうです。

ただ彼らのすごいところは、「地球はだめだ」といって帰ってしまわないで、「よし、われわれは見せ続けよう。われわれの想念をこの地球にもたらし続けよう」と決めたんだそうです。

青い惑星で生きる使命

私はそのときにボーッとしながら聞いておりましたが、その言葉の意味は当時あまり把握できませんでしたね。そのとき頭の中に何があったかといいますと、別の惑星で三日間寝泊まりを体験したんです。

天体現象も非常に不思議なものがあって、太陽が複数で昇るとか、不思議な光景を見ましたけれども、二日目の後半頃からでしたか、もうイヤになったんです。本当に私はカルマ的な人間なんでして、別な惑星上に滞在していてむしょうにイヤになったんです。のんびりしすぎていて、シンプルすぎるからです。

それで帰りたくて帰りたくてしようがなくなりまして、地球の街を車がブーッと通る音がむしょうに恋しくなってきて、「戻りたい！」と言ったんですね。今考えてみると、おそれ多いことを言ったと思うんですけど——。

そのとき意外な返答がありました。ニコッと笑って「そうでしょう」と言うんです。

「あなたがこれから生きてゆかなくてはいけないのは、あの青い星（地球）だよ。あの大地の上で、あなたは語り、生き、そして輝いてゆかなければならないよ」

私が最初に宇宙人に呼びかけたのは地球がイヤになったからです。いじめられて、そういう寂しさからだったのです。そういう私の根本的な所にある依存性みたいなものを、その別な惑星の上で彼らはすべて取り去ってくれました。

人間の生命と感情がすべて

実はその惑星では三日間だったのですが、地球上ではほんの短い時間だったのです。

そして地球へ帰ってきて、とにかくまず自分が変わりました。彼らと接触したことによって——。たとえばそれ以前の自分というのは、近くに泣いている人がいると一緒に泣かずにいられなかったのです。近くに不幸な人がいると一緒に自分が不幸になって、かわってやりたいなと思ったりしたこともあったんです。

ところが、そういう姿勢が本当の人間変革とか人間教育とか人間救済ではないということを彼らは教えてくれたんです。泣いている人のそばでは笑ってあげなければいけないというのが彼らの理論です。苦しい人のそばでは、より楽な姿勢をとって、楽な人間もいるんだということを見せてあげなければいけないというのが彼らの理論です。

彼らはそういう感情的なレベルの人間関係をすごく大切にします。地球上でもそうですけれども、今われわれはいろんなアクセサリーを持っていますね。権威、お金、科学など、これらは一つのアクセサリーです。アクセサリーというより道具というほうがよいかもしれません。

ただ、われわれは幸せになりたいと思って生きているはずです。そしてもっと楽しい暮らしがしたいと思っています。それらはそのために編み出してきた道具にしかすぎません。

ところが地球人はややもすると、その道具がすべてだと思いがちです。しかしすべては人間の生命と感情の上に成り立っています。今までわれわれはこの人類の歴史の中で沢山の有能な文明を実は生み出してきています。

伝説の中に埋没したアトランティス、レムリアなどは今の文明よりもさらに高度だったかもしれません。そして宇宙人と身近な所に地球人はいたのかもしれません。

なぜ滅びたのか。なぜ今、影も形もないのか。それはそれらの道具に頼ってしまい、道具がすべてだという錯覚におちいったからです。

まず自分から変化すること

これからの地球においてわれわれがなさなければならないのは次のとおりです。彼らのビジョンを見ていてこれは私自身が感じたことで、彼らが命じたことではありません。彼らは絶対に命じません。彼らは見せるだけです。

「人間が発達すると、こうなるんだ。われわれのようになるんだ。この宇宙にはわれわれのような生き方をしている者がいるんだ」ということを見せるだけです。そしてそういうものを見たわれわれはどうするかです。

今この地球上では非常に多くの問題が起きています。このところテロが非常に多いですね。闘争を繰り返す人間史。先程久保田先生が言われましたけれども——。

キリストという素晴らしい方がいました。その方の教えは今も引きつがれて、一応息づいておりますけれども、宗教というものの中では、キリスト教は最も沢山の戦争を生み出した宗教でもあります。二面性ですね。

人間は善と悪と二つのものを持っています。そしてわれわれはややもすると、その闘争的な悪魔的なものを選択しやすい。そういう性といいますか、アダムスキー的表現をすればカルマといいますか、まずそれに負けないことだと思います。われわれはまず自分から変わってゆくことではないかと思うんです。

われわれは非常に自由な国に住んで

います。世界中の国を見ても日本ほど自由な国はないんじゃないでしょうか。アメリカへ行っても犯罪が多く、戦争をやっている国が身近にありますし、いちばん物的にも恵まれているし、いちばんお金を持っているんじゃないですか、日本人は。

だからこそ最も精神的に進歩しなくてはならない責任があるんじゃないでしょうか。これだけゆとりがあるんですから——。

自分の想念波動で環境が変わる

ところがこの前ある学者先生に聞きましたら、世界中の国のなかでいちばんノイローゼの発生率が高いのが日本なのだそうです。これは宇宙的なレベルから言えば手抜きですね。

こういう自由な社会に住んでいますと、なにか自分にとって不都合な問題が起きると、「ああ、それは親のせいだ、子供のせいだ、いや先生のせいだ、いや社会だ、国だ、政府だ」と、ややもするとそうなりがちです。自分にとってマイナスな対象の原因を、自分以外の世界に求めてしまうんです。

最近もっともその象徴として出てきているのが、アダムスキーが非常に強く警告しているサイキック（心霊）の問題です。自分の中でマイナスな事が起きると、「あ、それは空中を浮いている霊のせいなんだ」と、よくそう言う人があります。とんでもないことで、すべての原因は自分が作ります。

自分がどのような波動を出すかということによって、その波動が返ってくるのが環境なのです。

今、地球の未来を不安にする要素のいくつかとして、地軸の問題だとか沢山ありますけれども、核の問題がありますね。やはり闘争的な想念が生んだ物体です。「核兵器を廃絶せよ」とよくみんなが言います。あれはないほうがいいと思いますよ、確かに。

しかしあの核兵器をなくしたからといって地球上におけるわれわれの不安が一掃されるでしょうか。いや絶対にだめです。形をなくしたところで、われわれが闘争的な想念を消してゆかない限り、またそれにかわるものが環境の中に現れてきます。想念というのはそういう力を持っているんです。波動というのはそういう力なのです。物質を管理し、物質を生産し、創造するんです。それはわれわれ自体を創造した創造主からきているものだと思います。宇宙の方々もその創造主を絶対に信じていました。ただわれわれよりももっと高いレベルで信じています。まずわれわれが、われわれの意識をコントロールする糧（かて）として、高いレベルの創造主をとらえて頂きたいと思います。

最高の創造主のイメージを持つ

マーフィーという学者がアメリカにいました。あの方が著書の中で、「人間は自分の中の神というものを、どのように設定するかによって人生を決めてしまう。神の設定とはおそろしいものだ」と言っています。われわれは精神的に自由ですから、創造主をどのようにも設定できるんです。

ただし自分にとって最高のものを設定して下さい。それが自分の最高のレベルになるんです。そしてそのレベルに向かって、それを大きな目標として、まずこれから自分の未来の身近な目標をたてて下さい。

先程話した宇宙人たちの姿があります。その姿は他人事ではないんです。われわれも必ずそうなるし、そうならなけりゃいけないんですよ。そして、そうなれるんです。

私がよくこういう話をしますと「春川さん、そう言いますけれど、どうしようもないんじゃないか」といってあきらめる人がいます。「私の身のまわりにはうるさい母親がいて、乱暴な子供がいて、隣には飲んだくれのお父さんがいて、こういう環境の中でよい想念を発するなんてむつかしいことです」とよく言うんです。

しかしそれだって偶然じゃなくて、どこかで自分がひき起こしているんです。まずわれわれの中でどれだけ明るいビジョンを持つかです。私は今宇宙人の話をしました。そのイメージをまず持って下さい。皆さんは体験している方もあると思いますし、そうでない方もあると思いますが、その中で宇宙的な部分のイメージをもっと明確に持って下さい。そして創造主のイメージをもっと高く持つことです。

そして強烈に自分の力というものを信じて下さい。まだまだ皆さんは本当の自分になりきっていません。聖書とか仏典とか昔の聖人賢者たちが残した文章、データがあります。

まず聖書のほうですが、その中には「人間は神の子である」と書いてあるんですね。つまり神の子である以上、神と同じ能力がすでに生まれたときに与えられているんです。仏典には「人間には仏性がある」とあります。それはすでにあるんです。

ところがわれわれはそれを忘れているんです。それを出さないでよいと思っています。宇宙人はそういうものを乗り超えてきたんです。実はカルマの実体というのはそれしかないんです。

よく運命はきまっていると言う人がいますね。運命というのはある道幅を持った道のようなものです。道幅は決まっているんです。たとえば生まれた以上は死なきゃいけない。死は必ずありますよね。そういう幅は決まっていますけど、ただそのなかで左側を歩くのがむしょうに好きな人と、右側を歩くのがむしょうに好きな人があるんですね。クセがあるんです。それはど

こから決まるかというと、前世でどういうふうな生き方をしてきているか、または転生した体がどういう先祖の血によって支えられているかという問題があります。

日本人には日本人に共通した性質がありますね。それは日本民族の血だと思うんです。そしてわれわれはさまざまな個性を持っています。いいものもあれば悪いものもあります。カルマはすべて悪いものだけではない。いい個性というものもあります。芸術的なセンスとか——。

まず何かに挑戦するんです。最初は何でもいいんです、好きで飛びつくわけですから。UFOの世界にしてもそうですよ。何十年の日本のUFO研究の歴史の中で、今生き残っているUFO団体が何団体ありますか。たぶん歴史の最初から残っているのはこのGAPだけじゃないですか。私がここで話すきっかけになったのは、そういうきっかけがあるからです。

先程先生が言われました「長くやり続けること」が大切なことです。そのためにはまず自分にたいする絶対的な自信を持つことです。自分の力は創造主と同じようなものなので、時間とか空間とか、ましてや物質などにはとらわれないことです。自分を制約するのは自分だけなんです。

宇宙人はその殻をいくつもクリアーして進化しました。そしてわれわれもこれからやらなければなりません。

何でも変化させることができる

巷に超能力者という人がいっぱいいますね。いろんな能力を持っています。思っただけでスプーンを曲げる。以前にユリ・ゲラーという人が日本へ来ました。彼は大勢の前でスプーンを曲げました。やあ面白いなあとみんな見ていました。私も見ていましたけれど。

あれは面白いだけで終わってもらっては困るんです。ユリ・ゲラーの示したビジョンは何かというと、思ったことがスプーンという全く肉体とは別な物に反映するというビジョンを示したんです。それをホントかウソかと論じることにみんな夢中になって、スプーンを顕微鏡で調べたりして、そっちのほうに夢中になったんですね。ユリ・ゲラーの人格がどうのこうの、能力がどうのこうのとか、そんなことは関係ないんです。彼が示したビジョンを見つめることです。

彼は何を示しましたか。肉体とは関係ない物が「曲がれ！」という想念だけで曲がるんです。私も試してみました。確かに曲がるんです。ただしあるコツがあるんです。

それは自分の心の中で、未来完了形で物事を考えるということです。すでに未来においてスプーンは曲がっているんだと信じきることによって、その瞬間に曲がるんです。これがコツです。

まず「絶対にそうなるんだ」という仮定をしておくんです。最近はよくマイナスのビジョンが出やすい事例が出ます。テロの問題や地軸はだんだん傾いているとか——。確かに切実な問題でして、あのノストラダムスみたいな歴史上の予言者が一九九九年に何とかと言っています。怖い話です。みんな脅かしているんですが、脅かしは脅かしとして受けとめるんです。そういうものが集中して沢山出てきている以上、何かの事が起こるんではないかという気はします。

しかし、それは変えられるものです。まず少しでも皆さんが(変えられると)思って頂ければ有難い。それによって変わるんです。運命の選択性を持っているんです、人間は。物質さえも変えます。時間さえも変えます。地球も変わります。われわれが変え得る範囲の宇宙は、われわれが今思っている宇宙よりもさらに広いものです。その地球人の責任において変えられる宇宙を変えてゆかないからこそ宇宙人が心配するんです。われわれはサボッているんですよ。

万人と調和する

このなかには科学を勉強されている方もあると思います。哲学をやっている方もあるんじゃないですか。芸術方面の方、コンピューター関係の方など、こうやって見ていますと、いろんな印象が移ってきます。それぞれ素晴らしい能力をお持ちですね。本当にこういう方々の集まっている場所で話をさせて頂くことを嬉しいなあと思っているんですが、そういう能力を生かすには先程言いました自信と、感情をととのえることです。楽しく挑戦して下さい。これが大切です。

よく科学者に多いんですが、科学者はお互いに競い合うことによって自分の研究を伸ばしてゆくという世界がどこかにあるんですね。お互いに嫉妬し合うことによって——。だから今の学校教育がそういう流れになっています。比較することはいいことなんですよ。ただお互いにそれを見せ合おうという感じではなくて、お互いに引きずり降ろそうという感覚なんです。これがいけないんです。

以前ある社会学者の方にうかがった話で、「もし地球上の人々がすべて人に物を与えたくてしようがない、という人間に明日から突然変わったとしたら、だれも困らない」と言われたことがあります。

確かにそうなんですね。今われわれがもし自分の心の中でそういう作業を繰り返して信念をもって、大きな目標をもって、必ずそれが実現すると信じて、身近なことをやってゆく——。

よく平和という問題がいわれます。

平和は素晴らしいものです。じゃなぜ戦争が存在するのか。それは今の地球には戦争が必要だからです。必要だからあるんです。だから必要としないようにすればいいんです。

われわれが戦争を欲しているんです。なぜでしょう？　われわれは闘争することがどこかで好きだからです。その「好きだ」というのをなくすんです。

私はさまざまの体験を経て、今ある事とたたかっています。それはタバコが嫌いになることです。私はまだタバコが好きなんですよ。今それとたたかっているところです。

世の中には闘争の好きな人がいっぱいいます。その闘争の一つの糧として何かを信じるわけです。その信念に合わない人間をどんどん排除してゆきます。そして自分のプライドを守るんです。こういう姿勢を絶対に持たないようにして下さい。

どんなに主張の違う人がいても、それに合わせてあげることです。「ああ、そうですか。頑張って下さいね」と笑ってあげることです。自分が与えられる範囲のものを与えてあげることです。それをやっただけで人間関係がだいぶ違ってきます。そういうこまごまとした身近な事から始めることによって、まずは自分の内部から始めることによって、人類というのはさらに高度の、スペース・ピープルが今保ち続けているような新しいビジョンの中に参入して行くのではないかと思っています。

人間の本当の能力はすごい

今日は本当にいろいろな想念を持った方がいますね。私はこのGAPの総会でしゃべってくれというお誘いを受けたときに、すごく迷ったんです。まずこれだけの人前でしゃべった経験が全くないんですね。大体人前に出て宇宙人のこととか超能力の話をさせて頂くと、最初にどういう現象が起こるかといいますと、まず皆さんは頭の中でいろんな事を考えられます。共通傾向として、最初に表面的な容姿を見ます。

先程、久保田先生はいい話をされたと思うんですが、感覚にとらわれてしまう部分が人間にあります。まず表面で見えるもの、聞こえるもの、味わうもの、そういうものがすべてだと思っているんです。そういうものからくるカルマの中に隠されている自分があります。それを取り除いただけでも自分の可能性が非常に強く感じられますよ。本当の自分みたいなものが——。

その奥にあるものを感じる。そういう訓練をします。私はスペース・ピープルからの指導によってそういう訓練を始めたときに、最初に起きた現象はオーラが見えるという現象でした。オーラというのは視覚的に見えるんじゃないんです。視覚に映っている色のさらに深い所に淡い色が見えるんです。これがある人は黄色っぽかったり、ある人はオレンジ色だったりします。

最初に彼らと接触を始めてから、同質結集、または朱にまじわれば赤くなるで、私のどこかに宇宙人と等しい部分があったか、または私が前世において宇宙人と接触した部分があって接触のきっかけが起きたんだと思います。ただ接触を繰り返すことによってだんだん宇宙人のレベルに近づこうということが起きています。宇宙人の波動に感応するというんですか、だんだん体質も変わってきました。それによって次第に不思議な能力が出てきます。

人間の本当の能力はすごいですよ。それ以前は私はしがない自分だと思っていました。死のうと思ったことも何度もあります。しかしその本当の能力に気づいた瞬間に、絶対死んだら面白くない、勿体ないと思うようになりました。

まず人の気持がわかります。ただしテレパシックな能力、これが最初に出始めますと、人の悪い部分から気がつくという性質があるんです。よく巷にいる超能力者がよくマスコミなんかに出てきますが、そういう人は何をやるかといいますと、最初に人の悪い所を言いますね。「お前さんは三年前に交通事故をやっただろう。昨日奥さんとケンカしただろう」と言います。

こういうふうに悪い部分を見るのはテレパシストにとって非常に楽なのです。ただ悪い部分が見えている中で、さらにその奥にある非常に輝ける、非常に高度な、その人にしかない個性を引っぱり出してあげる。そこまでのテレパシーが使えるようになったら万物の波動がわかります。

本当の自分になるには

このなかにも非常にテレパシックな能力の強い方がありますね。上の方にも下の方にも——。その方々は他人の悪い面が見えたり雑多なものが見えたりするレベルにある方が多いような気がします。何人かはそれを超えていますけどね。

それをまず超えることなんです。そうすると一体感というのが生まれてくるんです。たとえば私が感じたのは、裏山に登ったときに大きなクスの木があるんです。それに手を触れてフッと目を閉じたら、その木との一体感というか、無上の幸福感が体の中に湧いてきました。その木の生命の波動ですね。とにかく体中がガタガタ震えるようなすごい感動なのです。そして丸一日その木にくっついたまま動けませんでした。たった一本の木からそれだけの感動が得られるのです。

そういう力がみんなの中に眠っているんです。そういう力がうまくコントロールできるようになりますと、今度

は念力的なものが非常に強くなります。人間を見る能力が伸びて、そのあとに今度は人に自分が影響を与える能力が出てきます。そうすると今度は人間の欲求が出てくるんです。支配したいとか、無理やりこうしたいとか――。ところが波動の世界というのはそういう世界ではないんです。自然になる、ならせて頂く、あ、なってしまったという世界ですね。本当にそういう力が出始めますと、自然に自分が自分の理想と思う環境に運ばれてゆきます。そして自分の感情、自分の性格というものが円満になってゆきます。本当の自分になるということはそういうことなんです。

だれの中にもその能力はあります。今見る限り、その能力を持たない人はこのなかにいません。あと一歩です。

自分自身との闘い

私は予言的な事は言いたくありませんが、たぶんあと数年内に多くの人たちが自分の中にある能力に気づいてゆくでしょう。たぶん三年もすれば世の中で超能力というものが常識化するでしょう。今、大きな所ではすでにそういうものの流れが始まっています。

このスペース・ブラザーズの問題も、軍事的、政治的レベルではすでに知っている人が沢山いるという話があります。それは確かに事実です。

私はコンタクトが始まったことによって政府関係の人に沢山会うことができました。それは彼らが（宇宙人問題を）知っているから会えるようになったんです。

そして今話題になっているフリーメーソンの人にも会いました。（宇宙人問題を）知っている人たちはいっぱいいるんです。そして彼らはいまの社会の上層部、たとえば大企業の地方にいる方々と密接に連絡をとりあっています。

ただそういう流れの人たちすべてにたいして、われわれはブラックな目で見やすいんです。なかにはそれをプラスな方向にむけようとしている人が沢山います。いまブラックな私利私欲の方向に持ってゆこうとする人たちと、プラスに持ってゆこうとする人たちとの闘いが暗黙のうちに目に見えない上の方で始まっています。その結果、それが白にころぶか黒にころぶかを決定するのはわれわれ大衆なのです。あたりまえの生活をしているわれわれなのです。われわれがわれわれの中においてどのように闘ってゆくかです。

人間に許された唯一の闘いは他との闘いではありません。自分との闘いです。自分の中にある、自分を限定しようとする力と、自分を無限に伸ばしてゆこうとする力との闘いなのです。

人間が成長しきった果ては、みなさんがどこかで感じておられる創造主の姿です。われわれは必ずそのようになってゆきます。この宇宙のどこかの部分を創造するものになります。まだまだ全体を創造するものにはなり得ないでしょうが、どこかで何かを創造できる自分になった姿は素晴らしいと思いませんか。

これから講演が終わってからみなさんはお宅にお帰りになると思います。今日はだいぶ遠方から来ておられる方も多いと聞いています。大変でしたね。

ただ今日私が言ったことがみなさまの利になっているかどうか、みなさまのためになっているかどうかは、みなさま方がまた長い通のりを経てお宅へ帰り着いたとき、そのときに始まります。そのときの自分が今日ここであの春川という人間の話を聞くことによってどうなったかということによって変わってゆくんですね。たぶん家に帰ったときに気づくものがあると思います。

帰ったらまず目標を持って下さい。皆さんはどういう自分になりたいですか。本当の自分を描くのに道徳感は不要です。めいっぱい、思いきり、やりたいように描いて下さい。こういう生活をしたい、こういう家族がいて、こういう家に住んで、こういう車に乗って、そしてその家の上空には常にUFOが行き来している、自分は毎日宇宙人に会っている、彼らに祝福されている、幸せだ、本当に幸せだ――。

そういうイメージをこまかく自分の人生設計書で作って下さい。そしてそれを十年後二十年後の夢としてまず大きく掲げます。そういうイメージを部屋のどこかに貼っておいて下さい。

ただB29を竹槍で落とすことはできません。ですから身近な目標を作ります。「明日何をしようか」まずそれから考えます。一カ月先には自分はこういう人間になっていようと、どこか変えるものを作ります。今の状態が悪いことはわかっていますね。みなさんどこかに不安があるでしょう。全く不安がなくてやっている人は少ないと思います。

どこかで変えたい部分があるとしたら変えましょう。変えようと思わなければいけません。大工さんが家を建てるのにカンナとかノコギリを使いますが、それだけでは家は建ちません。家を建てたい人が、家を建てたいと思ったから建つんです。そのために大工さんとかカンナとかノコギリがあるんです。

有難いことに日本には沢山の素晴らしい大工さんとカンナとノコギリがあります。物に恵まれていますね。そして私たちはいろいろな学習のできる権利を持っています。ベトナムの人々やいま最も戦乱の中にいる人々は、われわれと同じようなチャンスを与えられているでしょうか。決してそうではありません。だからこそ彼らを見てわれわれは泣くのではなくて、われわれは

それ以上の世界を、今与えられている物をフルに活用しなければいけません。

甘えてはいけません。われわれはさらに変えられる物を持っています。可能性を持っています。人間を不安にする材料は心理学的にいうと八つあるといわれています。ところがそのうち四つは災転じて福となる手のやつなんです。つまり結果が出てみなければどうにもわからないというやつなんです。

どうしても不安に思わなければならないことが四つ。この四つのために人生を台なしにするのはやめましょう。われわれは大体その四つに振り回されています。「自分は本当にこれでいいんだろうか」と思いますが、「いいんだろうか」と不安に思うんだったら「いいんだ」と思って下さい。そして「今以上にもっと良くなりたいんだ」と思うことです。

よく人生は失敗の連続だと言う人がいますね。しかし今までが失敗の連続だったからといって、これからが失敗の連続とは限りません。「そういう失敗を連続させる人間というカルマを超えるために、われわれは成功するんだ」と思うことです。

私たちの想念が、いや私たちというよりも「私の想念がこの地球を変えてゆくんだ」というようにイメージして下さい。そしてまず身近な家族とかお友達とか、そういう人たちとのつきあい方から変えていって下さい。若い方は自分のお父さんやお母さんにときどきおかしな想念を出していませんか。

そういうことをしていながら、ときどきアダムスキーさんの話を聞いたりしますと、平和が大切なんだなと思っていませんか。そして年齢の多い方、今地球を背負っておられるリーダー的な立場におられる方は家の中がしっかりしていますか。自分の会社はしっかりしていますか。自分の町はしっかりしていますか。そしてそれらを支配している、それらに影響を与えている自分の心はどうなっていますか。

それこそがこれからの地球を変えてゆくカギです。

だいぶ興奮してだいそれたことをしゃべっていることは感じています。ただ、たぶんこれだけの人に囲まれてしゃべることは私はもう二度とないと思うんです。ですからとにかく言いたいことを言ってきました。あとはみなさま方が、今言った言葉の奥にある波動の中から、自分がやりたいこと、自分が何物かということを感じて頂ければ、私は本当にここに来てよかったと思うんです。

言葉というのはむつかしいですね。なかなかうまく話せません。ただ一パーセントでも伝わってくれればという変な妥協もあります。

アダムスキーのビジョンを大切に

この中でUFOを見たという方は何人ぐらいいらっしゃいますか。ああ、多いですね。素晴らしいですね。

まずそのビジョンを大切にして下さい。あれを見たときの感動——最初の気持が大切です。UFOを最初に見たときの心境が宇宙人の波動と等しいんです。そのときの気持を忘れないで下さい。何度も見ているうちに人間には〝慣れる〟という素晴らしい超能力があります。すると感動がだんだん薄れるんです。すると次のインパクトを求めるようになりますが、そうなってからも最初のイメージを頭の中に強く焼きつけて下さい。絵に描いて残しておくとよいですよ。そしてそれを長く保ち続けるんです。そのための自信であり、そのためのビジョンであり、そのための目標なのです。とにかくやり続けて下さい。自分になろうと思い続けて下さい。続けるということが最も重要な作業です。

宇宙人はある意味ではそれによって人間を評価してくれます。「この人は続けられるだけの力があるかどうか」ということです。はっきり言って私がこのGAP総会でしゃべる気になりましたのは、久保田先生が今までにこのGAP活動をやってこられて、さまざまのドラマがあったと思いますが三十年以上も人間が一つの事をやり続けるというのは大変な作業でして、私はその波動が先生とお会いしたときにピッとわかったから、ここで語ろうと思いました。

やり続けて下さい。皆さんは幸運なことにアダムスキーを知っています。アダムスキーはまだまだチャチな私なんかよりももっとすごいビジョンを文章で沢山の本に書きました。素晴らしいです。すごいきっかけです。皆さんはそれをご存知でしょう。あの中でアダムスキーが見せたビジョンをよーく読んで下さい。繰り返し繰り返し読んで下さい。そしてあの姿は、われわれもこれからわれわれの力で勝ち取ってゆかねばならない姿である、地球の未来像なのだということをよく考えて下さい。ただ全く一緒ではなく、われわれも個性を持たなくてはいけません。われわれは地球の味で発展してゆかなければなりません。いいですか。まずは精神とその力を自分が知ってゆくことです。

とりとめのない話になりました。本当に今日はご静聴有難うございました。納得ゆく話ができなかったかもしれませんが、感じて頂けたら有難いと思います。どうも有難うございました。

（盛大な拍手）

〈このあと質疑応答が行われた。この内容もいずれ本誌に掲載の予定〉

投稿欄 ユーコン広場

意識体の飛行体験

東京　柳　雄一

この七月にGAP会員になった。理由はアダムスキー氏の本（久保田先生訳）を十数年ぶりに読み直すことで自身の一命が救われたことにある。そのお礼といっては何だが、さまざまな体験の一部を読者に伝えたいと思いペンを取った。

確かな記憶は小学一年（昭和三十年）の頃からだ。その夜も〝ある力〟を感じつつ床に入り、目を閉じると、高速エレベーターで上昇するごとくに自分が空中高く浮く感じを体験するので、目をあけると自分は逆に下向きの姿勢で地上約一千メートルの空中に浮いているのである。住んでいる町全体と個々の家、自分の家などが確認できる。このとき重力から完全に解放されるだけでなく、目や耳などの感覚は超高度に発達し、遠方の物体は目前に拡大して見ることができ、数キロ先の物音も耳元で正確に確認できる。暗くとも望む明るさで立体カラーで見ることができる。この状態にあると肉体の各機能は全く不自由かつ不完全なものだと思い知るのである。意識体においては肉体のように見間違ったり聞こえないといった不完全さはないからだ。

こうして自在な意識体（少なくとも肉体五体と同じ形態を保っているという自覚的状態）はしばらく地上の飛行を楽しむのであるが、やがて〝ある力〟を再び感じると共に、自分の意志力は制御不能となって、はるか上空に強く引き揚げられる。

気の遠くなるスピードでアッという間に大気圏を脱し、暗黒の宇宙空間へ突入するのだった。そこから眺める地上はすでに球状でボール大の青い地球である。その周辺はボヤッと明るい。たぶん大気層なのだろう。自分のいる暗黒の場は〝宇宙空間〟という感じを受ける。僕は呼吸をしていない。海底深く入ったこともあるが、やはり呼吸は意識体には必要ないことを知る。こうして広大な宇宙に静止して地球を眺めていると再び〝力〟を感じるのだが、これ以上深く宇宙へ向かうことを僕は拒絶してきた。無知な小学生にとって暗黒の宇宙はただ恐怖の空間でしかなく、生存への執着心は明るい地上へ戻ることを切望するのだった。そう望むと〝力〟から解放され、地上一～二千メートルの位置に戻れるのだった。飛行の速度は地上のいかなるジェット機も追従できないだろう。みずからの想念のままに飛ぶことが可能である。あまりに速く飛んで気を失うこともあるが、ケガはしないし、死ぬこともない。

後年アポロ11号が地球は青かったというコメントと共にその写真を人類に報じたが、これによって自身の体験に確信を得たのであった。僕は今もってあの〝力〟は何であったのか、何故に何十回となく宇宙に誘われたのかを知るに至っていない。自分に内在する〝力〟というものを社会に役立たせるには、エゴと感情を制御して、いっそう完全さに近づく必要がある。でないと気違いに刃物を与えるに等しく、自分も他人も傷つく結果となるだろう。

昨年からみずからの力を解放へ至らせる目的でエゴを制御する作業に着手したのであるが、結果は逆であった。エゴによって理性が抑圧され、みずからの存在否定、即ち破滅へと向かってしまった。現在その後遺症に苦しんでいる毎日である。しかしいつの日か恐怖という暗黒世界を通過して、宇宙へ意識を拡大したいと切に思うのである。

現在は大気圏から脱出する力を失っている。ひどい時は地上数百メートルしか飛べないし、マッハ五の速度も出ない。意識が重い時はだめなのだ。即ち悩みや恐怖心、物質的な執着にとらわれていると意識は重くなる。力を望むなら、得ることを学ぶのではなく、全てのエゴを失う方法が重要なのだ。決して僕のようにならないためにも。

竹富島のUFO

東京　竹津　誠

先日七月の東京月例会に出席させて頂いた時には有難うございました。初めてのGAPの月例会でしたが、自分がUFO体験をしてから、さまざまな迷路を歩んできたのだと最近思っています。まだまだGAPの月例会の波長に合わせられない荒い波動が自分の中にあるのが実感として残っています。

今回久保田先生に語りかけたいと思っている事が二～三ありますが、多忙の折に目を通して頂ければ幸いと思っております。

最初の話は十二年ほど前になりますが、小笠原諸島でのUFOとの出会いです。そのときのUFOは葉巻型の物体でした。当時自分自身はヒッピーの終わり頃の時代の知人達とパーティーの最中に、小用のために海岸に向かって放尿をしている時に、なにげなく夜空の星を見上げると、黒い大きな物体が無音のままに西から東へ頭上を通り抜けようとしている状態でした。その時、自分でも不思議なのですがUFOの名すら知らなかった自分が大きな声で「おーい、何だあれは？　UFOではないか！」と叫んでいたのです。残念なことに目撃したのは自分一人でした。その二年ほど後だと思うのですが、沖縄の与那国島での時に、西の空の彼方に夕方オレンジの光体を発見。その光体は最初は静止していたのですが、スーッと降下したあと、すぐに右上方に急上昇して消えて行きました。

この頃までには深くかかわりあう気持はなかったのですが、しばらく京都の方に戻り、日常の生活の中に戻っていましたが、さまざまな事情で無意識のうちに沖縄に気持が動いてゆくうちに、京都の日常の中に次のUFOとの出会いの筋道をつけられていたように思います。京都の頃に見た映画の中で『未知との遭遇』が自分の中に何かを植え込んだようでした。何度も映画を見、そして自分が見た物はまぎれもないUFOなのだということがわかりました。それを知る前に無意識に本屋で手に入れた本が『UFO同乗記』だったのです。アダムスキーとの出会いと、今まで日常の中に気楽に浮かれていた精神の部分に変化が起きたのはその時からだと思います。

何やかやするうちにまた沖縄へ行くようになり、昭和五十五年に竹富島で家を借り、生活していた時のことです。ご承知のように竹富島というよりは沖縄全体が信仰の厚い島で、特に竹富島はその中心の島にあたります。なぜか一年間ほど縁がありまして、ユタのおばあ達の神事のための運転手をするようになりましたが、毎日が楽しい生活でした。五十五年の七月頃から自分自身の意識が異常に高まってゆくのがよくわかるようになり、何か超自然的なものに動かされているようでした。すると次第に日常の生活や友人関係がチグハグになり、友人達は自分の目付きや行動が異常に見えたのではないでしょうか。

自分の気分が異常に向上し、満月と歩調を合わせるように何かが来るという確信が強くなり、毎晩夜中中動き回っているような状態でした。そして満月の夜、東の浜辺、竹富島の東の浜、星砂の浜に夜の九時頃UFOが来るという確信に変わったのです。友人に話したのですが、その時にはもうだれも自分の事を気味悪がって離れてしまいました。仕方なく自分一人で東の浜に行き、待っていたのでしたが、ちょうど九時頃、満月が中空にある時に、空に突然オレンジの光が四つか五つと思うのですが、現れたのです。その大きさは月より少し小さいくらいだったと思います。

その時の自分自身の体全身からあ

ふれる感激は今でも忘れられません。涙がとめどもなくあふれ出て何と表現してよいかわからない状態でした。だれも自分の事を信じてくれず、信じていた友人すら気味悪がって離れてしまった状態で、自分しか信じられず、ちょうど狼が来たと叫んで信じてもらえなかった羊飼いの少年のような状態だったのですから。思わず持っていたオイルライターで合図を送ると、先方もオレンジの光をリズムを奏でるように返してくれます。何度も何度もお互いに合図し合い、少しずつ島を回り始めました。竹富島は周囲が九キロメートルと小さな島なのですが、浜辺伝いにUFOが移動するように自分も移動して行き、コンドイ岬という所に来たので自分はだれかに知らせなくてはと思い、部落に戻り、知人に話したのですが、やはり無駄でした。しかし島でピアノを教えている二十一歳ぐらいと思うのですが、その女の子が信じてくれてカメラを持って小学生四人ほどと一緒に浜に向かってくれました。

その時私はUFOがいなくなってはと心配し、先に一人で浜に向かったのですが、その途中、今にして思えば小型円盤だと思いますが、小さな発光体（球体）が常に自分の進む道の前方に飛んで案内してくれているような状態でした。

浜に戻り、女の子達が自転車でやって来た時には夜空に稲妻が走っていましたが、その中で線香花火のような動きをしたり、光が発光したりして、女の子達にも目撃させてくれたようでしたが、残念なことにシャッターを押したけれど写っていなかったようでした。少しずつ移動して行くのが感じられたので、みんなと別れて、また一人で浜辺を回り始めましたが、UFOに会えるのではないかと思う気持でいましたが、残念ながら二時間ほどかかって島を一周したけれど、とうとう会えませんでした（以下略）。

必要なものは与えられる

東京　大野美智子

私、事情により東京月例会のある土曜日も休みがとれませんので欠席しておりましたが、職場の人手もふえ、仕事も早くなりましたので、しばらくぶりでここ二回ばかり月例会に出席させて頂きました。それでぴっくりしたことがあります。全く必要なものは与えられるという感じです（それほど私が良い生き方をしているとは思えませんが――）。それは私のかねてからの疑問であり念願であった「オーラの見方」を月例会で取り上げているではありませんか。全くよくこの時期に出席できたものと神に感謝したい気持です。

それから先生がお話の節々におっしゃったお言葉は私の悩みの回答でもありました。「与えられた環境を和合してうまく生きることはカルマ解消に役立つ」というお言葉もなるほどと感心致しました。ここのところお金もうけのためのみに暮らしておりましたので、GAP月例会に出席できましたことは、どんな清涼飲料を飲んだよりも気分が爽快になりました。

UFO写真展の貴重な体験

千葉県　岡部智成

残暑の候、いかがお過ごしでしょうか。旅の疲れをいやされている頃と存じ上げます。先日は千葉ステーションビル内で東京本部主催の写真展のお手伝いをさせて頂いて誠に有難うございました。お蔭さまで大変勉強になりました。ポスターの掲示から会場のあとかたづけまでやらせて頂きましたが、ずいぶんいろんなことを学びました。

まずポスターでは公民館や青年会館などのおおやけの場所ではまだかなりの偏見があるということ。一方、有料の掲示板は場所や地域によって料金に相当の開きがあること。次に実際の会場では実に雑多な人々が来ているということでした。たとえば入場して一目見るなり笑い出す人もいるかと思うと、開場時刻前からドアーの前で待っていて、午前中いっぱいねばってビデオもUコンも全部見てゆく人もあります。始めは関心がなくても次第に引き込まれてゆく人、等々。また関心のあるなしは年齢、性別、知識に関係ないということも知りました。お年寄りでも子供でも解る人は解り、解らない人は解らないようです。

UFO問題に対する関心のこうした違いは以前から先生や会員の皆様を通じて聞いてはいましたが、この写真展によってますますはっきりと知ることができました。下手くそながら展示写真の説明も調子に乗ってやらせて頂きました。アダムスキー問題に関する自分の関心（知識）がそれまでにいかにいい加減であったかを思い知らされました。自分の枠の中だけで「理解する」のと、それを他人に「説明する」のとでは全く次元が違うこともわかりました。

私が一番大変だと思った仕事はチラシ配りでした。エスカレーターの前で昇ってくる人に一人一人渡したのですが、会場に自分の意志で来られた方と違って、不特定の人に写真展のことを知らせるのは、始めは声を出すだけでも大変でした。またチラシはただむやみに配ればよいというものではなく、関心のありそうな人に渡さなくてはならないということも後に知りました。それは会場やその付近などのあちこちにチラシが捨てられていたからです。トイレの便器に無残に投げ捨てられているのを見たときは身を切られるような思いがしました。「その人に関心がないのだし、これもその人のカルマだ」といってしまえばそれきりですが、この次にやるときは人を見て配りたいと思います。「人は馬を池のほとりに連れてゆくことはできるが、馬に水を飲ませることはできない」という言葉を思い出しました。私たちは「知らせる運動」をやっているのであり、「押しつける運動」をやっているのではないことを悟りました。なお、これからも何かとお世話になると思います。どうかよろしくお願い致します。

素晴らしい東京月例会

千葉県　山口　緑

今月八月二日は東京月例会に参加させて頂き、大きな高揚感を得て帰ってきました。それで久しぶりながら先生に手紙を書きたくなりました。

今年になって特に東京月例会が実に素晴らしいのに感激しております。やはり久保田先生の力だと思います。私が東京で先生のお手伝いをさせて頂いている時も、非常に多くの教えを頂きましたが、あの頃はGAPもゴタゴタしていましたし、私自身も重い荷物を背負っているような気がして、十分に謙虚じゃなかったと今思うとそう感じられます。それが現在は久保田先生を中心に役員の方々や各支部の団結、そして高度なアイデアでGAP活動が輝いて見えます。本当に素晴らしいことだと思います。

私の心の中にも最近はスッキリとしたものができてきて、まるで自分が高校二年の頃、アダムスキー氏の書物に触れ、同時の親友であったI君とUFO問題に没入した頃と同じような新鮮な感覚が内部に起こっているのをすごく感じるものです。

そんなわけで現在は大いに吸収しようという意欲がドクドクと湧いてまいります。今日の月例会も始終物凄い内容と雰囲気で、今も興奮がさめないほどです。特に久保田先生の一言一言が今日は何にも勝る励みというか薬として私の体に入ってきました。実に幸福感を味わいました。

そして先生が何百回とおっしゃっている自己訓練の重要性、意識との一体化、オーラ透視能力の開発、それらの力を真剣に開発する重要性をイヤというほど感じさせられます。そしてもう一点は、何か自分のできる範囲でスペース・プログラムに参加協力しなければならないと、しみじみ感じます。ともかくこうして今もなおGAPに寄せて頂き勉強させて頂けることを何よりの幸福と思っています。先生も是非頑張って下さい。今後も妻子共々よろしくお願いします。また家族で参加させて頂きたいと思います。

〈予告〉61年度地方支部大会〈その4〉

	61年度　大阪支部大会	第4回　福岡支部大会	第7回　仙台・山形合同支部大会	第6回　札幌・旭川合同支部大会
日時	10月19日(日) 午後1:00→5:00	10月26日(日) 午後1:00→5:00	11月2日(日、連休初日) 午後1:00→5:00	11月23日(日、連休初日) 午後1:00→5:00
会場と交通	「京都祇園(ぎおん)ホテル」 大会議室 ☎075-551-2111 京都市東山区祇園町南側555 国鉄京都駅から車10分、阪急河原町(かわらまち)駅から徒歩7分、京阪四条駅から徒歩4分。四条通八坂神社西へ50mの所。	「チサンホテル博多」 2F　ふじの間 ☎092-411-3211(代) 福岡市博多区博多駅前2-8-11 国鉄博多駅の博多口より徒歩5分。	「仙台第2ワシントンホテル」 2F　オリーブの間 ☎022-222-2111 仙台市大町2-2-10 国鉄仙台駅から青葉通りをまっすぐ進み、徒歩15分、車で5分。	「札幌市教育文化会館」 3F　特別会議室 ☎011-271-5821 札幌市中央区北1条西13丁目 国鉄札幌駅より地下鉄南北線に乗り、大通り駅下車。地下鉄東西線に乗り換え(琴似方面行き)、西11丁目駅下車。札幌テレビ塔を背にして徒歩約4分。札幌駅よりタクシーにて約10分、¥600程度。
会費	¥2000（希望者のみ全員記念写真代¥800を別納。グランドキャビネ判。送料共）	左に同じ。	左に同じ。	左に同じ。
プログラム	司会　斎藤康美 1:00　支部代表挨拶　平塚和義 1:10　講演「宇宙哲学とアダムスキー問題の重要性」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:30　全員記念撮影・休憩 3:00　全員自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※うちとけたなごやかな雰囲気のもとで意義の深い大会にします。先生も京都には深い関心をよせられ張り切っておられますので多数ご参加下さい。	司会　吉岡裕人 1:00　支部代表挨拶　喜多正宣 1:10　講演「宇宙哲学とスペース・プログラム」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:30　休憩・全員記念撮影 3:00　自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※今回は先生を囲んで徹底的に話し合いの会にします。福岡支部の男性的かつ情緒豊かな雰囲気のもと、楽しい1日をおすごし下さい。	司会　清水敏恵 1:00　支部代表挨拶　笠原弘可 清水　正 1:20　講演「宇宙をあまかける者」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:50　休憩・記念撮影 3:10　全員自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※今度の合同支部大会は杜(もり)の都仙台の落ち着いた雰囲気の中で、きめこまかい運営下にご満足のゆく大会にします。多数ご参加を。	司会　未定 1:00　支部代表挨拶　高野省志 阿部　堯 1:10　講演「宇宙哲学と知らせる運動」日本GAP会長・久保田八郎先生 2:30　休憩・全員記念撮影 3:00　自己紹介・質疑応答 5:00　閉会 ※初冬の札幌ながら温かい会場でゆったりした雰囲気の中、先生を囲んで話し合いに徹底して、今年度最後の支部大会として有終の美を飾ります。万障お繰り合せの上、多数ご出席下さい。
夕食会	大会終了後6:00より8:00まで同ホテル宴会場にて立食形式の夕食会を開催します。 会費¥5000	大会終了後6:00より8:00まで同じホテルの別室で希望者による夕食会(立食パーティー)を開催。 会費¥5000	大会終了後6:00より8:00まで同じホテルの大会会場で夕食会を開催(立食形式)。 会費5000	大会終了後6:00より8:00まで大会会場の斜め向かいにある「北場道厚生年金会館」内の宴会場にて希望者による夕食会を開催（立食形式)。 会費¥5000
宿舎	「京都祇園ホテル」をお世話します(大会と同じ場所)。 シングル　¥5500(税サ込) ツイン　¥10600(〃)	「チサンホテル博多」をお世話します(大会と同じ場所)。 シングル　¥5500（税サ込) ツイン　¥9900（〃）	「第1ワシントンホテル」を斡旋します(30名分予約済。大会会場の第2ワシントンホテルに隣接した建物)。 シングル　¥4950（税サ込) ツイン　¥9900（〃）	「北海道厚生年金会館」をお世話します。札幌市中央区北1条西12丁目。☎011-231-9551。 シングル　¥4620（税サ込) ツイン　¥8580（〃） (全室バス、トイレ、カラーテレビ付)
申込	夕食会、宿舎、観光の申込はハガキで10月10日までに下記へ。 〒661　兵庫県尼崎市水堂町3丁目16-8 平塚和義 ☎06-436-3478	夕食会、宿泊、観光の申込はハガキで10月24日までに下記へ。 〒814　福岡市城南区金山団地40－204 喜多正宣 ☎092-863-5438	夕食会、宿泊、観光の申込はハガキで10月30日までに下記へ。 〒983　仙台市五輪1丁目16-14-306 笠原弘可 ☎022-295-0725	夕食会、宿泊、観光の申込はハガキで11月16日までに下記へ。 〒062　札幌市豊平区美園3条1丁目2-23 高野省志 ☎011-822-8260
観光	大会の翌日は国際的大観光都市の秋を満喫して頂けます。二条城、竜安寺の石庭、詩仙堂、銀閣寺、清水寺、その他を大型観光バスで観光の予定。朝9:30ホテル出発、午後5:00国鉄京都駅で解散。（金閣寺は金箔張替工事のため省略。銀閣寺が拝観停止の場合は平安神宮を参観) 費用¥3500（昼食代込）	大会翌日は市内観光。ホテルを朝10:00発。油山市民の森を散策、福岡市街と玄海灘を展望後昼食。古い博多の町並を再現した伊都の里で博多織と手すき和紙の実演、江戸時代から明治大正期の生活用品博物館たる思い出展示館等を見学。午後4:00博多駅で解散。 費用¥2500程度（昼食代込）	大会翌日は仙台市内観光。10：00第1ワシントンホテルを出発。伊達政宗公をまつる瑞鳳殿、青葉城跡、仙台市博物館、東北大付属植物園等を巡遊。中型(30名乗り)観光バスをチャーター。 費用¥2000（昼食代、各入場料込）	大会翌日は希望者で札幌市白石区新札幌にある札幌市青少年科学館と水族館を見学。天気が良ければ野幌にある北海道開拓の村も見学。朝9:30ホテル出発。午後3:00国鉄新札幌駅で解散。 費用¥2000（昼食代別）
備考	10月の月例会は大会のため中止。	10月19日の月例会は平常通り開催します。	11月の月例会は開催します。	11月の月例会は、札幌支部は平常通り開催、旭川支部は中止。

ジョージ・アダムスキー全集

久保田八郎訳　全7巻　B6判・本文上質紙・厚手表紙箱入豪華本

偉大な進化をとげた惑星の人々とコンタクトしたアダムスキーの驚くべき体験と、深遠な宇宙的思想を伝えたこの全集は、人類に宇宙的覚醒と真の生き方を示す最高の指針。UFOと宇宙哲学の研究者必携の名著です。

1 宇宙からの訪問者

三三八頁　二五〇〇円

ジョージ・アダムスキーのあまりにも有名な体験記。一九五二年十一月二十日に米カリフォルニア州の砂漠で金星人と会見した体験、「空飛ぶ円盤に乗り、陸した」を本書の第Ⅰ部とし、円盤や母船に乗り、多数の異星人と会見した実録を第Ⅱ部とした驚異的な書物。本全集の中心をなす最重要なもの。

2 UFO問題の真相

二六二頁　二五〇〇円

第1巻の補遺的なUFOと異星人問題の真相を詳述。特に円盤の推進理論や、聖書とUFOとの関係を述べた箇所は重要である。第Ⅱ部はアダムスキーの世界講演旅行記。各国のGAPグループの活動と反応や、サイレンス・グループの妨害が克明に描写されている。

3 UFOとアダムスキー

三五〇頁　二五〇〇円

アダムスキーが実際に体験した母船による宇宙旅行を詳細に述べた「金星旅行記」と「土星旅行記」から成る本書第Ⅰ部「死と空間を超えて」が圧巻。またアダムスキーが存命中に日本GAP会長・久保田八郎に送り続けたぼう大な情報と書簡類を収録して第Ⅱ部とした。

4 宇宙哲学

一四八頁　一三〇〇円

人間のセンス・マインド（肉体の心）と宇宙の意識との一体化を中心思想として、人間を進化させる方法を明快に理路整然と説く。この哲学は、人間の意識と物質との関係の解明と応用とをめざす21世紀の科学の最先端をゆくもので、アダムスキーの哲学関係三著作の中心となるもの。

5 テレパシー開発法

一九〇頁　一八〇〇円

人間に内在する宇宙的な能力のうち、テレパシー能力の開発法を説明したもの。特に目・耳・鼻・口の四官をコントロールして、内部の意識から来るテレパシックな印象を感受する方法を詳しく解説し、他人と無言の会話を行う技術を述べた、類書の全く存在しないガイドブック。

6 生命の科学

二〇五頁　一八〇〇円

アダムスキーが他界する数年前に出した Science of Life と題する十二分冊の講座を和訳して一書にまとめたもの。アダムスキーの宇宙的哲学の総まとめ的な一大金字塔で、真実のテレパシーと心霊的な霊界通信の相違を明確にし、心霊現象への接近を警告する画期的な書。

7 アダムスキー論説集

三七〇頁　二五〇〇円

日本GAP機関誌に掲載されたのみで、単行本化されていなかったアダムスキーの論説や講演録等を網羅編纂したもの。特に死去する直前の最後の講演が圧巻。第Ⅱ部にはアダムスキー研究家として名高い久保田八郎が数度渡米してアダムスキーの高弟たちとインタビューした記事を収録。アダムスキーの偉大な面が描写されている。

発行所宛直接注文の場合に限り、左記のように定価・送料をサービスいたします。

☆一冊注文……送料無料。書籍代のみご送金下さい。
☆第一巻より第三巻まで一括注文……特別セット価格七〇〇〇円（送料共）
☆第四巻より第七巻まで一括注文……特別セット価格六五〇〇円（送料共）
☆第一巻より第七巻まで一括注文……全巻セット価格一三〇〇〇円（送料共）

※郵便振替または現金書留でご注文下さい。

文久書林　〒113 東京都文京区西片1-19-10　西片ハウス2F　☎(03)813-9561　振替 東京4-2521

英文版「UFO contactee」No.2刊行中

■60年7月に刊行したNo.1は世界のUFO研究会で絶賛を博しつつあり、長い伝統を誇るイギリスのUFO専門誌Flying Saucer Review誌、イギリスGAP機関誌ニューズレター32号、デンマークGAP機関誌 ufo contact その他が記事を転載して激賞している。また多数の欧米UFO研究グループと機関誌や情報交換のルートを確立、日本GAPは名実共に東洋最大のUFOと宇宙哲学研究グループとして一躍脚光を浴びるに至った。

■第2号も日本GAP・久保田会長が執筆した格調高い英文記事により、A Japanese Boy Who Went Aboard A Flying Saucer!、How To Produce Miracles、1985 GAP-Japan General Assembly その他の記事を満載。会長みずからプロ用大型電子英文タイプライターを駆使してオフセット版下を作成。デザイン、レイアウトから1字1句に至るまで会長が熱意をこめて作ったこの国際的文献をぜひお読み下さい。英語学習用にも好適。

B5判　12頁　最上質アート紙使用　¥300（送料¥170、3冊まで¥240、10冊まで¥350）注文は郵便振替で下記へ。切手代用も歓迎。日本GAP 振替 東京4-35912

UFO contactee
GAP-JAPAN NEWSLETTER International Edition
UFOs & Cosmic Philosophy Services
No.2 FEBRUARY 1986

A Japanese Boy Who Went Aboard A Flying Saucer!

by Hachiro Kubota

"Fact is stranger than fiction" is never more true than when listening to Mr. Warabe Attanaka's story of his own marvelous experiences of boarding a flying saucer. In the light of that, UFOs might be more profound than any other social events. After all he is probably the only person in the world to have visited Egypt not by plane but by a flying saucer!

A Strange Young Man Appears

One night in the summer of 1926, a two-year-old boy named Warabe was in bed in his house located in the suburb of Mazuyama, Ehime-ken (prefecture), Japan when suddenly he was filled with a happy frame of mind and a warm feeling. He thought he heard someone calling, "Come out, my boy!". Going out of the house (traditional Japanese houses in the country at that time were tend to be open in summer because of very sultry weather),he found that there was a tall young man standing by the house.

The stranger was a white man with golden hair and wore a long white robe as the missionaries do sometimes. With a gentle smile he said in standard Japanese, "Let me hold you, boy." Then he took a stroll with Warabe around the village for a while. After that he walked the boy home and disappeared. While walking, the little boy was very happy because there seemed to be much human warmth in the young man.

Every summer the strange tall man appeared near the boy's home from nowhere and called out to him by using mental telepathy. Warabe took great delight in going out with the man, for the stranger had already become a good friend of his.

Warabe did not know his name, so he called him "Uncle". Sometimes Uncle gave the boy such rare gifts as a velocipede which was a great novelty then, and a small metallic box on which a curious design was carved. It was a triangle just like a pyramid on the surface of the box, and on each oblique side was a snake climbing up.

A Large Round Object Standing on the Field

On the night of August 2, 1930, an annual festival took place in the precincts of the shrine where the young white man used to take a walk holding the boy. The five-year-old boy went out with his family to enjoy the festival, wearing a yukata (informal Japanese summer kimono) and putting on geta (Japanese wooden clogs). After the festival ended in a lively way at nine o'clock at night, Warabe returned home and went to bed.

While he was lying in bed not quite falling asleep, he felt again someone calling him gently, "Come out, my boy!". No sooner had he heard the voice in his mind than he woke up and cheerfully went out in his yukata. The man was standing there with a smile as usual.

Uncle was about 200 centimeters tall with hair cut short like that of young girl. His complexion was white like a Caucasian, having clear-cut features and large eyes. In addition, his skin was so smooth that the boy found no traces of a mustache or beard. Uncle was wearing the usual long white dress and white shoes.

He said, "come along with me, my boy." Warabe answered with real delight, "All right," and walked with him at ease. They walked continuously passing by the shrine and the graves until they came to a large field.

昭和62年度

●日本GAP第９回海外研修旅行●

行こう、アダムスキーの大地と謎のマヤ遺跡へ！

アメリカ 東部 西部 メキシコの旅

★旅行期間　昭和62年8月5日→16日

★参加費用　¥578,000
（24カ月分割払いも可）

宇宙的視野を拡大するにはまず私たちのホーム惑星地球の再発見が必要という見地にもとづき、日本ＧＡＰは昭和54年８月に第１回海外研修旅行を実施して以来、世界の謎の遺跡・名所旧跡・大都市などを見学して多大の成果をあげてまいりましたが、昭和62年度は第９回目としてアメリカとメキシコを訪れる旅にしました。過去アメリカへは３度行っていますが今回の訪米は西部に加えて東部の大都市ニューヨークとボストン訪問が特色になっています。またメキシコは古代マヤ民族の謎の遺跡の宝庫であり、ジェームズ・チャーチワードの研究によりムー大陸との関連が知られています。この素晴らしい旅にぜひご参加下さい。

▶旅行の日程大要は次のとおりです。**8月5日**夕方成田空港をノースウェスト航空ジャンボ機で出発。約９時間半の飛行後同日（時差の関係でアメリカは１日遅れる）午前**ロサンゼルス**に到着、ただちに終日の市内観光にはいり、夜は**ロサンゼルス泊**。翌**6日**朝、専用バスでロサンゼルスを出発。アリゾナ州寄りの広漠たるモハービ砂漠の一角**デザートセンター**を視察。ここは1952年11月20日アダムスキーと金星人オーソンが劇的な会見を行った歴史的場所でＧＡＰ会員必見の地点。過去５回実地調査の実績をもち、ロサンゼルスより現地までの道順と現地の地形を知っている日本ＧＡＰ会長・久保田八郎が現地まで案内します（ア氏の会見の詳細については『宇宙からの訪問者』第１部を参照して下さい）。同日夕方ロサンゼルスへ帰着後、**ロサンゼルス泊**。**7日**朝専用バスで南下、**パロマー山**へ登り、アダムスキーが一族と共に生活した山腹の**パロマーガーデンズ**の住居跡を視察。続いて山頂の有名な**パロマー天文台**を見学。今回は大望遠鏡の主鏡位置まで行けるように手配の予定。山を降りてロサンゼルスへ引き返し、夕方ロサンゼルスより空路**メキシコ市**へ飛び、同夜**メキシコ市泊**。**8日**朝専用バスで市の北東50kmの**テオティワカン**大遺跡を見学、雄大な太陽のピラミッドと月のピラミッドに登頂後、他の遺跡群を観光。市内へ引き返して世界的に名高い人類学博物館その他を周遊。同夜**メキシコ市泊**。**9日**早朝メキシコ市より空路タバスコ州の美しい都市**ビリャエルモサ**へ飛び、専用バスで**パレンケ**へ直行。大密林中に息づくマヤ古典期後期（８世紀前半）の聖地遺跡を視察。夕方ビリャエルモサより空路ユカタン州の州都**メリダ**へ到着、同夜は**メリダ泊**。**10日**はメリダ南方80kmのマヤ古典期後期最大の**ウシュマル**遺跡群を見学後、メリダより空路ユカタン半島北端のカンクン着、専用バスで**海岸保養地アクマル**へ行き、同夜**アクマル泊**。**11日**は終日アクマルで**自由行動**。白砂の浜とエメラルドグリーンに輝くカリブ海で**日光浴・海水浴**に興じて終日保養。同夜**アクマル泊**。**12日**午前カンクン空港より空路アメリカの**ニューヨーク**へ飛び、同夜は**ニューヨーク泊**。**13日**午前ニューヨークより空路**ボストン**入り。アダムスキーの高弟として唯一人健在なノースボロ在住の**アリス・ボマロイ夫人と会見**。**ボストン市内を観光**。夕方列車でニューヨークへ帰着後、同夜**ニューヨーク泊**。**14日**、旅行最後の日は終日ニューヨーク市内観光。エンパイアステートビルディング展望

台、その他を周遊。同夜**ニューヨーク泊**。**15日**午後ニューヨークを出発、一路帰国の途につき、ノンストップで13時間半の飛行後、**16日(日)午後成田着**、という日程です。

▶この旅行日程は提携旅行会社の田中正（日本ＧＡＰ東京本部役員）と久保田八郎が過去の経験を生かして綿密に練り上げた手作りのコースで、類似の旅は他社で見られません。特にデザートセンター視察を含むアメリカ西部東部の旅はめったに企画できませんので多数ご参加下されば幸いです。ベテラン添乗員の田中と団体引率の経験豊富な久保田が同行し、心温まるお世話をいたします。ＧＡＰ独特の家族的な雰囲気に満ちた愉快この上ない旅の日々をおすごしの上、忘れがたい思い出を残して下さい。アメリカ、メキシコ共、現地では優秀な日本人ガイドが案内します。

▶旅行中の食事は朝食毎日、昼食６回、夕食５回付きです。24回払いのローンでも行けます（毎月約¥26,000払い）。

▶詳細については下記へハガキで案内書をお申し込み下さい。

〒150 東京都渋谷区東3-24-9、サンイーストビル２Ｆ
ワールドセブントラベル株式会社 田中正(宛)
☎03-499-2461 日・祭・夜間は 0474 77 4728(田中自宅)へ。

企画 日本GAP／主催 株式会社日本旅行(運輸大臣登録一般旅行業第2号)／販売 旅行代理店ワールドセブントラベル株式会社(運輸大臣登録旅行業代理店業1957号)

U.S.A. & MEXICO

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会　費	携　行　品　・　行　事
東京本部	毎月第２土曜日 午後1:30→6:00 **※今年12月のみは第3土曜日の20日に変更。来年1月月例会終了後新年会を開催。会費3000円程度。**	上野公園内「東京文化会館」４階会議室。 ☎03-828-2111。国電「上野駅」の「公園口」下車。改札口の真向かいスグ。 連絡先＝日本ＧＡＰ　☎03-651-0958	会場費 ￥500 セミナー 受講料 ￥1000 計￥1500	1:30→2:30 会員による体験講演。 2:30→4:00 久保田会長の「生命の科学」講義と近況報告、テレパシー練習、休憩。 4:00→6:00 自己紹介、意見発表、質疑応答。
大阪支部	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00 **※10月は大会のため月例会は中止。**	大阪府吹田市出口町４丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	￥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
新潟支部	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00	長岡市今朝白１丁目「けさじろ荘」 ☎0258-33-7400。長岡駅東口より徒歩５分。無料駐車場あり。 連絡先＝星富治夫　☎02579-2-5562	￥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
福岡支部	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00	福岡市天神町５丁目１-23「福岡市民会館」３Ｆ国際会議控室 連絡先＝喜多正宣　☎092-863-5438	￥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第２日曜日 午後1:00→4:30	名古屋市中村区那古野1-47-1「名古屋国際センタービル」５Ｆ第２会議室。☎052-581-5678。 国鉄・名鉄・地下鉄の名古屋駅より徒歩７分。 連絡先＝林　国宜　☎0586-45-6468	￥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・テレパシー練習・座談会。
仙台支部	毎月第４日曜日 午後1:10→4:20 **※10～12月のみ1:00→4:30に変更。**	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725 **※10～12月のみ仙台市東7番丁「仙台市農協会館」二階会議室に変更。**	￥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
山形支部	毎月第１日曜日 午後1:00→5:00	山形市小白川町「社会福祉センター」 ☎0236-42-5181。山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩３分。 連絡先＝清水　正　☎0238-37-5635	￥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
札幌支部	毎月第１日曜日 午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。☎011-271-5821 連絡先＝高野省志　☎011-822-8260	￥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
静岡支部	毎月第１日曜日 午後1:00→5:00 **※62年度1月のみ第3日曜日に変更。**	静岡市黒金町「静岡労政会館」５階会議室。 ☎0542-21-6280。静岡駅北口より徒歩５分。 連絡先＝野口敏治　☎0542-86-7729	￥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表。
旭川支部	毎月第４日曜日 午後1:00→5:00 **※11月のみ支部大会のため月例会は中止。**	旭川市６条通４丁目「勤労者福祉会館」２Ｆ小会議室。☎0166-26-1304。 連絡先＝阿部　堯　☎01658-2-1585	￥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・質疑応答・テレパシー練習。
松山支部	毎月第４日曜日 午後1:00→5:00	**奇数月**：広島市広島駅ビル内「ステーションホテル」５Ｆ会議室。 **偶数月**：松山市民会館会議室。 連絡先＝伊藤達夫　☎0898-22-3060	￥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・座談会。
群馬支部	毎月第２日曜日 午後1:00→5:00	群馬県太田市「社会教育総合センター」３Ｆ。 連絡先＝久保寺信一　店：☎0276-25-5958 自宅：☎0276-45-3544	￥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。座談会。
青森支部	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163 連絡先＝鈴木武男　☎0177-38-1660	￥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。
沖縄支部	毎月第３日曜日 午後1:00→6:00	那覇市寄宮1-2-1「那覇市民会館」１ＦＡ会議室。 ☎0988-55-5081。与儀公園の隣。 連絡先＝新里義雄　☎0988-54-1623	￥500	テキストとして「生命の科学」と「宇宙哲学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。質疑応答・想念観察とテレパシーの研究報告・自己紹介・座談会等。
秋田支部	毎月第２日曜日 午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園１-２「中央公民館」趣味の間。☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	￥200	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会。
神奈川支部	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00	神奈川県川崎市川崎区富士見2-5-2「川崎市立労働会館」第１研修室。☎044-222-4416。国鉄京浜急行「川崎駅」下車。市バス・ふ頭線・労働会館前。 連絡先＝大崎孝典　☎0492-65-0389	￥500	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。研究発表・座談会等。
茨城支部	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00 **※９月は東京総会出席のため中止。10月は移動月例会、詳細は清水まで。**	水戸市梅香１-２「水戸市中央公民館」４Ｆ小集会室。☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	￥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
長野支部	毎月第４日曜日 午後1:30→5:00	塩尻市大門７番町「塩尻市総合文化センター」第１会議室。☎0263-54-1253。塩尻駅下車、徒歩10分。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	￥300	テキストとして「生命の科学」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・座談会・研究発表等。
紀南会	毎月第３日曜日 午後1:00→5:00 **※12月のみ14日に変更。**	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」１Ｆ相談室。☎0735-21-2760。国鉄新宮駅下車、徒歩５分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	￥300	テキストとして「生命の科学」と「宇宙からの訪問者」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。下記以外の旧号も残っています。お問合せ下さい。

No.91 主要記事「**円盤に乗った日本人少年**」伊藤達夫/「**ブラジル人教授の円盤搭乗事件**」/「**質疑応答**」G・アダムスキー/「**太陽系の惑星に知的生物が存在!?**」/「**地球の哲学と宇宙哲学の相違**(2)」松原眞弓

No.92 主要記事「**偉大な惑星から来た兄弟たち**」野口敏治/「**サン・ピエトロ大寺院の異星人**」久保田八郎/「**米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める**」ゴードン・クレイトン/「**質疑応答**」G・アダムスキー/「**地球の哲学と宇宙哲学の相違**(完)」松原眞弓

No.93 主要記事「**月面にいた2機のUFO!**」/「**超低空に出現した大型円盤と黒い人影!**」笠原弘可/「**私も光体を見た**」伊藤達夫/「**多くの館**」G.アダムスキー/「**質疑応答**」G.アダムスキー/「**私は別な惑星へ行ってきた!**」春川正一

No.94 主要記事「**テレパシーで飛来した真っ黒い円盤**」堀江健一/「**八丈富士山麓でUFOを撮影**」谷口美雄/「**地球を救う愛の想念放射運動**」山崎清美/「**母船の周囲には人工大気層がある**」G.アダムスキー/「**私は別な惑星へ行ってきた!**」(連載第2回)春川正一

各¥700　バックナンバーに限り送料は不要

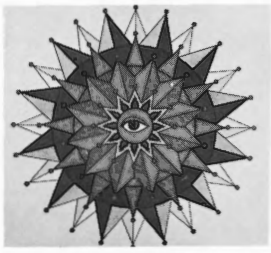
「生命の科学」解説講義録音テープ

昭和61年1月より1年間、東京月例研究会で日本GAP会長・久保田八郎先生が、スペース・ブラザーの指導のもとにアダムスキーの名著「生命の科学」を新しい視野と清新な感覚をもって行う解説講義の録音テープです。テレパシー開発や宇宙的人間を目指すGAP会員必聴の重要資料となるものです。

テープ1本(90分)　¥1000　〒200

※このテープは日本GAPでは取扱いませんので、××月分と記して必ず下記へご注文下さい(1月分より在庫)。

〒430 静岡県浜松市三島町808-2　小島国弘
TEL.0534-42-3507　振替/名古屋7-51065



①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判・カラー写真)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥600 〒120 ②¥300 〒60 一括注文の場合〒120

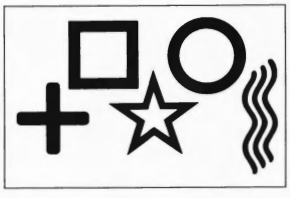
③ゼナーカード

テレパシー練習用

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。

¥600 〒120

①+②+③の場合〒170



会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団/多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう/入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう/

——日本GAP——

日本GAP特別維持会員制のお知らせ

今年七月、会員有志の発案により日本GAPの健全な運営と会長久保田八郎先生のより良きご活動を願って特別維持会員制度を設けており、すでに多数の方のご賛同を頂いております。近年高騰する物価のため普通会費の徴収のみでは会の運営が困難であり、この活動に尊ざされる先生も経済的に無理が生じやすいため、この制度によってGAPと先生を援助しようと有志が結束しました。趣旨をご理解の上多数ご参加下されば幸いに存じます。参加希望の方はハガキで日本GAP内松村芳之宛お申込下さい。趣意書と振替用紙をお送りします。

発起人=篠芳史、松村芳之、東京本部役員一同、野口敏治、伊藤達夫

編集後記

◑十七年前の昭和四十四年七月に東京へ進出し、九月より都内で月例研究会を毎月開催してきた東京本部は、今年八月で二百四回達成したことになります。これを記念して去る九月二十一日、東京銀座ガスホールで盛大な今年度総会を開催しました。特にコンタクティー春川正一氏の応援講演とあって出席者は三百九十五名に達し、大盛況でした。詳細記事は本号30頁より掲載してあります。

◑そこで本号は二百回達成記念特大号として八頁分ふやし、総頁を四十八頁としました。定価は据置きです。読みごたえのある号になったと自負します。次号からは従来どおりの四十頁となりますのでご了承下さい。

◑「茨城県千代田村のUFO」は目撃者とUFO間にテレパシックなコミュニケーションが確立していたと思われるフシがあります。

◑「アダムスキー問題に対する考察」は堂々たる論文で勝負はきまっています。結局、いつの時代でもいかなる問題でも真実は常に勝つといえるでしょう。

◑「私のUFO目撃と不思議な体験」は、いわゆる心霊現象と片づけられるものではなく、体験者の特殊なパワーと能力による透視その他の現象と考えられます。

◑アダムスキーの「質疑応答」連載第五回は都合により本号は休載、次号にまわします。

◑編者の旅行記は多数の読者の要望にこたえて書いたものです。拙文で恐縮ですが、GAP海外研修旅行の素晴らしさの一端を汲みとって下されば幸いです。

◑本号は九月の総会における春川氏の大講演を掲載しましたので連載中の「私は別な惑星へ行ってきた!」は休載し、次号から再び連載します。ご期待下さい。

◑知らせる運動の最も効果のある方法は、本誌を書店に卸して宇宙的カルマのある人の目に触れさせることです。現在約百名のボランティアにより東京と全国の主要書店に本誌が委託販売されています。この輪を広げることが最重要ですから多数の方が書店卸しチームにご参加下さることを望みます。ハガキでお申し込み下されば説明書をお送りします。

◑**東京月例会は毎月第二土曜日に開催していますが、本年十二月のみは第三土曜日の二十日に変更しますのでご注意下さい。来年一月は第二土曜日の十日開催です。終了後恒例の新年会を開きます。会費三千円程度。**(K)

日本GAP機関誌・季刊　冬季号
UFO contactee　95号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-651-0958
振替 東京4-35912
昭和六十一年十月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円

※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

UFO contactee 95号
昭和61年10月20日発行
発行所 日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色1-12-1-511
振替 東京4-35912
定価七〇〇円・送料二〇〇円

OLYMPUS

世界初、ストロボ全速同調。

1/2000
SYNCHRO

OM-4チタン、誕生。オリンパスの光は、フォーカルプレーンシャッターの壁を超えた。

「写るカメラ」ではなく「写すカメラ」の最高峰を目指したOM-4チタン。出発点はマルチスポットの名機OM-4。その性能と信頼の全てを継承し、新たにシャッター速度1/2000秒までのストロボ撮影を可能にした世界初のフルシンクロフラッシュ機構を搭載。映像の可能性を飛躍的に拡大しました。またボディ主要部へチタンを採用するなど耐久性を徹底。想定されるあらゆる撮影条件を克服する頑強なボディを実現しています。

ストロボ新映像領域。OM-4チタン＋フルシンクロフラッシュF280。従来の閃光発光によるストロボ撮影は低速側では対応しますがシャッター幕がスリット状になる高速側では露光ムラができてしまいます。オリンパスではこの問題を1/25秒の光、スーパーFP発光で解決。高速でも画面全体に露光を与えることが可能です。このスーパーFP発光と従来の閃光発光の2つの発光モードを持つTTLオートストロボF280とOM-4チタンの組み合せでストロボ全速同調を実現。絞りを開けて背景のボケを生かすといった高度な日中シンクロ撮影や低速シャッターのブレ効果による動感表現など、ストロボ撮影においても他のどの一眼レフも持ち得ない映像を獲得しています。●OM-4チタン価格/50mmF1.4レンズ付¥159,000・ボディ¥129,000・ハードケース¥6,000●別売/カメラグリップ1¥1,200●フルシンクロフラッシュF280価格¥28,000・ケース¥1,500

マルチスポット/フルシンクロ OLYMPUS
OM-4 Ti

●カタログ請求はハガキに機種名を明記のうえ右記宛までお申し込みください。〒163-91東京都新宿区西新宿1-22-2新宿サンエービルオリンパス光学工業㈱宣伝部UFO係 ●OM-4チタンご購入者全員にズイコーレンズの全貌を紹介した「レンズガイドブック」を送呈。保証書引換カードをお送りください。